

長崎県文化財調査報告書 第192集

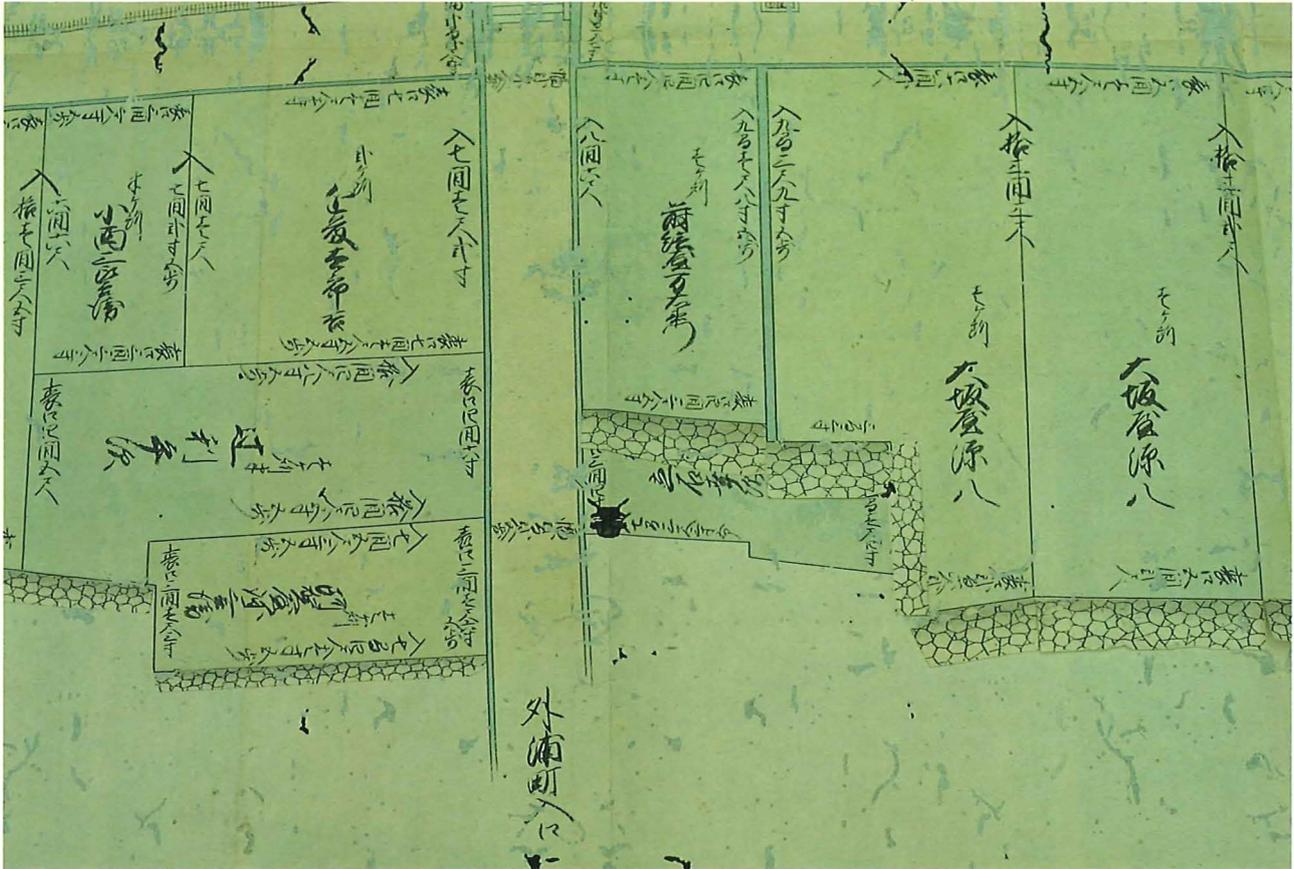
万才町遺跡Ⅱ

県庁新別館増築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

長崎県教育委員会

調査地



長崎絵図 (平戸町)



胞衣検出状況



SK38検出状況（南から）



SK4クルス出土状況



SK 4 遺物出土状況（南から）



SK31完掘状況（南から）



SK41遺物出土状況（北から）



SK39遺物出土状況（東から）

発刊にあたって

本書は、県庁新別館増築工事にともなって行われた、長崎市万才町遺跡まんざいまちいせきの発掘調査報告書です。

万才町遺跡は、平成5年度に発掘調査が行われましたが、火災に伴う焼土層と整地層を基準に、近世長崎の町建てから幕末に至る遺構の変遷を明らかにした点で、画期的な発掘調査でした。本書に掲載する平成17年度の調査は、平成5年度調査区の西側に隣接する地区が対象となりました。残念ながら焼土層や整地層の残存状況が良好でなく、遺構の変遷を追うことは困難でしたが、陶磁器類をはじめとして、大量の遺物が出土しました。陶磁器の中には、中国陶磁をはじめ、東南アジアやヨーロッパからもたらされた遺物もあり、江戸時代に海外への唯一の窓口であった近世都市・長崎の特徴を色濃く反映しています。

長崎では、ここ数年の間に、長崎歴史文化博物館の開館、出島和蘭商館跡建でじまおらんだしょうかんあと造物復元整備の進展と、近世長崎に関する施設の整備が進み、県民の関心と期待も高まっております。本書も歴史研究の資料や学校での教育活動などに活用していただき、県民の関心に少しでも応えることが出来ればと考えております。

最後になりましたが、発掘調査や報告書作成に携わった関係者の皆様に御礼申し上げます。刊行のあいさつといたします。

平成19年3月31日

長崎県教育委員会教育長
横田修一郎

例 言

1. 本書は、県庁新別館増築工事に伴って実施した、万才町遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は、長崎県教育委員会が主体となり、平成18年2月15日から同年3月31日にかけて実施した。
3. 調査関係者は次の通りである。
調査担当 長崎県教育庁学芸文化課埋蔵文化財班 文化財保護主事 川口 洋平
文化財保護主事 中尾 篤志
国際航業株式会社 伊藤敬太郎・飯田秀樹・竹内眞哉・安村 健・土岐耕司・長尾聡子・辻本 彩
4. 調査区周辺の地形測量・土層図および遺構実測図作成は、すべて国際航業(株)に委託した。また、発掘現場での写真はすべて調査担当者が撮影した。
5. 遺物の実測は、平田賢明・一瀬裕子・今利陽子・小川博美・末吉紗矢香・野島愛子・浜崎美加・林田志保美・横田愛子が行った。トレースは、中尾・平田・浜崎・横田・和田美加が行った。また、製図作業において成田万里の協力を得た。CD-ROM収録の遺物写真撮影は平田が行った。
6. 本書に掲載した遺物・写真・図面類は、すべて長崎県教育庁学芸文化課資料整理室に保管している。
7. 発掘調査から報告書作成に至るまで、以下の方々にご協力頂いた。
大橋康二（佐賀県立陶磁文化館）、櫻木晋一（下関市立大学）、柚木亜貴子（長崎市教育委員会）
8. 本書の執筆は分担執筆とし、執筆者は目次に示した。総編集は、中尾・平田の協力を得て川口が行った。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯（中尾）	1
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境（中尾）	2
第Ⅲ章 調査の概要	
1. 調査の方法（中尾）	5
2. 検出遺構（中尾）	5
3. 出土遺物	
(1) 土器・陶磁器（川口）	27
(2) 石製品・土製品・焼塩壺・鉄製品（平田）	47
(3) 銭貨（平田）	50
附篇 1 ガラス製品（柚木亜貴子）	54
附篇 2 万才町出土の瓦（安村健・鳥越道臣）	56
附篇 3 長崎市万才町遺跡出土の動物遺存体（土岐耕司・皆川貴史）	64
第Ⅳ章 まとめ（川口）	68

挿図目次

第1図 万才町遺跡位置図①	1	第17図 万才町遺跡遺構群の変遷①	21
第2図 万才町遺跡位置図②	3	第18図 万才町遺跡遺構群の変遷②	22
第3図 万才町遺跡グリット配置図	5	第19図 出土遺物実測図①	28
第4図 遺構配置図①	6	第20図 出土遺物実測図②	29
第5図 遺構配置図②	7	第21図 出土遺物実測図③	30
第6図 遺構配置図③	8	第22図 出土遺物実測図④	31
第7図 遺構配置図④	9	第23図 出土遺物実測図⑤	32
第8図 遺構配置図⑤	10	第24図 出土遺物実測図⑥	33
第9図 遺構配置図⑥	11	第25図 出土遺物実測図⑦	34
第10図 基本土層図①	12	第26図 出土遺物実測図⑧	35
第11図 基本土層図②	13	第27図 出土遺物実測図⑨	36
第12図 遺構実測図①	15	第28図 出土遺物実測図⑩	37
第13図 遺構実測図②	16	第29図 出土遺物実測図⑪	38
第14図 遺構実測図③	17	第30図 出土遺物実測図⑫	39
第15図 遺構実測図⑤	18	第31図 出土遺物実測図⑬	40
第16図 遺構実測図⑥	19	第32図 出土遺物実測図⑭	41

第33図	出土遺物実測図⑮	42	第40図	出土遺物実測図⑳	50
第34図	出土遺物実測図⑯	43	第41図	ガラス製品	55
第35図	出土遺物実測図⑰	44	第42図	軒丸瓦・軒平瓦・平瓦	59
第36図	出土遺物実測図⑱	45	第43図	軒丸瓦	60
第37図	出土遺物実測図⑲	46	第44図	軒平瓦・丸瓦・道具瓦	61
第38図	出土遺物実測図⑳	48	第45図	軒丸瓦・軒平瓦	62
第39図	出土遺物実測図㉑	49	第46図	軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦	63

表 目 次

第1表	万才町遺跡関連年表	4	第8表	遺物観察表②	52
第2表	遺構観察表①	23	第9表	遺物観察表③	53
第3表	遺構観察表②	24	第10表	ガラス製品観察表	55
第4表	遺構観察表③	25	第11表	遺構出土の動物遺存体	64
第5表	遺構観察表④	26	第12表	基本土層とその他出土の動物遺存体	65
第6表	出土銭貨観察表	50			
第7表	遺物観察表①	51			

図 版 目 次

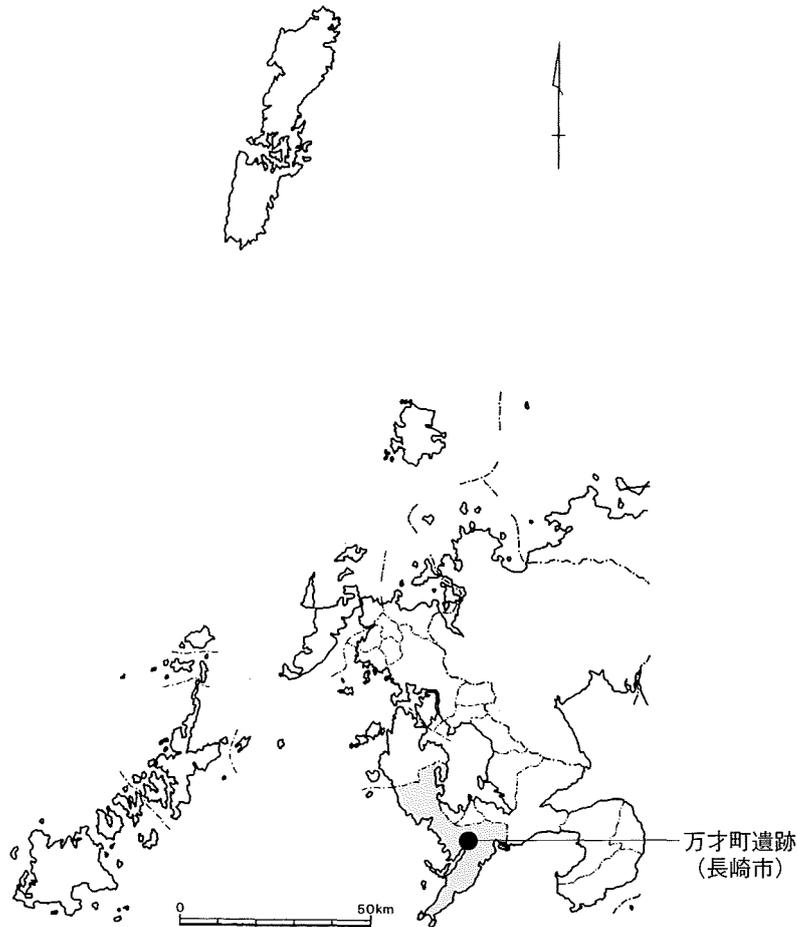
PL 1	万才町遺跡出土動物遺存体	67
図版 1	調査風景／SK 4 遺物出土状況／SK 4 クルス出土状況／SK 4 完掘状況	70
図版 2	SK31完掘状況／SK41遺物出土状況／SK41出土銭貨	71
図版 3	SD 1 完掘状況／SD 6 検出状況	72
図版 4	埋甕 1 検出状況／埋甕 2 土層／石組 1 検出状況／石組 2 検出状況	73

第 I 章 調査に至る経緯

万才町遺跡は長崎市万才町に所在する、近世を中心とした遺跡である。周辺には、長崎県庁や長崎市役所・裁判所・消防署などの公官庁が集中し、行政の中核となっている。このため、道路の改良や建物の改修といった開発工事が頻繁に行われている。

万才町遺跡の調査は過去 5 回行われている。このうち、長崎県教育委員会が1993（平成 5）年に実施した、県庁新別館建設に伴う発掘調査では、江戸時代の焼土層とその後の整地層を鍵層として、16 世紀末～19 世紀にかけての近世長崎の遺構群の変遷を明らかにした点で、画期的な調査であった。この調査により、万才町遺跡周辺に近世の遺構群が良好な状態で遺存していることが周知されることとなった。また、1995（平成 7）年に長崎市教育委員会が実施した朝日生命ビル建設に伴う発掘調査では、同様に近世の遺構群を検出するとともに、弥生時代後期の土器や仿製鏡等が出土し、弥生時代から人々が居住していたことを明らかにした。

今回の調査は、現在の県庁新別館を西側に増築する計画が持ち上がったことが発端となった。増築予定地は、1993（平成 5）年度調査地点の西側に隣接することから、近世の遺構群が良好に遺存している可能性が高く、事業課である管財課と協議を重ねた結果、増築の対象となる180㎡について、長崎県教育委員会が主体となって本発掘調査を実施することとなった（第 2 図）。調査期間は、平成18 年 2 月15日～平成18 年 3 月31日である。



第 1 図 万才町遺跡位置図① (S = 1/200,000)

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境 (第1図・第2図)

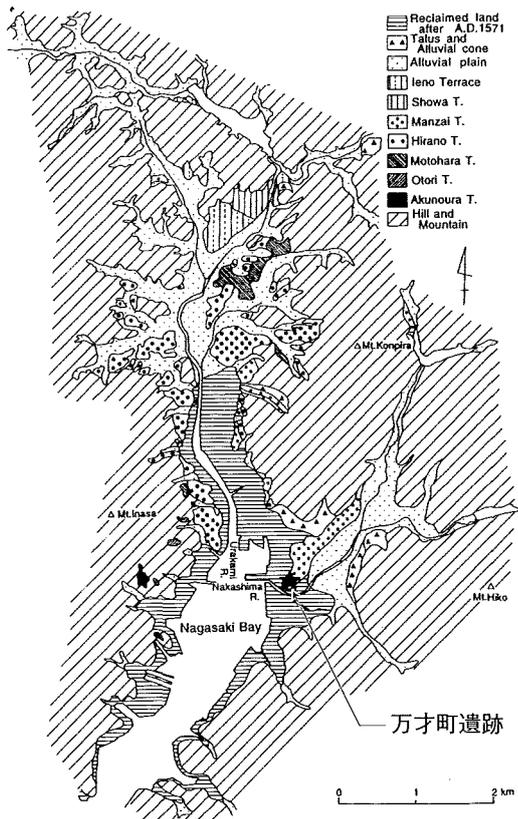
長崎市市街地は、南南西方向に開く細長い閉塞性内湾である長崎湾に面している。この長崎湾に向かって北から浦上川、東から中島川が流入し、この2河川に沿って細長い沖積平野が形成されている。周囲には、岩屋山(標高475.2m)、稲佐山(標高340.3m)、英彦山(標高385.6m)、金比羅山(標高366.3m)といった鮮新世の山塊群が展開するが、これらは長崎火山岩群と呼ばれる安山岩または玄武岩で構成される。この長崎火山岩類を解析する浦上川・中島川両河川により、至る所に河成段丘が形成されているが、万才町遺跡の乗る万才町段丘もその一つである(第2図)。万才町段丘は、2河川の河口付近に形成された段丘で、後述する低地部の埋め立てが進む以前は、海に突き出た細長い岬状の景観を呈していたものと考えられる。段丘の堆積物は、厚さ15m以上の安山岩質亜円の中～巨礫層が確認されており、更新世に形成された段丘と考えられる。

低地部は主に谷底平野からなり、扇状地や三角州、自然堤防等の発達が悪い。埋め立て地は、谷底平野の標高3m以下に分布している。長崎湾の埋め立ては、1570年の長崎開港後、近世長崎の建設と拡張と歩調を合わせて進行していく。長崎の町建ては、1571年、万才町段丘上に建設された六町を皮切りに、1592年内町二十三町は万才町段丘崖下の河岸まで、1597年の外町七十七町は中島川河口部の干潟や氾濫原に進出し、これに伴って小規模な埋め立てが進行したのと考えられる。本格的な埋め立てが始まったのは1636年出島の造築以降で、その後1702年銅座川河口部での新地蔵所の造築や、1730年の新田開発等に伴って中島川河口部の埋め立てが進行した。明治時代以降第二次世界大戦まで3回の港湾改修により、出島・新地・大浦周辺・長崎駅周辺が埋め立てられ、現在の海岸線の原型が完成した。戦後は長崎湾東岸の棧橋整備や、西岸の三菱重工長崎造船所の埋め立て、さらに1996年以降の中島川河口周辺の埋め立てにより、現在に至っている。

2. 歴史的環境 (第2図)

長崎市市街地での人間活動の痕跡は縄文時代以降に確認でき、中島川流域の谷底平野に立地する磨屋町遺跡では、縄文時代晩期の低湿地型貯蔵穴や打製石斧などが出土している。万才町段丘周辺では、弥生時代～古墳時代にかけての石棺墓が興善町遺跡から、古墳時代の仿製鏡が万才町遺跡から見つかっていて、県内の他の地域と同様、海に面した岬状の段丘上がこれらの時期に墓域として利用されていたことが分かる。その後、中世には桜町遺跡で成人女性を埋葬した土壙墓を検出しており、埋葬の場としての利用は継続する。生活の場として本格的に利用されたことが確認できるのは近世以降である。1571年、大村純忠による長崎六町の建設後、イエズス会に寄進されキリシタン文化が開花した。しかし、1587年のバテレン追放例とその後の禁教令により、長崎の教会は破壊されることになる。その後、出島の建設と鎖国の完成により、海外への唯一の窓口となった長崎は、人・モノ・情報が集積する都市として発展した。このように、長崎の近世史は、時代背景の大きなうねりの中でその性格が大きく変化する点に特徴がある(第1表)。

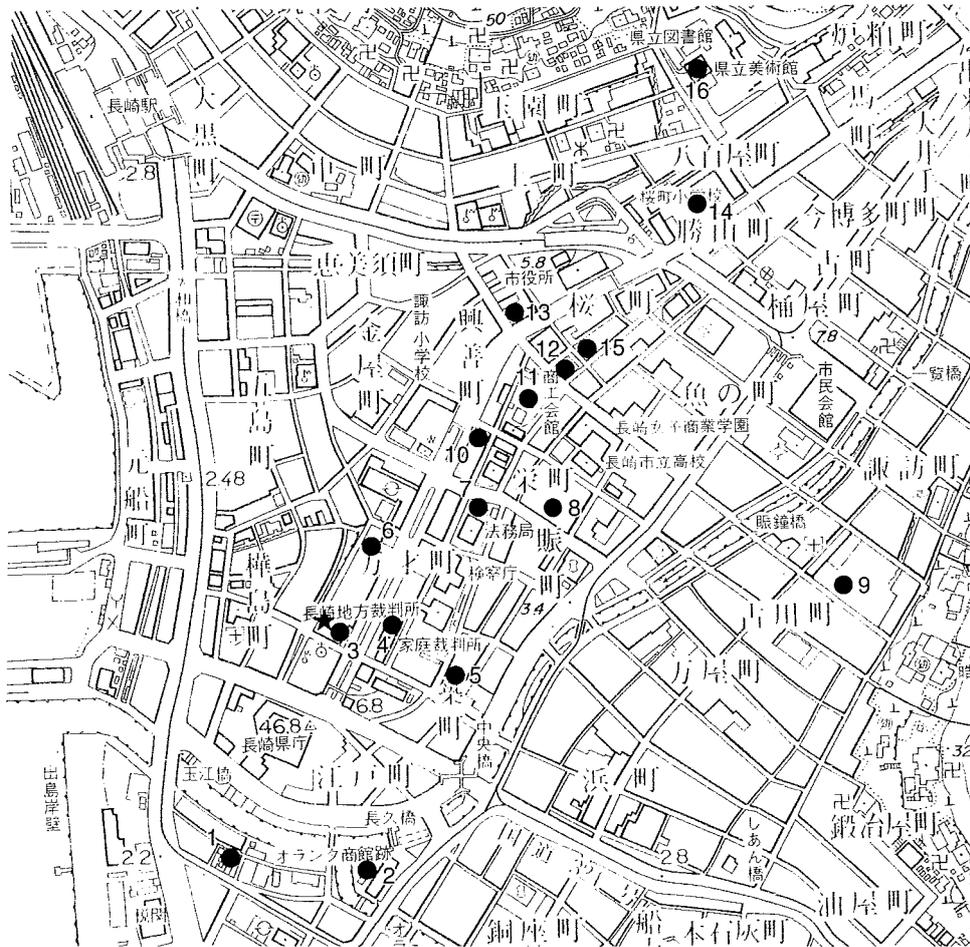
万才町遺跡周辺は、六町の一つである大村町および平戸町に相当し、長崎奉行所と長崎奉行所西役所をつなぐ幹線道路の沿線に位置していることから、近世を通じて有力町人や商人、地役人などが居



長崎市街地周辺地質図



万才町遺跡調査区位置図



1. 出島和蘭商館跡
2. 銅座町遺跡
(対馬藩蔵屋敷跡)
3. 万才町遺跡
(県庁新別館)
4. 万才町遺跡
(高島秋帆宅跡)
5. 築町遺跡
6. 万才町遺跡
(朝日生命ビル)
7. 万才町遺跡
(松尾宅跡)
8. 栄町遺跡
9. 磨屋町遺跡
10. 興善町遺跡
(八尾宅跡)
11. 興善町遺跡
(徳見宅跡)
12. 桜町遺跡
(県警察庁舎)
13. 桜町遺跡
(制札場跡)
14. 勝山町遺跡
15. 桜町遺跡
16. 長崎奉行所
(立山役所) 跡

第2図 万才町遺跡位置図② (S = 1/100,000 · 1/10,000 · 1/2,500)

住する一等地であった。一方で、万才町遺跡の一带はたびたび大火に見舞われたことが文献に記載されており、このことは発掘調査でも追認されている。近世長崎の発掘調査は、大火の際に形成された火災層とその後の整地層を鍵層として、遺構を把握する方法が次第に定着してきている。万才町遺跡の過去の発掘調査では、町建て時から明治時代に至る遺構群を層位的に検出しており、遺物も16世紀後半～17世紀初頭の花十字文瓦やメダイといったキリシタン関連遺物や、17世紀後半の輸出向け初期伊万里など、近世長崎の特徴を色濃く反映した遺物が出土している。この他にも近隣の調査では数多くの遺構・遺物が出土しており、次第に資料の蓄積が進み、その歴史像が具体的に明らかになりつつある。

【主要参考文献】

- 長岡信治・前田泰秀・奥野 充 1999「長崎湾および長崎低地の沖積層と完新世の古地理変遷」『第四紀研究』38-2
 宮崎貴夫編 1995『万才町遺跡』長崎県文化財調査報告書第123集 長崎県教育委員会

第1表 万才町遺跡関連年表

西暦	年号	時期	できごと	関連遺構・遺物
1570	元亀元	大村領期	長崎開港	
1571	元亀2		大村純忠、長崎に六町を建設	中国陶磁類
1580	天正8	教会領期	大村純忠、長崎をイエズス会に寄進する	
1587	天正15	豊臣公領期	豊臣秀吉、パテレン追放令を出し、長崎を没収する	
1596	慶長元		サンフェリパ号事件がおこる。26聖人殉教	
1601	慶長6	徳川公領期	長崎で火災がおこる（慶長火災）	焼土層と整地層
1612	慶長17		長崎にキリシタン禁教令が出される	
1614	慶長19		長崎の教会11カ所が破壊される	花十字文瓦・メダイ
1633	寛永10		長崎奉行屋敷より出火し、5・6町焼失（寛永大火）	焼土層と整地層
1636	寛永13		出島が完成する	
1639	寛永16		江戸幕府、ポルトガル船の日本渡航を禁止する（鎖国の完成）	
1641	寛永18		平戸のオランダ商館を出島に移す	
1663	寛文3		大火があり、63町が全半焼する（寛文大火）	焼土層と整地層 ・整理土坑
1680頃	延宝末頃		『寛文長崎図屏風（箔屋屏風）』描かれる	
1711～1715	正徳年間		篠崎利兵衛、山田鉄枝、笹山八郎衛門らが居住	『大村町絵図』
1715	正徳5		江戸幕府、正徳新令を出し貿易を制限	
1838	天保9		天保の大火	焼土層と整地層
1841	天保12		久富與次兵衛が居住。オランダ貿易を開始（蔵春亭長崎支店）	色絵磁器・西洋陶器
1859	安政6		長崎開港	

第Ⅲ章 調査の概要

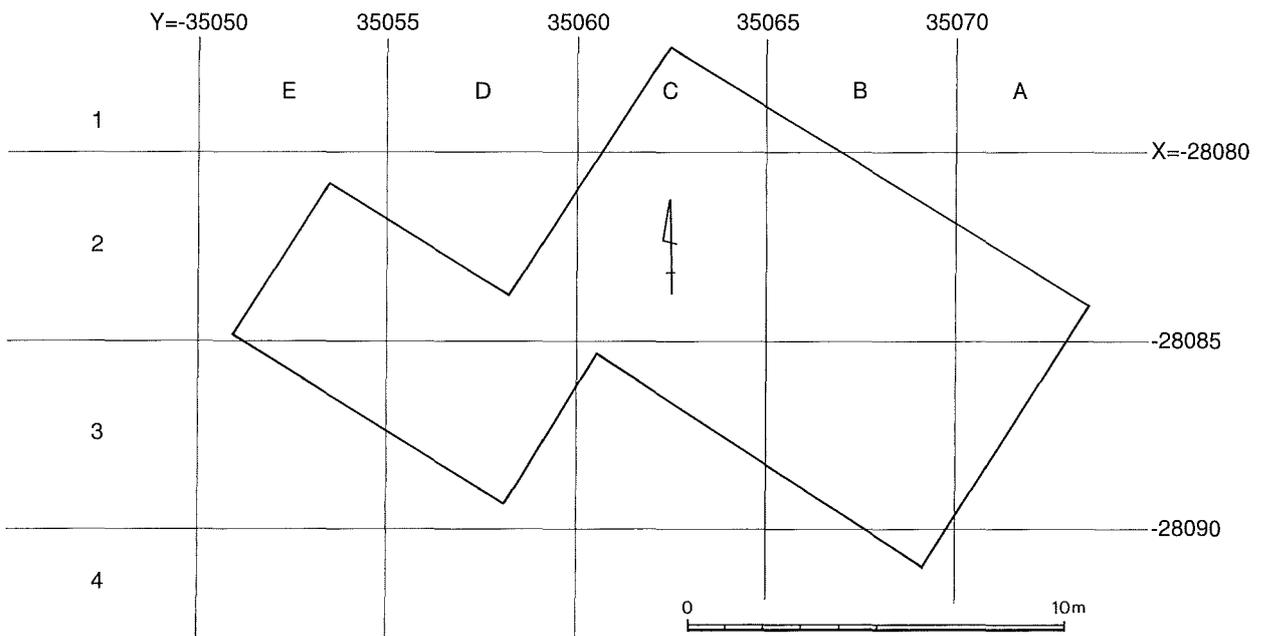
1. 調査の方法

まず、調査区全体に国土座標に基づいて5m四方のメッシュをかけ、東西方向にA～E、南北方向に1～4の記号を付してグリットを設定した(第3図)。また調査区近辺に排土仮置き場を確保する必要から、東半部と西半部に分けて調査を行った。調査方法は、バックホーで近現代の攪乱層を除去した後、近世包含層以下を人力により掘削した。また、調査区内に土層確認用の東西ベルトと南北ベルトを設置し、遺構を掘り下げた。検出した遺構は、土坑48基、ピット31基、溝状遺構6基、埋甕遺構2基、石敷き遺構2基、石組遺構3基、胞衣2基である。なお、出土した遺物は遺構毎に取り上げ、包含層出土遺物はグリット別・層位別に一括して取り上げた。

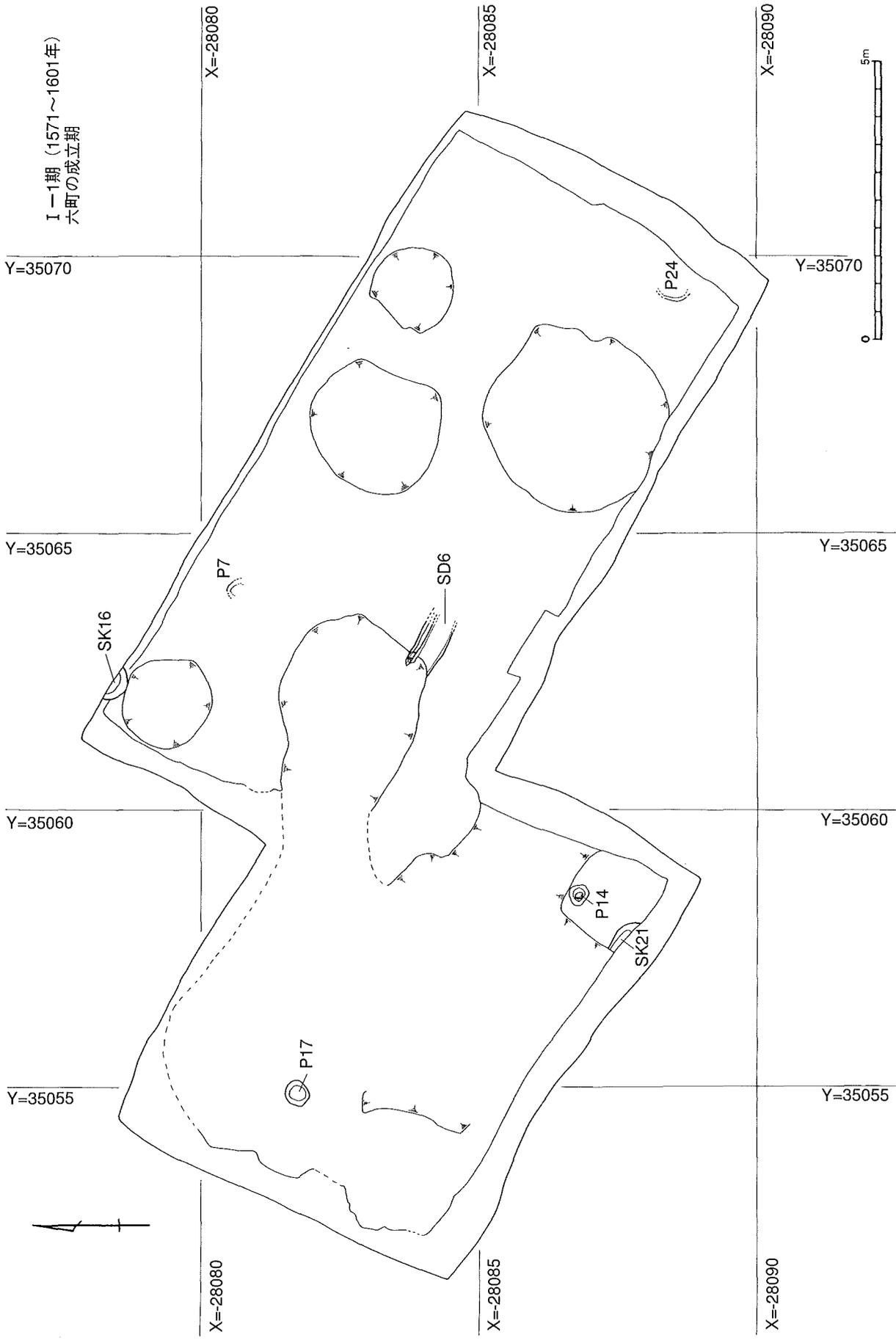
2. 検出遺構

(1) 遺構群の概要

調査区の基本土層は次の通りである(第10図・第11図)。1層は表土、2層は黒褐色土で炭化物や焼土を含む。3層は褐灰色粘質土で部分的に炭化物が集中的に堆積している。天保の火災層である。4層は暗灰黄色粘質土で焼土および風化礫を含み、寛文大火後の整地層とみられる。5層は灰褐色粘質土で、大量の焼土と炭化物を含んでおり、寛文大火時の堆積層である。6層は黒褐色粘質土で、炭化物および焼土を含んでおり、慶長火災時の堆積層。またこの上層に部分的に暗灰黄色粘質土が堆積しており、慶長火災後の整地層と考え6'層とした。7層はにぶい黄褐色粘質土で、町建て時の整地層である。これらの土層は、火災に伴う廃棄土坑や近現代の攪乱により、焼土層や整地層が調査区全面に展開しておらず、調査の段階で同時期の遺構群を面的に確認することはできなかった。そのため、遺構群の整理に際しては出土遺物を重視し、万才町1995や川口2005を参考に、第4図～第9図の通り時期区分を行って整理した。

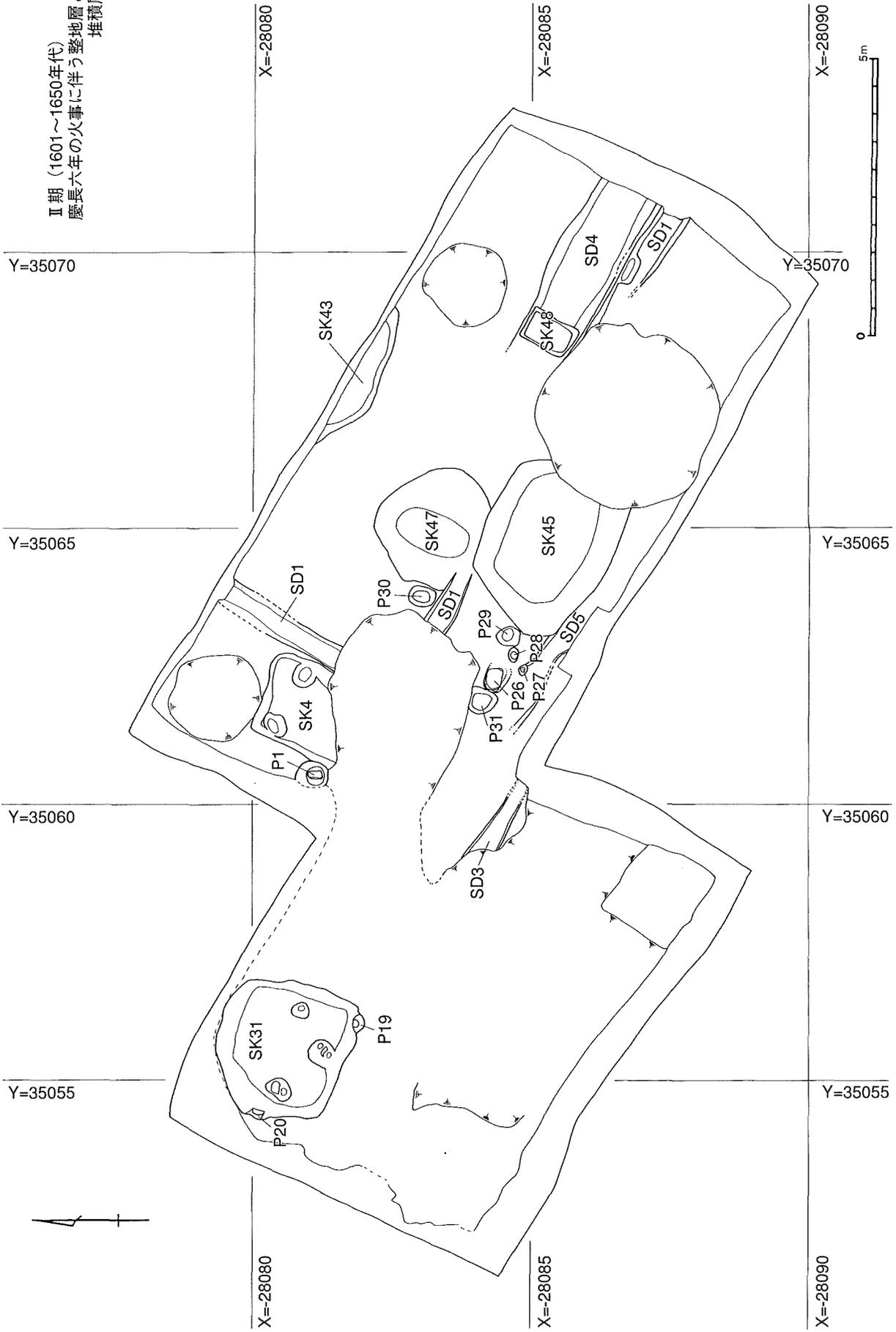


第3図 万才町遺跡グリット配置図 (S = 1/200)

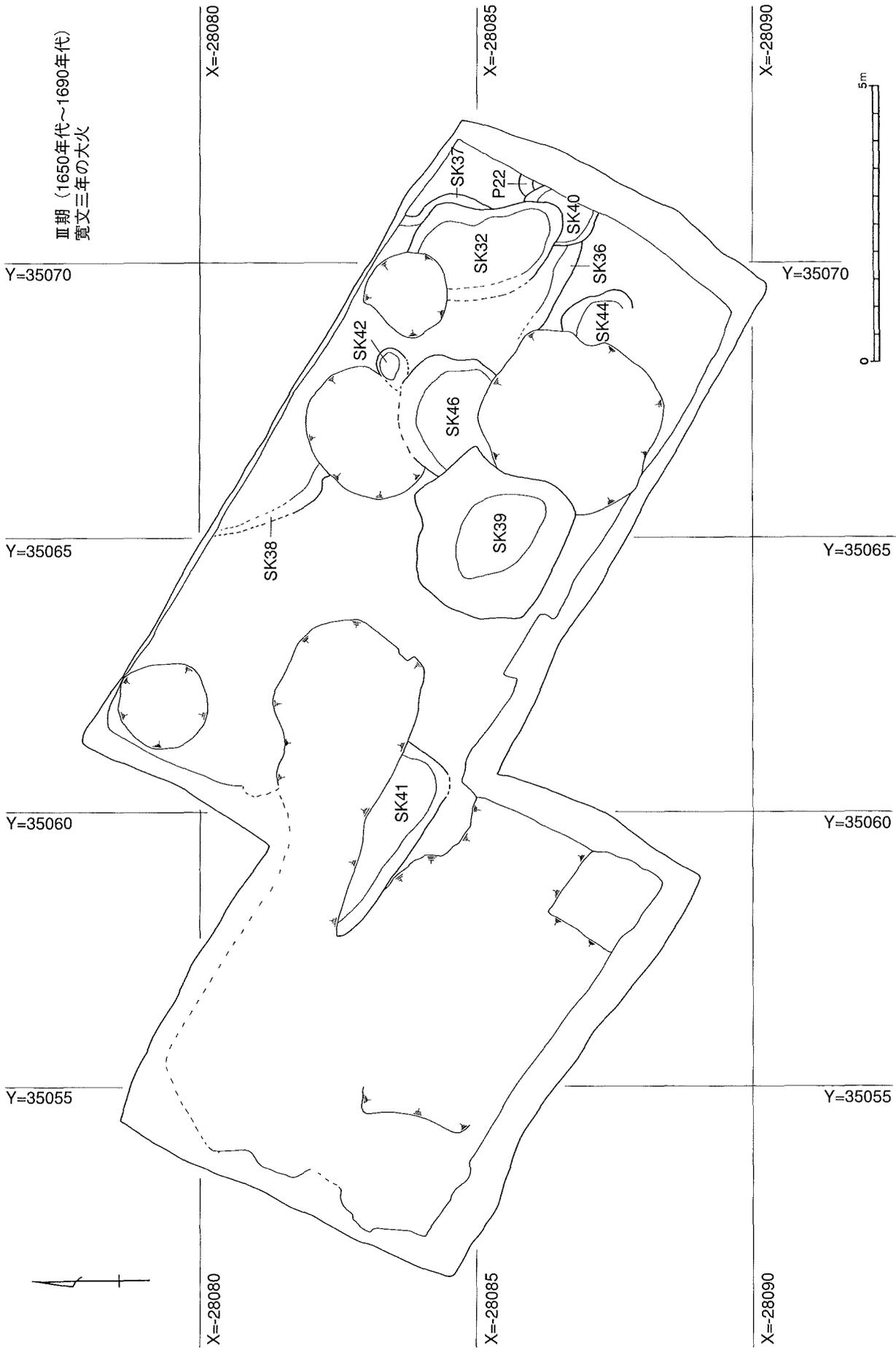


第4図 遺構配置図① (I期) (S=1/100)

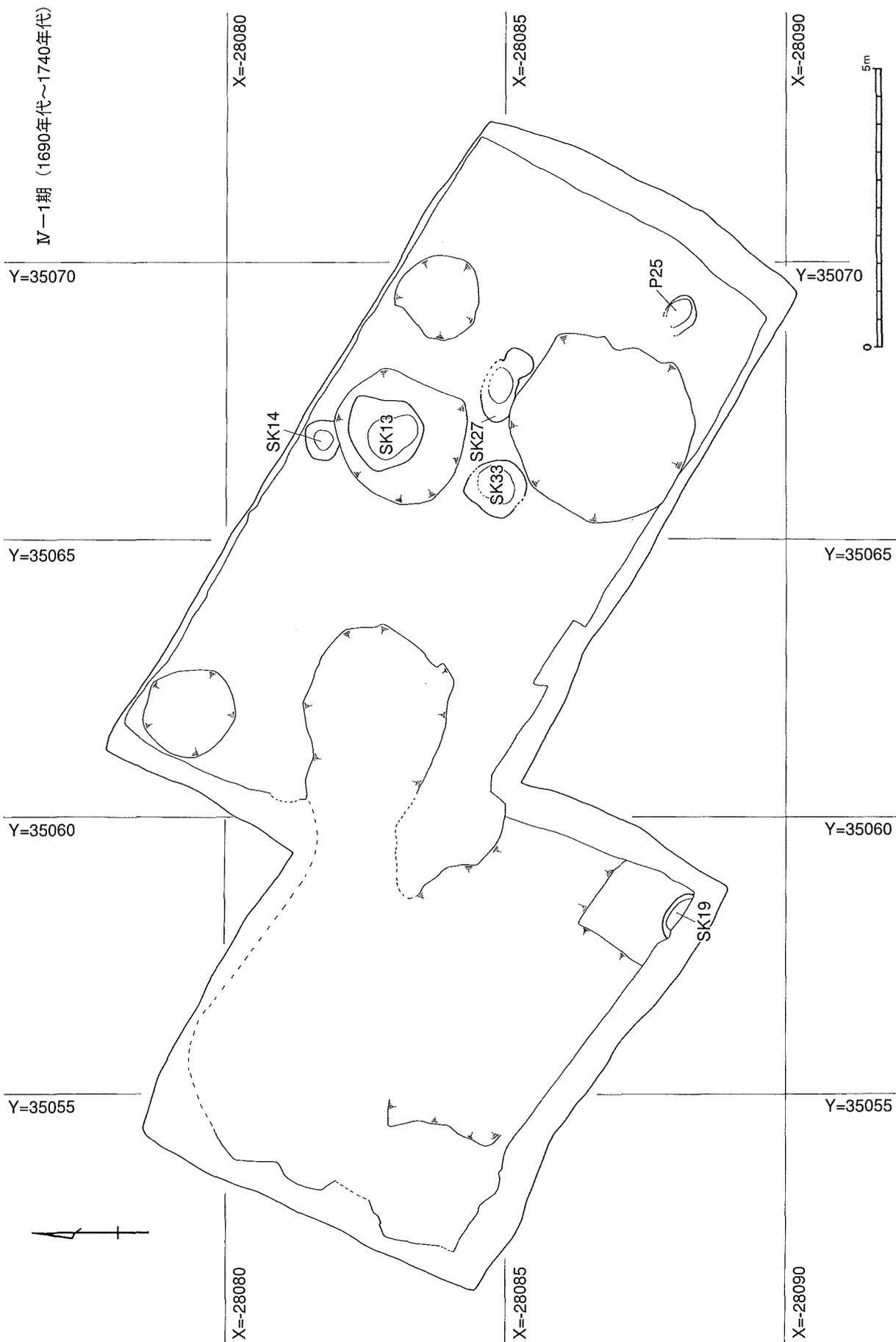
Ⅱ期 (1601~1650年代)
慶長六年の火事に伴う整地層と
堆積層



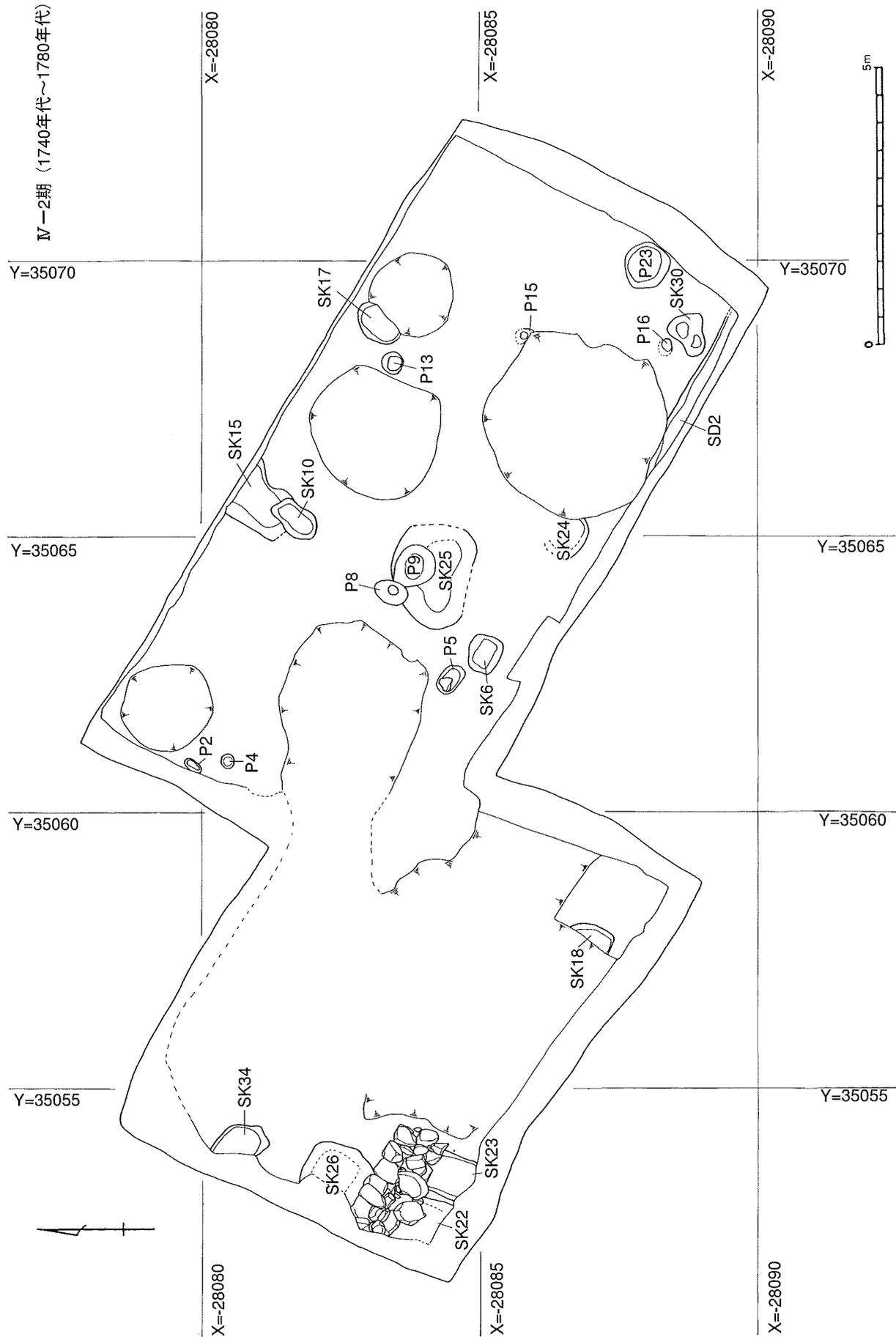
第5図 遺構配置図② (Ⅱ期) (S=1/100)



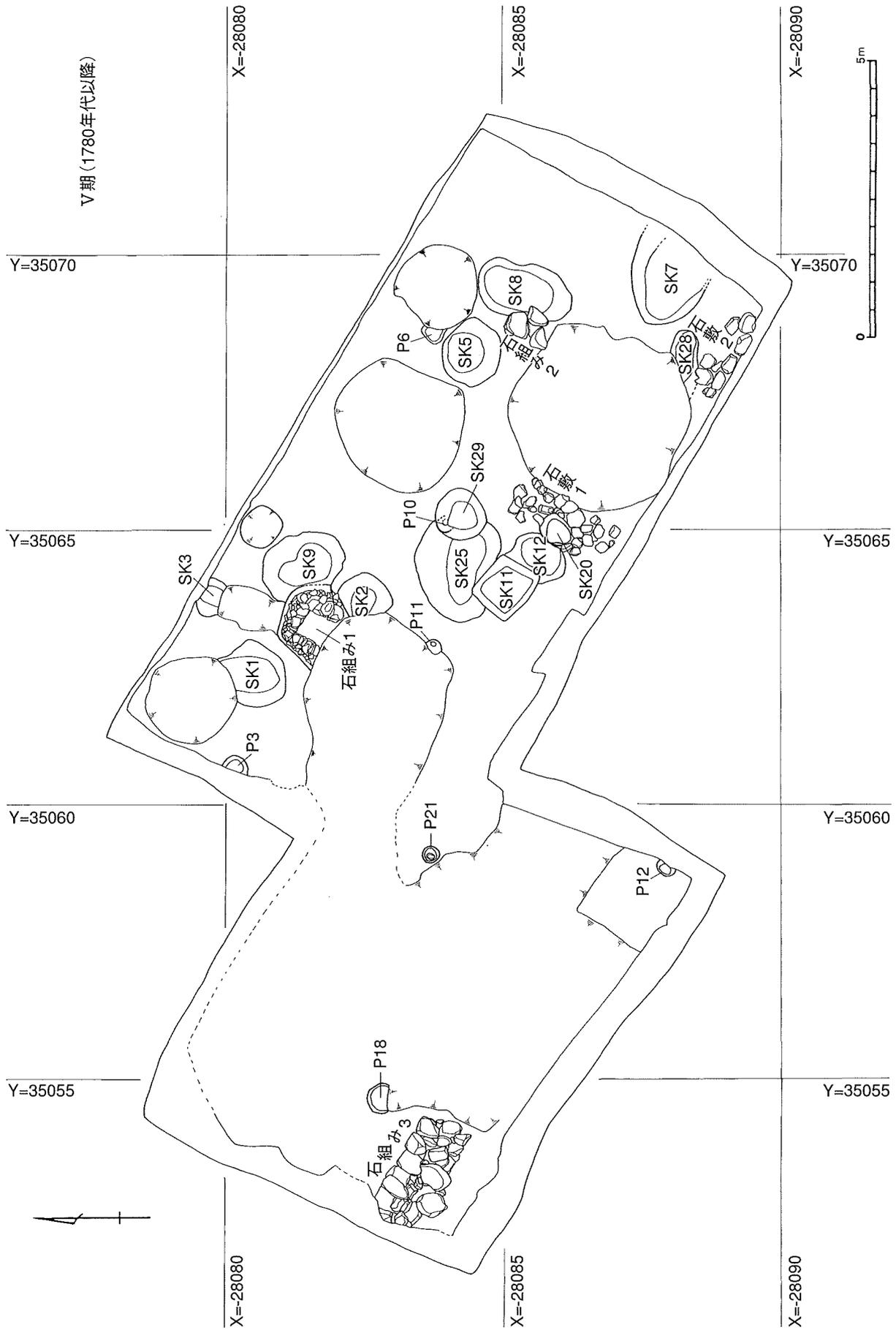
第6図 遺構配置図③ (III期) (S = 1/100)



第7図 遺構配置図④ (IV-1期) (S=1/100)

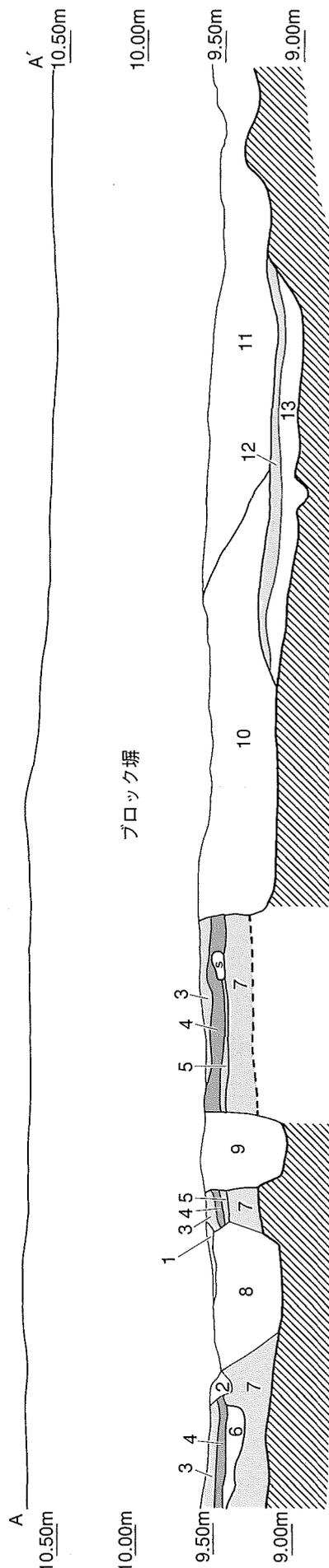


第8図 遺構配置図⑤ (IV-2期) (S=1/100)



第9図 遺構配置図⑥ (V期) (S = 1 / 100)

※土層の薄いアミカケは整地層，濃いアミカケは焼土層



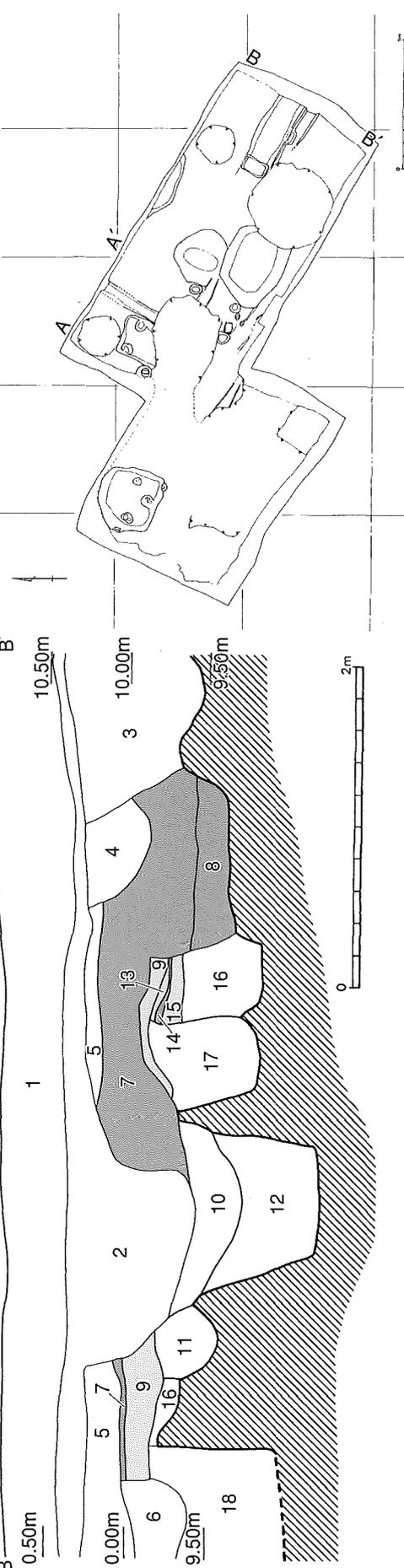
ブロック塀

コンクリートブロック・バラス等を多量含む土の集積層
 1-5cmの炭化物，0.3-3cmの焼土を中量，0.5-20cmの焼中量，瓦片を中量含む
 0.1-5cmの炭化物を少量，0.1-0.3cmの焼土を少量，0.1-0.5cmの炭化物を少量含む
 0.5-20cmの炭化物を中量，瓦片，目録片を少量含む
 3-5cmの炭化物を少量含む
 0.1-0.7cmの炭化物を少量，0.5-1cmの炭化物を少量含む
 0.2-0.5cmの炭化物を少量，0.5-1cmの炭化物を少量含む
 0.2-0.5cmの炭化物を少量，0.5-1cmの炭化物を少量含む
 0.1-3cmの炭化物を少量，0.5-1cmの炭化物を少量含む
 1-3cmの炭化物を少量，0.5-1cmの炭化物を少量含む
 3-5cmの炭化物を少量，0.5-1cmの炭化物を少量含む
 0.1-0.3cmの炭化物を少量，0.5-1cmの炭化物を少量含む
 0.1-0.3cmの炭化物を少量，0.5-1cmの炭化物を少量含む
 0.1-0.7cmの炭化物を少量，0.5-1cmの炭化物を少量含む
 0.1-0.7cmの炭化物を少量，0.5-1cmの炭化物を少量含む
 炭化物・焼土は層下方に集中する
 0.2-0.3cmの炭化物を少量，1-3cmの焼土を少量含む

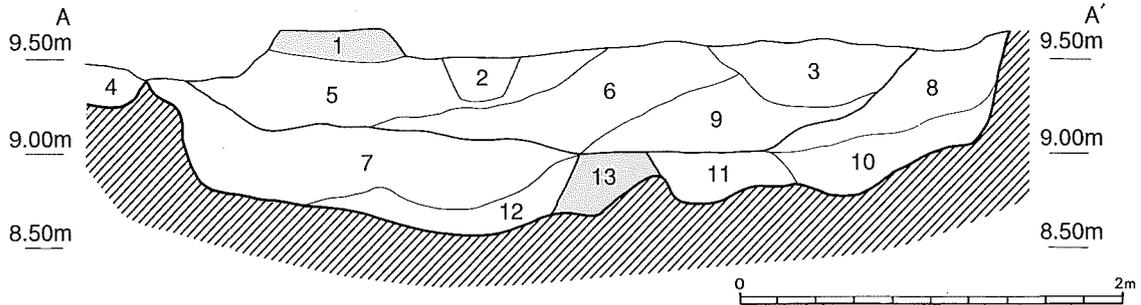
- 1. 7.5YR4/2 灰褐色粘質土
- 2. 10YR3/2 黒褐色粘質土
- 3. 10YR3/2 黒褐色粘質土
- 4. 2.5Y3/2 黄褐色粘質土
- 5. 10YR4/1 黄褐色粘質土
- 6. 10YR4/1 黄褐色粘質土
- 7. 7.5YR4/1 黄褐色粘質土
- 8. 7.5YR4/1 黄褐色粘質土
- 9. 2.5Y4/2 黄褐色粘質土
- 10. 10YR4/4 黄褐色粘質土
- 11. 2.5Y4/2 黄褐色粘質土
- 12. 2.5Y5/2 黄褐色粘質土
- 13. 10YR4/1 黄褐色粘質土
- 14. 10YR4/1 黄褐色粘質土
- 15. 10YR4/1 黄褐色粘質土
- 16. 2.5Y5/3 黄褐色粘質土
- 17. 10YR4/1 黄褐色粘質土
- 18. 2.5Y5/3 黄褐色粘質土

0.3-0.5cmの炭化物を少量，0.1-0.2cmの焼土を少量含む。
 鉄・コンクリート片を少量含む焼中量，0.1-0.3cmの炭化物を少量含む。
 0.1-0.3cmの炭化物を少量，0.1-0.3cmの炭化物を少量含む。
 0.1-0.3cmの炭化物を少量，0.1-0.3cmの炭化物を少量含む。
 3-5cmの炭化物を少量含む。
 0.1-0.7cmの炭化物を少量，0.5-1cmの炭化物を少量含む。
 0.3-1cmの炭化物を少量，0.5-1cmの炭化物を少量含む。
 3-5cmの炭化物を少量，0.5-1cmの炭化物を少量含む。
 2-10cmの炭化物を少量，0.5-1cmの炭化物を少量含む。
 0.3-2cmの炭化物を少量，0.5-1cmの炭化物を少量含む。
 0.1-0.3cmの炭化物を少量，0.5-1cmの炭化物を少量含む。
 0.2-0.5cmの炭化物を少量，0.5-1cmの炭化物を少量含む。
 0.1-0.3cmの炭化物を少量，0.5-1cmの炭化物を少量含む。
 0.1-0.3cmの炭化物を少量，0.5-1cmの炭化物を少量含む。
 0.1-0.3cmの炭化物を少量，0.5-1cmの炭化物を少量含む。
 炭化物・焼土は層下方に集中する。
 0.2-0.3cmの炭化物を少量，1-3cmの焼土を少量含む。

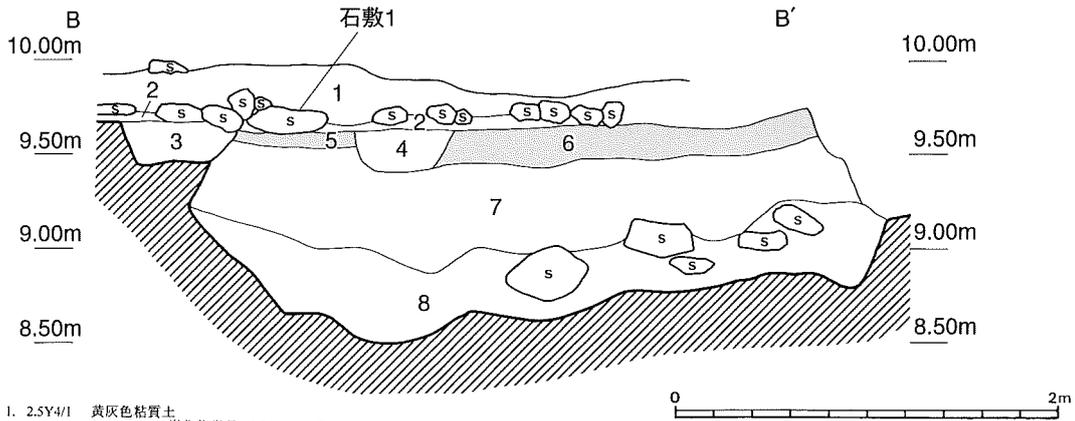
- 1. 7.5YR4/2 灰褐色粘質土
- 2. 10YR4/1 黄褐色粘質土
- 3. 7.5YR4/1 黄褐色粘質土
- 4. 10YR3/2 黒褐色粘質土
- 5. 10YR3/2 黒褐色粘質土
- 6. 10YR3/2 黒褐色粘質土
- 7. 7.5YR4/1 黄褐色粘質土
- 8. 7.5YR4/1 黄褐色粘質土
- 9. 2.5Y4/2 黄褐色粘質土
- 10. 10YR3/2 黒褐色粘質土
- 11. 10YR4/2 黄褐色粘質土
- 12. 2.5Y5/2 黄褐色粘質土
- 13. 10YR4/1 黄褐色粘質土
- 14. 10YR4/1 黄褐色粘質土
- 15. 10YR4/1 黄褐色粘質土
- 16. 2.5Y5/3 黄褐色粘質土
- 17. 10YR4/1 黄褐色粘質土
- 18. 2.5Y5/3 黄褐色粘質土



第10図 基本土層図① (S=1/40)

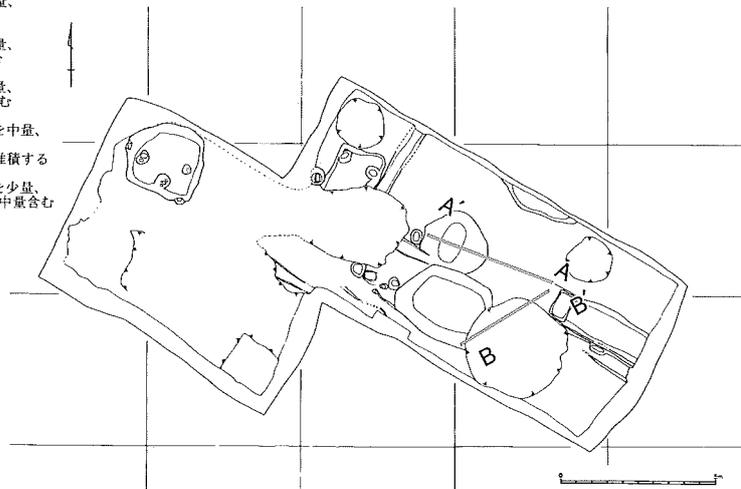


- (4層) 1. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 0.1-0.3cmの焼土を微量、2-5cmの礫を少量、3-5cmの粘土(10YR5/6 黄褐色)を多量含む。
- (SK39) 2. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 0.1-0.2cmの炭化物を微量、2-5cmの礫を大量含む。
- (SK36) 3. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 5-20cmの礫を多量、3-15cmの地山土を中量含む。
- (SK39) 4. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 0.1-3cmの炭化物を大量、0.2-0.5cmの焼土を微量、3-5cmの礫を少量含む。
- (SK39) 5. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 0.2-1cmの炭化物を中量、0.2-2cmの焼土を中量、5-10cmの礫を少量、瓦片を多量含む。層の下方に炭化物が厚さ1-3cmの帯状に堆積する。
- (SK39) 6. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 0.2-0.5cmの炭化物を少量、0.2-0.8cmの焼土を少量、5-10cmの礫を少量、瓦片を少量含む。
- (SK47) 7. 10YR4/1 褐灰色粘質土 0.2-0.3cmの炭化物を微量、0.1-0.3cmの焼土を少量、0.2-0.3cmの風化礫を少量、5-20cmの礫を中量含む。
- (SK46) 8. 10YR5/2 黒褐色土 0.1-0.5cmの炭化物を少量、0.2-2.0cmの焼土を大量、5-10cmの礫を少量、瓦片を少量含む。
- (SK39) 9. 10YR3/2 黒褐色粘質土 0.2-0.3cmの風化礫を中量含む。
- (SK46) 10. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土 0.2-0.5cmの炭化物を微量、0.2-0.5cmの焼土を微量、0.5-1cmの地山土を少量含む。
- (SK46) 11. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 0.3-1cmの炭化物を少量、0.2-0.3cmの風化礫を中量、0.5-1cmの地山土を微量含む。
- (SK47) 12. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 0.2-0.8cmの炭化物を少量、0.3-1cmの焼土を少量、0.5-1cmの風化礫を少量、1-3cmの地山土を少量含む。
- (7層) 13. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 5-20cmの地山土を大量に含む。



- 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 0.5-5.0cmの炭化物微量、1.0-6.0cm焼土、5.0-10.0cmの地山土中量、0.3-3.0cmの風化礫少量含む。瓦片を含む。
- 2. 2.5Y5/2 暗灰黄粘質土 0.1-0.3cmの焼土少量、0.1-0.3cmの風化礫中量、3.0-5.0cmの礫を少量含む。
- (SK24) 3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色土 0.3-0.5cmの炭化物、0.5-2.0cmの焼土を少量含む
- 4. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 0.2-1.0cmの炭化物中量、0.1-1.0cmの焼土少量、0.3-0.5cmの風化礫少量含む
- (4層) 5. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 0.1-0.3cmの焼土を微量、2.0-5.0cmの礫を少量、3.0-5.0cmの粘土(10YR5/6 黄褐色)を多量含む
- (4層) 6. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 0.1-0.3cmの焼土を微量、2.0-5.0cmの礫を少量、3.0-5.0cmの粘土(10YR5/6 黄褐色)を多量含む
- (SK39) 7. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 0.2-1.0cmの炭化物を中量、0.2-2.0cmの焼土を中量、5.0-10.0cmの礫を少量、瓦片を多量含む。層の下方に炭化物が厚さ1.0-3.0cmの帯状に堆積する
- (SK39) 8. 10YR4/1 褐灰色粘質土 0.2-0.3cmの炭化物を微量、0.1-0.3cmの焼土を少量、0.2-0.3cmの風化礫を少量、5.0-20.0cmの礫を中量含む

※土層のアミカケは整地層



第11図 基本土層図② (S = 1/40)

このうち従来のⅠ期については、今回新たに慶長火災時の焼土層より下位の整地層から遺構(SD6)を検出したため、町建て時をⅠ-1期とし、慶長火災時をⅠ-2期と細分した。Ⅰ-2期の遺構は今回は確認できなかったが、今後の意識的な調査により、両時期はより明確に分離できる可能性が高い。

ここでは特徴的な遺構について説明を加える。個々の遺構の特徴については第2表～第5表参照。

・SK4 (第12図)

寛永大火後の整地層を掘り込んで構築され、焼土・炭化物を中心とした覆土で充填されている。南半部を削平されているが1辺が1.66m、深さ0.75m程度の方形土坑と考えられる。床面からは2基のピットを検出しており、上屋の伴う地下室状の遺構と推測される。遺物は大量の瓦類や陶磁器類とともにメダイが出土している。出土遺物からⅡ期の遺構と判断した。

・SK31 (第12図)

地山面を掘り込んだ状態で検出した。長軸長2.54m、短軸長2.33m、のほぼ方形を呈し、深さは0.8mである。覆土は焼土や被熱を受けた壁材と思われる粘土塊で充填されている。床面からはピットを3基検出しており、SK4と同様の施設であろう。出土遺物からⅡ期の遺構と考えられる。

・SK41 (第13図)

地山面を掘り込んだ状態で検出した。大半を削平されているが、現存長2.34m、深さ0.74mで本来は方形を呈していたと推測される。焼土およびおびただしい数の瓦類で充填されている。床面でピットは確認できなかったが、規模や覆土の特徴からSK4やSK31と同様の性格を有する遺構であろう。遺物では瓦類・陶磁器類とともに寛永通宝が出土している。出土遺物からⅢ期の遺構と判断した。

・SD1 (第14図)

寛永大火後の整地層を掘り込んで構築している。幅0.56m、深さ0.4mである。一部削平を受けるものの、直角に屈曲しながら長さ13.5mに渡って調査区を横断している(第5図)。覆土は黄褐色粘質土で充填されるが、下層には焼土や炭化物が集中する。出土遺物からⅡ期の遺構と考えられる。

・SD4 (第14図)

SD1の北側に隣接し、地山を掘り込んで構築している。幅1.18m、深さ0.52mである。西側に延びる可能性もあるが、延長上に同様の遺構は確認できず、途中で止まる可能性が高い。覆土は地山由来の風化礫や粘質土で充填されている。出土遺物からSD1と同じⅡ期の遺構と判断した。

・SD6 (第14図)

慶長火災層下の整地層を掘り込んで構築している。幅0.54m、深さ0.11mである。出土遺物および土層の検討からⅠ-1期の遺構と考えられる。

・埋甕1 (第15図)

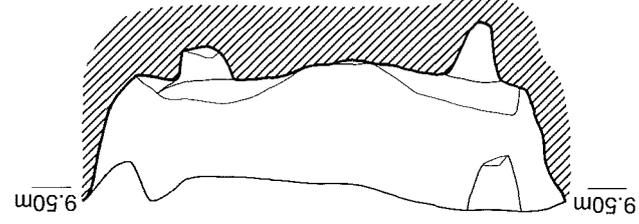
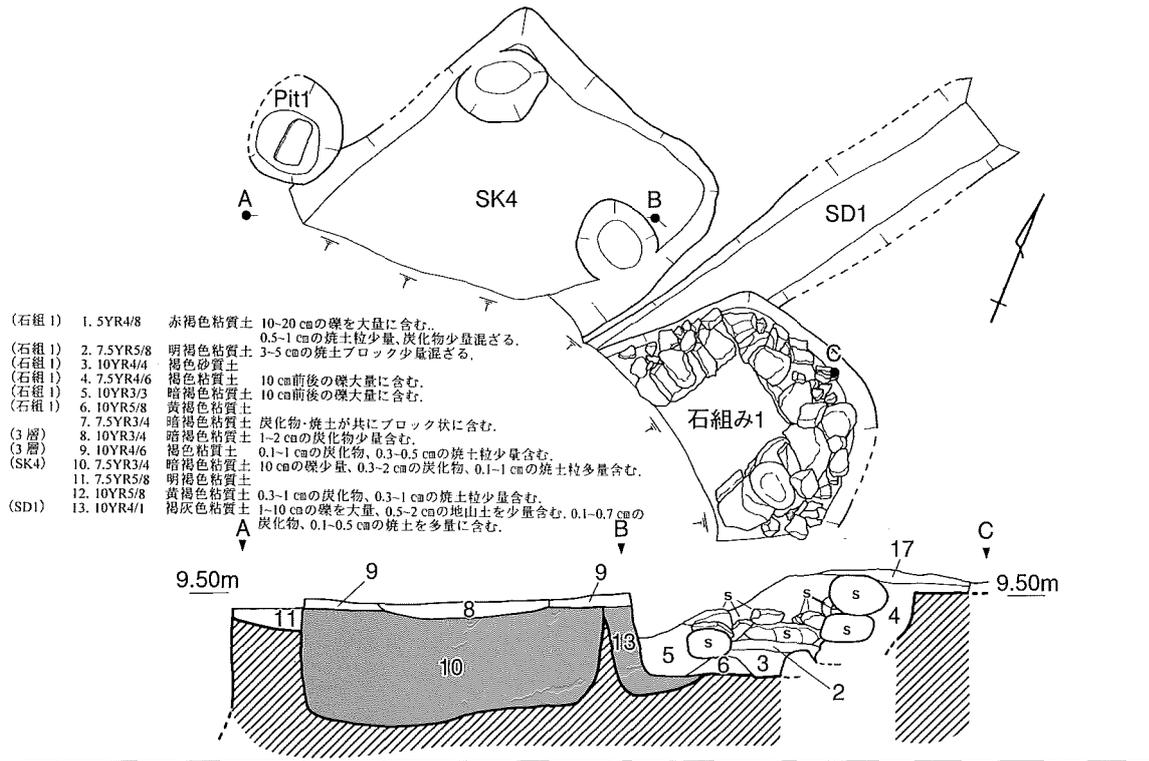
長軸長0.98m、短軸長0.8m、深さ0.50mに渡って土坑を掘り込み、肥前系の甕を埋設する。上半部は削平されて遺存していない。土坑の南端部は石組1により削平されている。Ⅴ期の遺構である。

・埋甕2 (第15図)

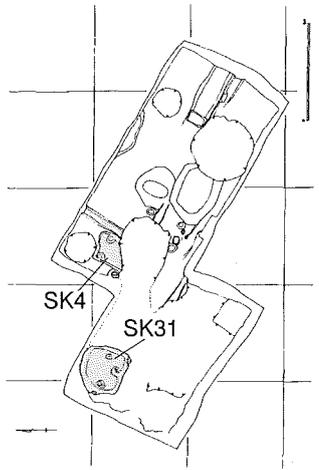
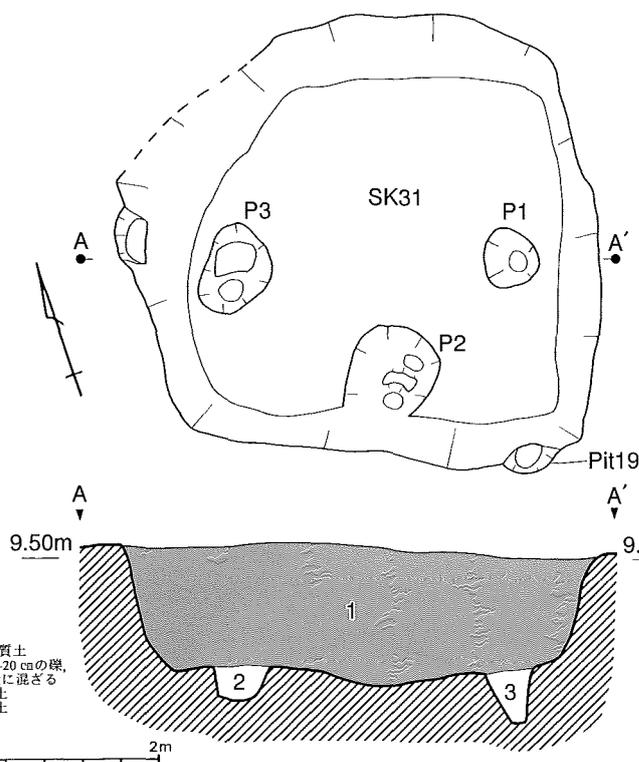
長軸長1.89m、短軸長1.57mの土坑内にタイ産の四耳壺を埋設する。土坑内には根石が残り、寛文大火時の焼土で埋められている。Ⅲ期の遺構である。

・石組1 (第12図)

拳大の円礫を2～3段にわたって「コ」の字形に積み上げている。床面で焼土や被熱痕を確認することはできなかったが、竈と考えられる。Ⅴ期の遺構である。

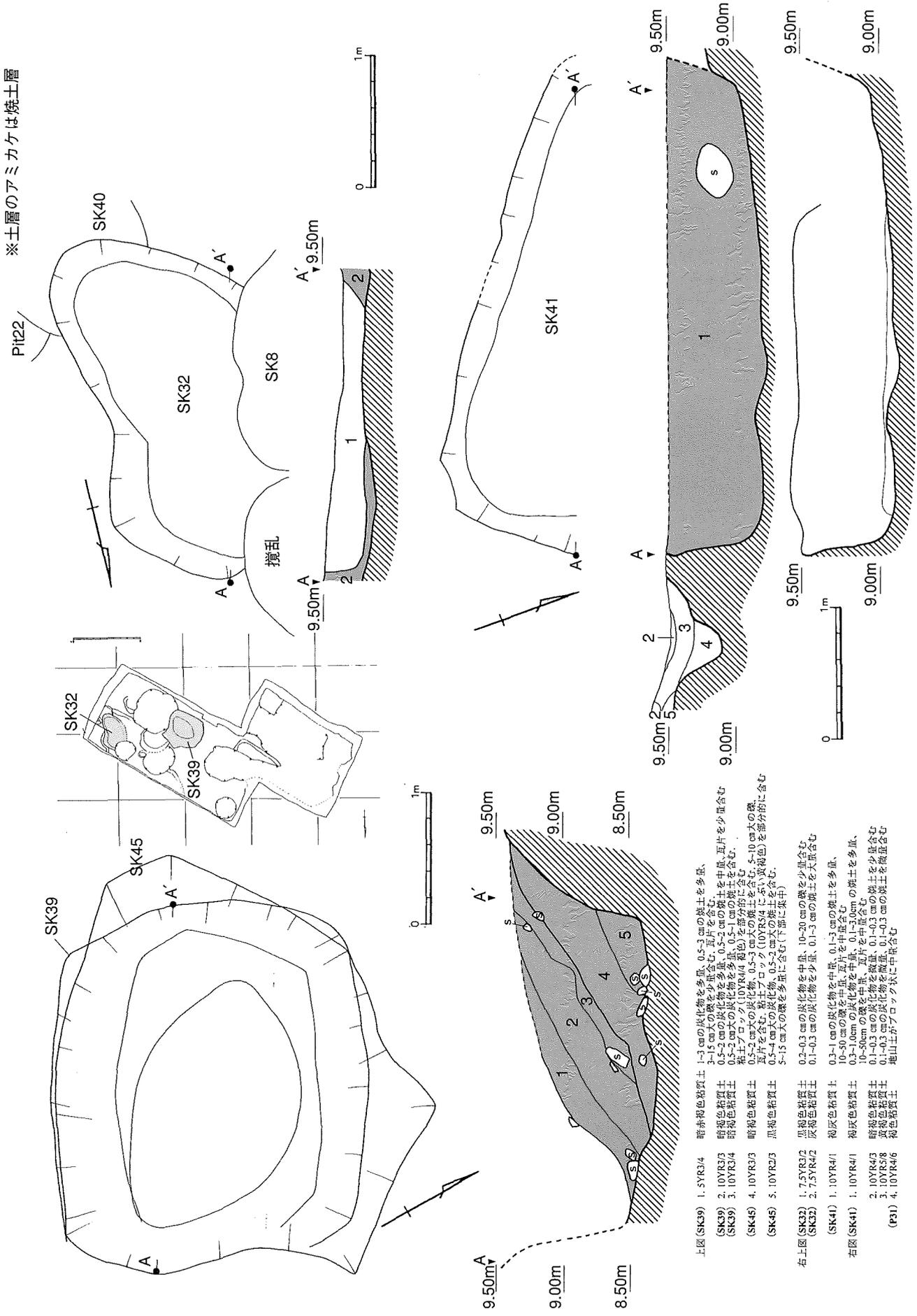


※土層の濃いアミカケは
焼土層



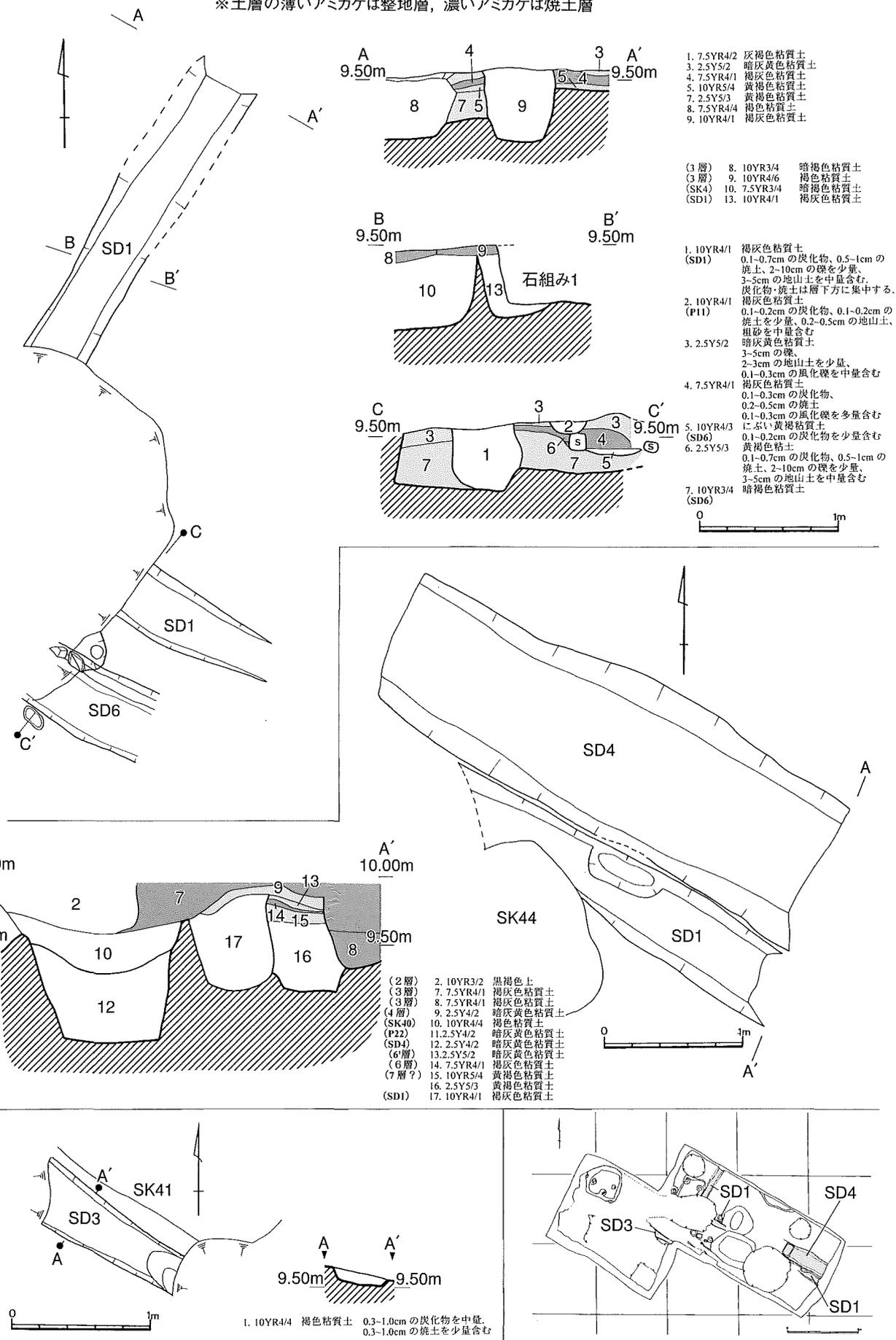
第12図 遺構実測図① (S = 1/40)

※土層のアミカケは焼土層

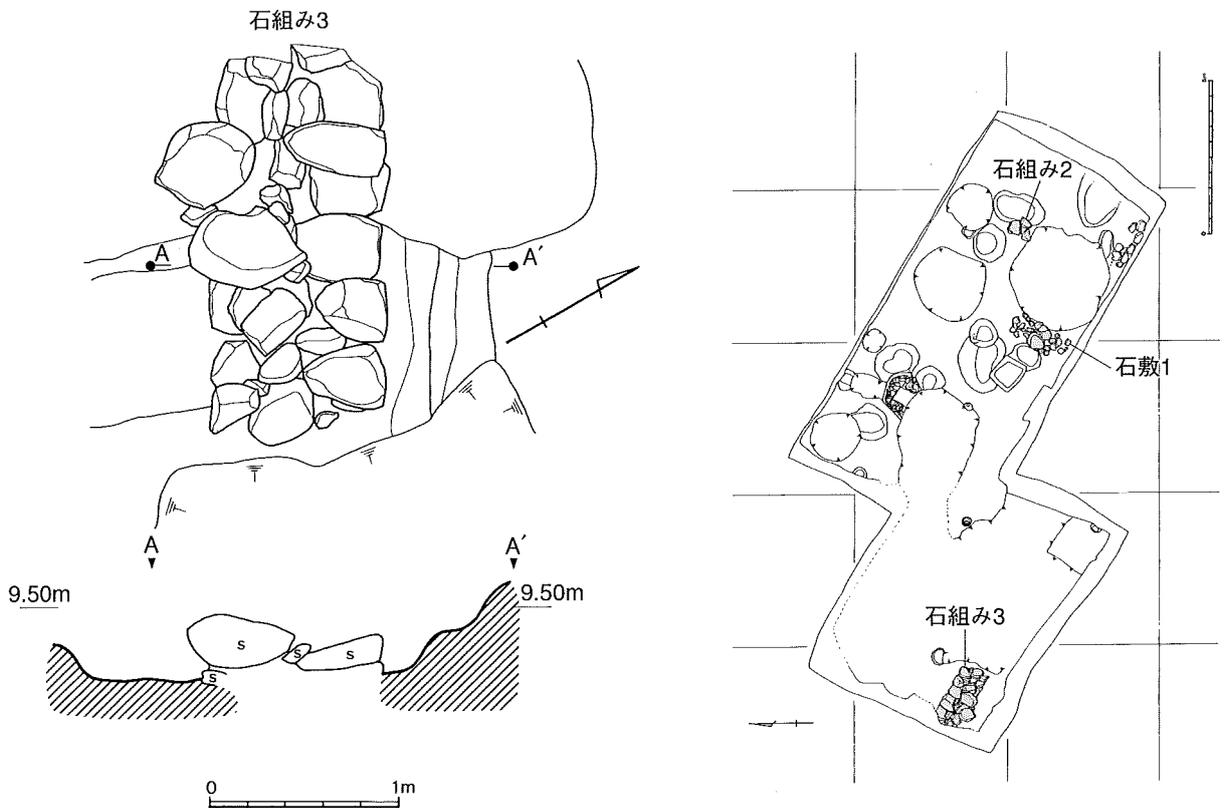
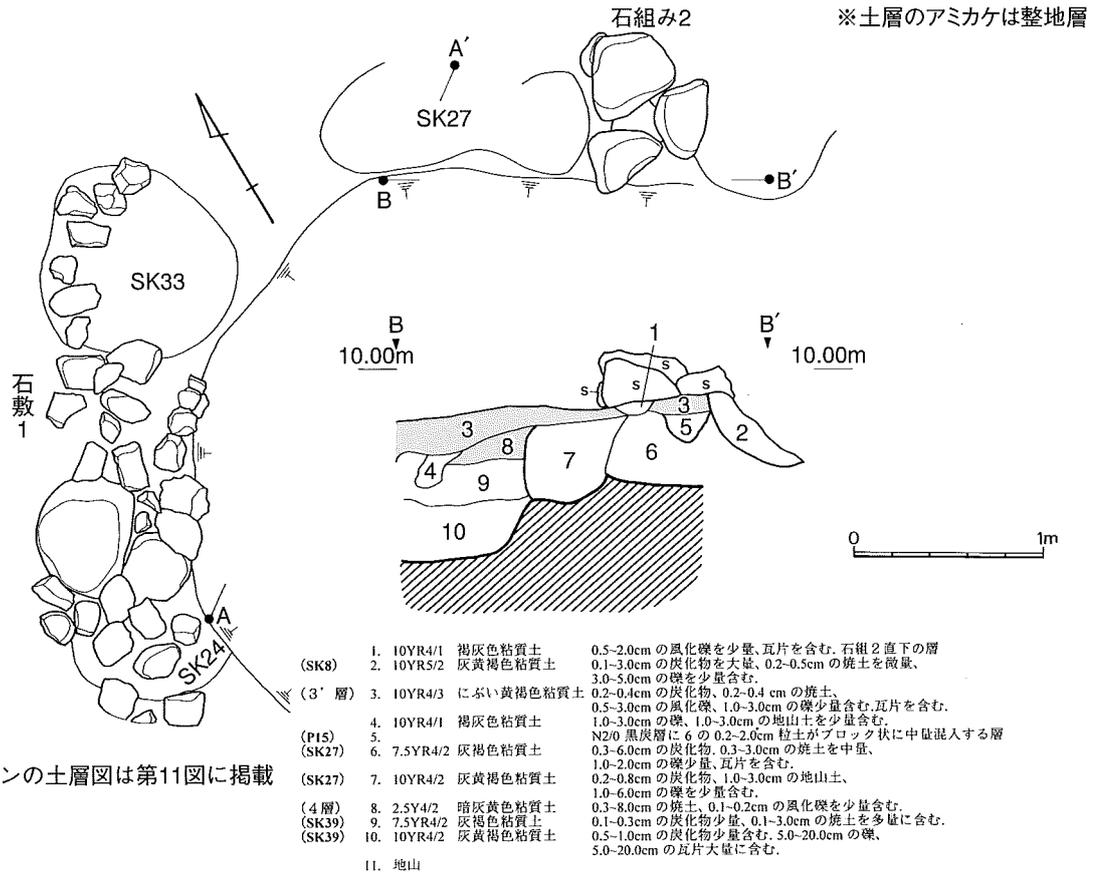


第13図 遺構実測図② (S=1/40)

※土層の薄いアマカケは整地層、濃いアマカケは焼土層



第14図 遺構実測図③ (S = 1/40)



第16図 遺構実測図⑥ (S = 1/40)

・石組3（第16図）

人頭大の礫を2～3段積んでいるが、完掘していないため、石組はさらに下層まで続いているものと推測される。東西に整然と並んでおり、石垣の可能性もあるが裏込めは確認できない。V期以降の遺構である。

・石敷1（第16図）

拳大～人頭大の扁平な礫を帯状に配置している。寛文大火の廃棄土坑埋没後に構築されており、V期の遺構と考えられる。

(2) 遺構群の変遷

今回の調査区と隣接する平成5年度調査時検出の遺構群と合わせて、万才町遺跡内における遺構群の変遷を提示し、本節のまとめに代えたい（第17図・第18図）。

・Ⅰ期…平成5年度調査区で総柱礎石建物SB7と掘立柱建物SB8がある。報告者によればSB7は倉、SB8は長屋風の住居を想定している。SB7を囲むように西側と北側にSD8・SD6がそれぞれ巡り、SB7の東隣にSE7がある。今回の調査区で検出したこの時期の遺構は、東西に延びるSD6であるが、同じく東西方向に伸びる平成5年度検出のSD6とは直線的につながらない。

・Ⅱ期…平成5年度調査区でSB5・SB6がある。報告者によれば、SB5は暗渠や石垣の伴う特殊な建物、SB6は倉と考えている。また、SF7・SF2といった石垣が南北方向に伸びる点もこの時期の特徴である。今回の調査区では、「L」字形に巡るSD1と地下室と考えられるSK4・SK31、掘立柱建物SB1などがあるが、住居に関連する遺構は平成5年度検出遺構と比べていずれも小規模である。

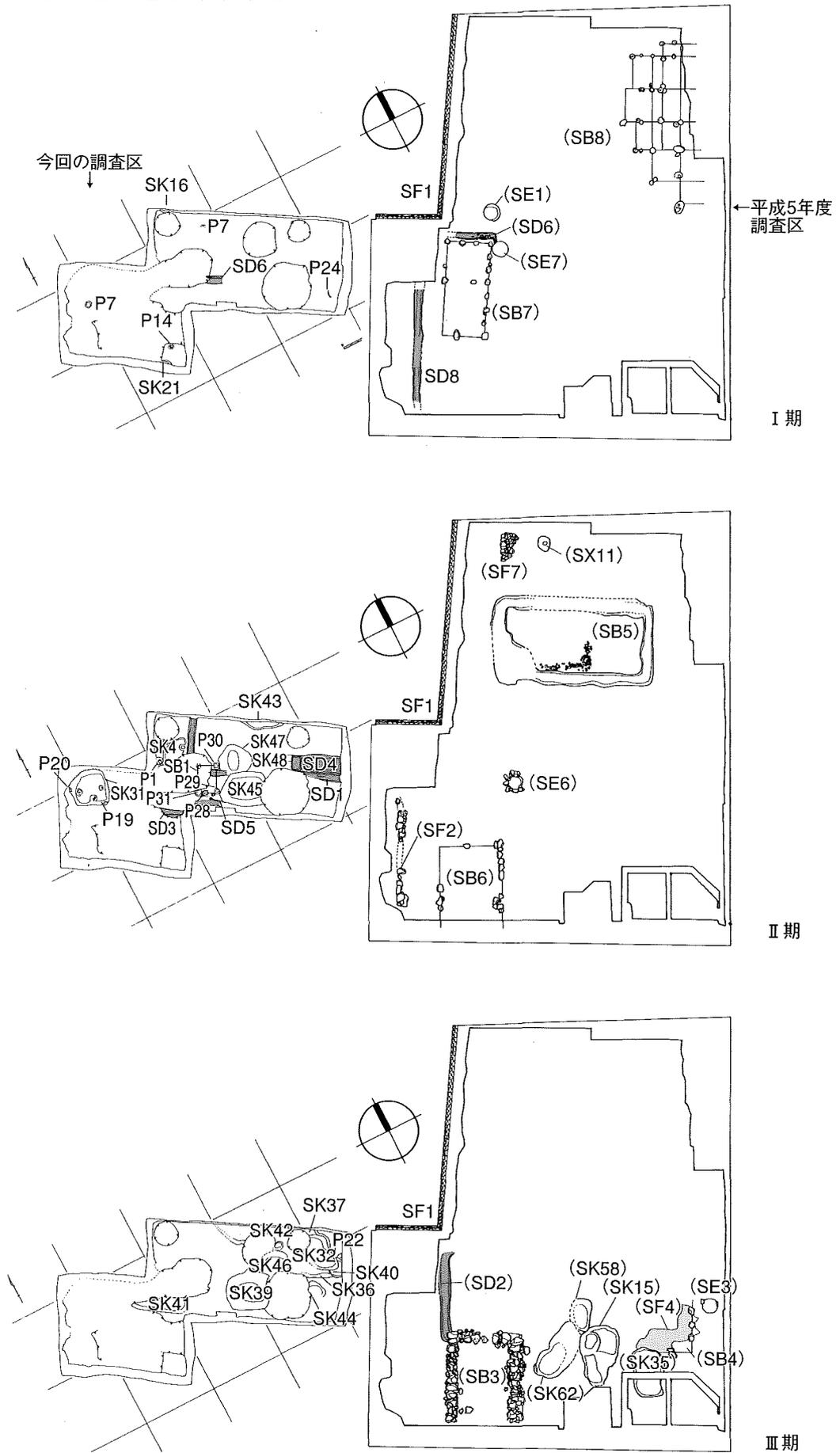
・Ⅲ期…平成5年度調査区で、石組の基礎を用いたSB3・礎石建物SB4が建つ。報告者によれば土倉の可能性が考えられる。今回の調査区では、Ⅱ期に引き続き地下室と考えられるSK41があるものの、両調査区に共通して寛文3年の大火に伴う整理土坑が数多く確認できる。

・Ⅳ期…平成5年度調査区では、Ⅲ期に引き続き土倉と考えられるSB3があるが、この建物に付随する地下室と考えられるSK400が新たに造られる。また、SB3から西側に延びる石組のSD4が設けられる。今回調査区では、Ⅳ-1期・Ⅳ-2期を通じて廃棄土坑を主体とする土坑群およびピット群が中心で、東西方向に伸びるSD2も平成5年度調査区のSD4とは直線上に並ばない。

・V期以降…平成5年度調査区では、礎石建物SB1・SB2のほか、胞衣壺(SX1～3)、泉水地(SG1・SG2)、埋桶遺構(SX10)、埋甕遺構(SX6・SX7)など、多様な遺構が構築される。また、「蔵春亭三保蔵」の色絵磁器がまとまって出土したSK177や、かんざし等のガラス製品がまとまった出土したSK166など、居住者の性格が推測できる興味深い遺構も検出している。今回調査区では、石敷1・石敷2や石組1～3など、石組を多用する遺構が多く発見されており、この段階で平成5年度調査区と同程度の恒久的な建物が造られ、生活が営まれたことが推測できる。

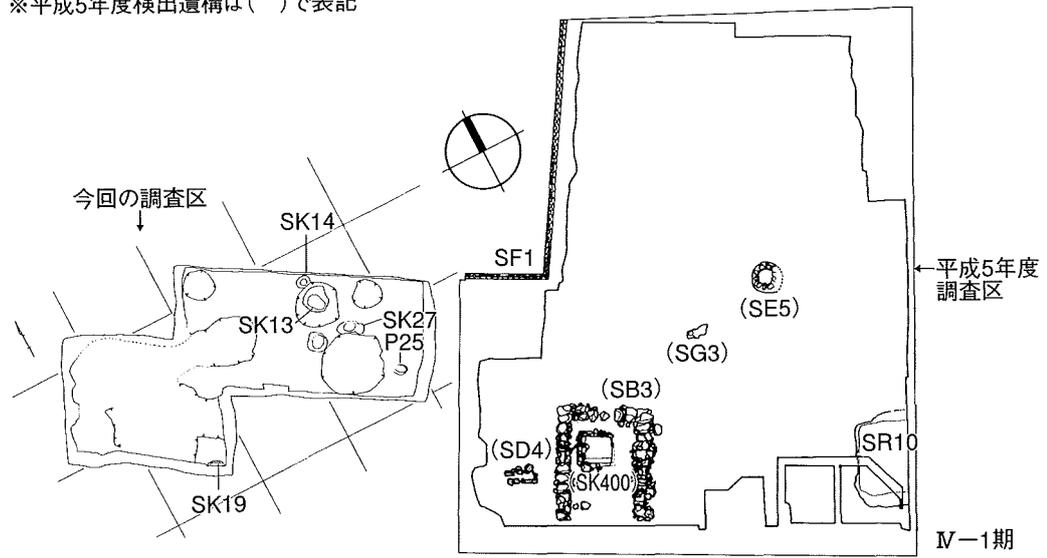
以上、簡単ではあるが遺構群の変遷をまとめた。特徴としては、V期をのぞいてほとんどの遺構群が、当時の長崎奉行所と西役所を結ぶ大通りと軸をそろえて構築されている点が指摘できる。また、廃棄土坑や火災時の整理土坑は今回の調査区に集中しており、V期をのぞいて、大通りに面した平成5年度調査区での居住頻度が相対的に高かったことを物語っている。調査区内での町割りの変遷については十分検討できなかったが、溝状遺構や石組遺構等が重要な手がかりになるものと考えられる。

※平成5年度検出遺構は()で表記

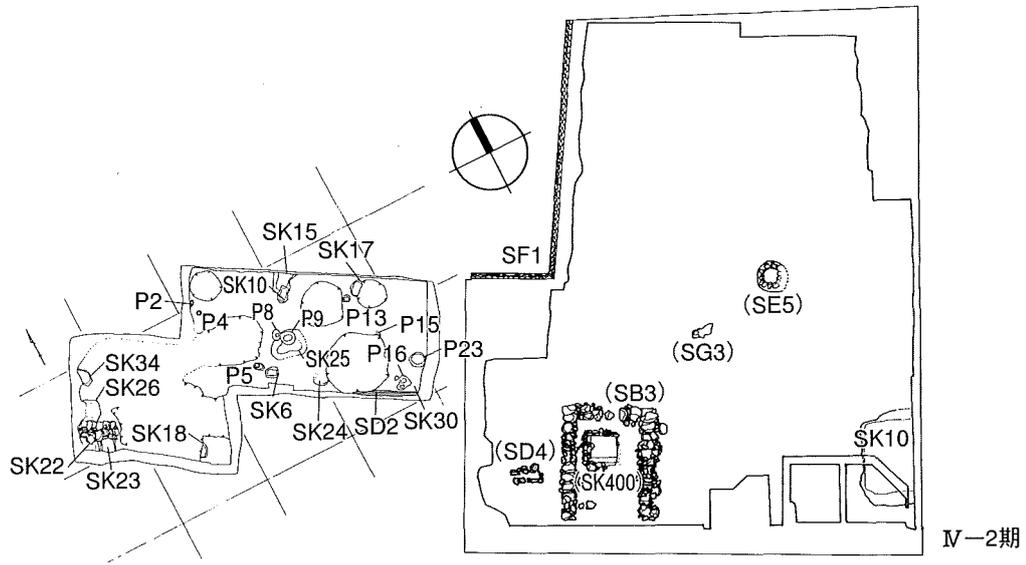


第17図 万才町遺跡遺構群の変遷① (S = 1/400)

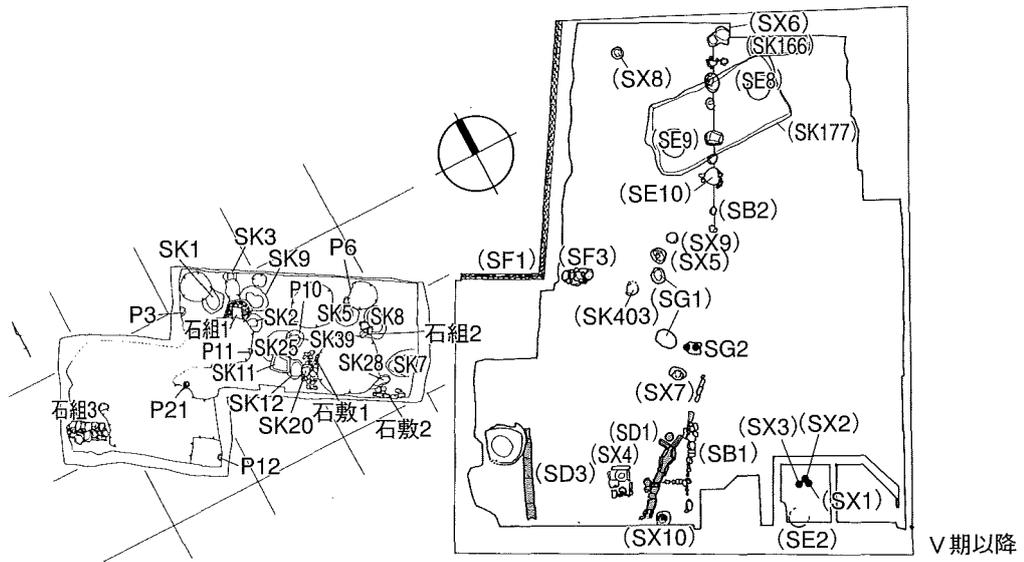
※平成5年度検出遺構は()で表記



IV-1期



IV-2期



V期以降

第18図 万才町遺跡遺構群の変遷② (S=1/400)

第2表 遺構観察表①

No.	グリッド	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	覆土	備考	出土				遺物				時期
								陶器	銅器	鉄器	その他	陶器	銅器	鉄器	その他	
SK1	C-2	楕円形	1.33 (0.29)	1.20 (0.29)	0.29	N15/0黒炭層		49				45	1	1		18c 後
SK2	C-3	楕円形	1.00 (0.48)	0.88 (0.48)	0.48	10YR3/2黒粘結質土 (0.3~0.5cmの炭化物を少量含む)		31	萩あり			38	1			18c 後~19c
SK3	C-2	円形	0.71 (0.44)	0.52 (0.44)	0.52	7.5YR4/6黒粘結質土 (5~7cmの炭化物を少量含む)	覆土2出土位置 X=2807.627 Y=3563.473 Z=9.387	16	4			59	4			18c 後~19c
SK4	C-2	長方形	1.66 (1.60)	1.60 (1.60)	0.75	7.5YR3/4黒粘結質土 (10cm前後の炭を少量含む)	ケルス出土位置 X=2809.993 Y=3562.321 Z=9.213	101	2	3 備前4 西洋1 萩1		10	185		3	
SK4 P1	C-2	楕円形	0.49 (0.41)	0.41 (0.35)	0.35	10YR4/2灰黄粘土 (5~20cmの地山土を少量、砂礫を少量含む)	SK4の下部分から検出した遺構									
SK4 P2	C-2	円形	0.44 (0.29)	- (0.29)	0.29	10YR4/2灰黄粘土 (粗砂、黒化礫を少量含む)										
SK5	C-2	楕円形	1.26 (0.68)	1.06 (0.68)	0.68	2.5Y4/3オリーブ褐粘質土 (0.5~1cmの炭化物を少量含む)		32			73	1	瀬戸1			19c
SK6	C-3	円形	0.68 (0.62)	0.62 (0.30)	0.30	10YR4/3赤い重粘結質土 (0.5~2cmの炭化物を少量含む)		42			33		1	1	1	18c
SK7	B-3	楕円形	1.49 (1.22)	0.53 (1.22)	0.53	2.5GY2/1黒炭層		118	6		126	12				18c 後
SK8	B-3	長方形	1.67 (0.97)	0.97 (0.43)	0.43	2.5GY2/1黒炭層		211	1	萩あり	216	14		1	3	18c 末~19c
SK9	C-2	楕円形	1.53 (1.16)	1.16 (0.79)	0.79	N2/0黒炭層		141	1	1 長手7/ルハレロ1 萩あり	208	12				18c 末~19c
SK10	B-2	楕円形	0.98 (0.53)	0.53 (0.37)	0.37	N2/0黒炭層		17			36					18c 後半
SK11	C-2	長方形	1.02 (0.89)	0.89 (0.37)	0.37	10YR3/3暗粘結質土 (0.5~1cmの炭化物を少量含む、10cm前後の礫、瓦を大量に含む)		48			79	2		2	瀬道具1	18c 末~19c
SK12	C-3	楕円形	1.04 (0.75)	0.43 (0.75)	0.43	2.5GY2/1黒炭層		91		萩あり	148	4				18c 末~19c
SK13	B-2	楕円形	1.45 (1.26)	1.26 (0.50)	0.50	10YR3/3暗粘結質土 (10~30cm前後の礫を大量に含む)		1								18c 初
SK14	B-2	楕円形	0.74 (0.56)	0.30 (0.56)	0.30	10YR3/3暗粘結質土 (1.0~2cmの炭化物を少量含む)	覆土下部から検出した遺構	5		志野1		5				17c 前 (18cの埋入あり)
SK15	C-1	不整形	1.23 (0.96)	0.46 (0.96)	0.46	10YR4/8赤い重粘結質土 (0.5~1cmの炭化物を少量含む)		5			17	2				18c 後半
SK16	C-1	不明	0.55 (0.21)	0.12 (0.21)	0.12	10YR4/1弱灰粘質土 (3~5cmの礫を少量含む)										16c 末~17c 初
SK17	B-2	楕円形	0.85 (0.46)	0.46 (0.21)	0.21	10YR3/3暗粘結質土 (0.3~1cmの炭化物を少量含む)		15			9					18c
SK18	D-3	不明	0.83 (0.32)	0.18 (0.32)	0.18	10YR3/3暗粘結質土 (0.3~1cmの炭化物、0.1~0.3cmの礫を少量含む)		2		東唐アブア1	1	8				18c
SK19	D-3	不明	0.92 (0.29)	0.29 (0.37)	0.29	10YR5/6明粘結質土 (0.3~0.5cmの炭化物を少量含む)	肥前が入る	1			2	8				17c 後~18c 前
SK20	D-3	不明	1.27 (0.37)	0.22 (0.37)	0.22	10YR3/4暗粘結質土 (10~30cmの礫を少量含む)										
SK21	D-3	不明	0.73 (0.25)	0.25 (0.54)	0.54	10YR5/6明粘結質土 (0.5~1cmの炭化物、0.3~0.5cmの礫を少量含む)		19			21	1				16c 末~17c 前
SK22	E-2					10YR4/4粘結質土 (0.5~1cmの炭化物、0.3~0.5cmの礫を少量含む)		10			11	1				18c 後
SK23	E-2	不明	1.00 (0.76)	0.76 (0.75)	0.76	10YR4/4粘結質土 (0.5~1cmの炭化物、0.3~0.5cmの礫を少量含む)										
SK23	E-2	長方形	0.86 (0.83)	0.17 (0.83)	0.17	10YR4/4粘結質土 (0.5~1cmの炭化物、0.3~0.5cmの礫を少量含む)										
SK24	C-3	円形	0.83 (0.83)	- (0.83)	0.14	2.5Y4/3オリーブ粘土 (0.3~0.5cmの炭化物、0.5~2cmの礫を少量含む)		11			20	1				18c 後
SK25	C-2	楕円形	1.88 (1.40)	1.40 (0.67)	0.67	10YR3/3暗粘結質土 (0.5~1.0cmの炭化物を少量、10cm前後の礫、瓦を大量に含む)		228	9	1	299	27				18c 末
SK26	E-2	不明	1.12 (0.92)	0.12 (0.92)	0.12	10YR4/1弱灰粘質土 (0.5~2cmの炭化物を少量、0.1~0.5cmの礫を少量含む)		16			76	3				18c

第3表 遺構観察表②

No.	グッド	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	高さ (m)	覆土	備考	出土物										時期		
								肥前 中継	中継 バヤム	陶器 その他(珠,西洋など)	肥前 青花	磁器 その他	ガラス	金属	骨	瓦つぼ	その他			
SK27	B-2	楕円形	(1.18)	(0.55)	0.54	10YR4/2灰黄褐粘質土 (0.3~0.8cmの炭化物,1~3cmの焼土,1~6cmの礫を少量含む。)		44	1	1									18c前	
SK27b	B-3	楕円形	(0.78)	(0.50)	0.68	7.5YR4/2灰粘質土 (0.3~6cmの炭化物,0.3~3cmの焼土を中量,1~3cmの礫を少量,瓦片を含む。)														
SK28	B-3	不整形	(0.76)	(0.68)	0.15	10YR3/1黒粘質土 (0.2~1cmの炭化物を大量に含む。)														
SK29	C-2	円形	0.92	-	0.42	10YR4/2灰黄褐粘質土		45											18c末	
SK30	B-3	不整形	0.79	0.62	0.28	10YR4/1褐粘質土 (0.1~0.7cmの炭化物を中量,0.1~1cmの焼土,0.3~0.4cmの礫を少量含む。)		8											18c	
SK31	E-D-2	長方形	2.54	2.33	0.80	2.5YR3/2暗赤粘質土 (炭・焼土,10~20cmの礫,瓦片が多数に混入。)		36	4?					1					寛文 瓦2 土罐1	
SK31P1	D-2	楕円形	0.32	0.28	0.32	10YR5/6黄褐粘質土														
SK31P2	D-2	円形	0.49	-	0.37	10YR5/8黄褐粘質土														
SK31P3	E-2	楕円形	0.50	0.33	0.21	10YR5/6黄褐粘質土														
SK32	A-2-3 B-2-3	不整形	(2.28)	(2.10)	0.38	7.5YR3/2黒褐粘質土 (0.2~0.3cmの炭化物を中量,10~20cmの礫を少量含む。炭化物は部分的に帯状に堆積する。)		63											脚付杯1	
SK33	B-2	楕円形	1.12	0.97	0.55	10YR3/4暗粘質土 (0.5~1cmの炭化物,0.1~0.5cmの焼土を少量含む。)		122											18c前半	
SK34	E-2	不明	(0.84)	(0.65)	0.30	10YR4/4粘粘質土 (0.1~0.3cmの炭化物,0.1~0.3cmの焼土を少量,5~10cmの礫を少量含む。)		17	1										18c	
SK35	B-3	不明	(0.64)	(0.37)	0.38	10YR3/1黒粘質土 (0.2~0.5cmの炭化物を中量,3~5cmの礫を少量含む。)		7											18c	
SK36	A-B-2	不明	(2.26)	(1.74)	0.46	10YR5/2灰黄粘質土 (0.1~3cmの炭化物を大量,0.2~0.5cmの焼土を少量,3~5cmの礫を少量含む。)		72	6	あり									赤絵1	
SK37	A-B-2	不明	(5.09)	(0.91)	0.36	10YR4/2灰黄粘質土 (0.2~1.5cmの炭化物を中量,0.1~0.3cmの焼土を少量,2~10cmの礫を少量含む。)		50	1	華南三彩1									印文1	
SK38	B-2	不明	(2.29)	-	0.28	10YR3/2黒粘質土 (0.3~2cmの炭化物を中量,0.5~5cmの焼土を大量,3~8cmの礫を少量,瓦片を少量含む。)		30	1										5	
SK39	B-C- 2-3	不整形	3.16	2.82	1.20	1. 5YR3/4灰赤粘質土 (1.0~3cmの炭化物を多量,0.5~3cmの焼土を多量,3~15cmの礫を少量,瓦片を含む。) 2. 10YR3/3暗粘質土 (0.5~2cmの炭化物を多量,0.5~2cmの焼土を中量,瓦片を含む。) 3. 10YR3/4暗粘質土 (0.5~2cmの炭化物を多量,0.5~2cmの焼土を中量,瓦片を含む。)		285	1	華南三彩1										
SK40	A-3	円形	(1.28)	(0.93)	0.30	10YR4/4粘粘質土 (0.2~0.5cmの炭化物,0.5~1cmの焼土を少量,0.2~0.5cmの礫を少量含む。)		15											瓦3 土罐1	
SK41	C-D-2	不明	(2.34)	-	0.74	2.5Y3/2黒粘質土 (0.3~1cmの炭化物を中量,0.1~3cmの焼土を大量,3~10cmの礫を中量,瓦片を少量含む。)		144	ギョウ 草1	タイ1 華南三彩3									土罐1	
SK42	B-2	不明	0.54	0.45	0.21	7.5YR4/6粘粘質土 (0.5~1cmの炭化物を少量,0.1~0.3cmの焼土を少量含む。)													17c後半	
SK43	B-2	不明	(2.21)	-	0.13	10YR4/1褐粘質土 (0.1~0.3cmの炭化物を中量,0.1~1cmの焼土を多量,3~20cmの礫を少量,瓦片を少量含む。)		1											17c前半	
SK44	B-3	不明	(1.10)	1.05	0.12	10YR4/4粘粘質土 (0.1~0.3cmの炭化物を中量,0.2~1cmの焼土を多量,0.1~0.2cmの礫を少量,5~10cmの礫を少量含む。)		8											17c後半	
SK45	B-C- 2-3	長方形	2.60	2.36	1.22	1. 10YR3/3暗粘質土 (0.5~2cmの炭化物,0.5~3cmの焼土を含む。5~10cmの礫,瓦片を含む。粘土ブロック(10YR5/4灰黄粘質土)を部分的に含む。) 2. 10YR2/3黒粘質土 (0.5~4cmの炭化物,0.5~2cmの焼土を含む。5~15cmの礫を多量(下部に灰中川)を含む。)		12	4	2	朝鮮1									17c後半
SK46	B-2-3	不明	2.04	(1.70)	0.55	10YR3/2黒粘土 (0.1~0.5cmの炭化物を少量,0.1~2cmの焼土を大量,5~10cmの礫を少量,瓦片を少量含む。)		16	1										17c前半	
SK47	C-2	不整形	2.23	(1.65)	0.51	7.5YR4/4粘粘質土 (0.1~0.5cmの炭化物を少量,0.1~1cmの焼土を中量含む。)		9	1										17c前半	

第4表 遺構観察表③

No.	グリッド	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	高さ (m)	覆土	備考	出土遺物						時期							
								肥前	中野群	ペトナム	陶器	その他(鉄, 西洋など)	磁器		青花	その他	ガラス	金属	骨	るつぼ	その他
SK48	B-2-3	長方形	0.92 (0.58)	0.58 (0.50)	0.20	10YR4/4粘結質土 (0.3~0.5cmの炭化物を少量, 20~35mmの礫を多量含む。)															
P1	C-2	楕円形	0.32 (0.58)	0.18 (0.26)	0.68	10YR3/4暗粘結質土 (0.1~0.3cmの炭化物, 0.3~0.5cmの焼土を微量含む。)	根石あり														17c初
P2	C-1	楕円形	0.32 (0.46)	0.12 (0.26)	0.12	10YR4/6粘結質土 (0.3~0.5cmの炭化物, 0.5~1cmの焼土を少量含む。)*															18c
P3	C-2	円形	0.23	-	0.55	7.5YR4/6粘結質土 (0.3~0.5cmの炭化物, 0.5~1cmの焼土を少量含む。)															18c
P4	C-2	楕円形	0.58	0.36	0.22	10YR3/4暗粘結質土 (0.3~1cmの炭化物, 0.2~0.5cmの焼土を微量含む。)															18c
P5	B-2	円形	0.42 (0.54)	0.26 (0.36)	0.12	10YR3/4暗粘結質土 (0.5~1cmの炭化物, 貝殻を大量に含む。)															18c~19c
P7	C-2	楕円形	0.62 (0.76)	0.42 (0.72)	0.32	10YR4/2灰粘結質土 (0.2~0.5cmの炭化物, 0.5~2cmの焼土を少量, 1~3cmの地山土, 珪・陶磁器片を含む。)															16c~17c初
P8	B-2	楕円形	0.76	0.59	0.23	7.5YR4/4粘結質土 (0.5~2cmの焼土を多量含む, 直径10~20mmの礫を大量に含む。)															18c
P9	B-2	楕円形	0.34	0.26	0.23	10YR3/4暗粘結質土 (0.5~1cmの炭化物を少量含む。)															18c
P10	B-2	楕円形	0.31	-	0.24	2.5GY2/1黒炭層															
P11	C-2	円形	0.36 (0.42)	0.21 (0.34)	0.31	10YR4/1灰粘結質土 (0.1~0.2cmの炭化物, 0.1~0.2cmの焼土を少量, 0.2~0.5cmの地山土, 粗砂を中量含む。)															
P12	D-3	楕円形	0.42	-	0.16	10YR3/2暗粘結質土 (0.3~1cmの炭化物を少量含む。)															18c
P13	B-2	円形	0.37 (0.36)	0.27 (0.27)	0.21	10YR3/4暗粘結質土 (0.3~1cmの炭化物, 0.2~0.5cmの焼土を中量含む。)	根石あり														16c~17c初
P14	D-3	楕円形	0.34	0.24	0.35	10YR3/4暗粘結質土 (0.3~0.5cmの炭化物を少量含む。)															18c
P15	B-3	楕円形	0.48 (0.56)	0.36 (0.36)	0.07	7.5YR4/2灰粘結質土 (0.2~1cmの炭化物を中量, 0.1~0.5cmの焼土を少量含む。)															18c
P16	B-3	楕円形	0.31	0.28	0.21	10YR4/1粘結質土 (0.1~0.3cmの炭化物, 0.1~0.5cmの焼土を少量含む。)															16c~17c初
P17	E-2	楕円形	0.31	0.14	0.28	10YR3/4暗粘結質土 (3~8cmの小礫を大量に含む。)															18c
P18	E-2	不明	0.29	0.17	0.45	10YR3/4暗粘結質土 (0.1~0.3cmの炭化物を少量, 0.1~0.5cmの焼土を微量含む。)															16c~17c初
P19	D-2	円形	0.31	-	0.21																切欠合いから中期
P20	E-2	不明	0.43	0.34	0.11	2.5Y4/2灰粘結質土 (0.1~3cmの炭化物を中量, 1~5cmの地山土を少量含む。)															切欠合いから中期
P21	D-2	不明	0.89	0.78	0.48	10YR4/2灰粘結質土 (0.2~0.3cmの炭化物, 0.1~0.3cmの焼土を中量含む。)	礫は遺構上層に集中														18c
P22	A-2	楕円形	0.55	-	0.18	10YR4/2灰粘結質土 (0.2~0.3cmの炭化物を微量, 0.1~0.3cmの焼土を少量, 5~15cmの礫を中量含む。)	礫は遺構上層に集中														16c~17c初
P23	B-3	不明	0.57	0.53	0.19	7.5YR4/6粘結質土															17c後~18c初
P24	B-3	不明	0.48	0.38	0.25	10YR3/4暗粘結質土															17c前
P25	D-2	楕円形	0.22	0.15	0.24	10YR5/8灰粘結質土 (0.3~0.5cmの炭化物を微量, 0.1~0.3cmの焼土を少量含む。)															17c前?
P26	C-2	楕円形	0.30	0.19	0.36	10YR5/6灰粘結質土 (0.3~0.5cmの炭化物を微量含む。)															切欠合いから中期

第5表 遺構観察表④

No.	グリッド	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	覆土	備考	出土物				時期	
								陶器	土器	磁器	その他		
P29	C-2	不明	0.38 (0.31)	0.10		10YR3/4暗褐色粘土 (0.1~0.5cmの炭化物を散見, 0.1~0.3cmの焼土を少量含む。)						17c 前	
P30	C-2	楕円形	0.49	0.37	0.59	10YR3/3暗褐色粘土 (0.1~1cmの炭化物を少量含む。)							切り合いから11期
P31	C-2	不明	0.48 (0.48)	0.45	0.63	1 10YR6/2灰黄緑粘質土 2 10YR5/3に多い黄緑粘質土				4			切り合いから11期
SD1	B-C-2 A-B-3	L字状	13.30	0.56	0.40	10YR4/1緑灰粘質土 (1~10cmの焼土を大量, 1.5~2cmの焼土を少量含む。層下方0.1~0.7cmの炭化物, 0.1~0.5cmの焼土を多量含む。)				40			17c 前半
SD2	B-3	溝状	2.18	0.30	0.08	10YR4/2灰粘質土				6	1		18c
SD2 裏込						2.5Y5/4黄緑粘土 (0.1~2cmの炭化物を多量含む。)	水路設置時に貼ったのか			1			18c 前
SD3	D-3	溝状	1.22	0.36	0.05	10YR4/4粘質土 (0.3~1cmの炭化物を少量含む。)							
SD4	A-3	溝状	3.46	1.15	0.52	2.5Y4/2暗灰黄粘質土 (1~3cmの炭化物を散見, 0.1~0.5cmの炭化物を少量含む。)						3	17c 前半
SD5	C-2-3	溝状	1.74	0.74	0.08	不明							
SD6	C-2	溝状	0.86	0.54	0.11	10YR4/3に多い黄緑粘質土 (0.3~1cmの炭化物を少量含む。)							
埋め壁1	C-2	不整形	0.98	0.80	0.50	10YR5/4に多い黄緑土 (影越層, 瓦, 焼土が混入。)	埋土裏面の隙(礎石?)は1層の上にある 切り合いとしては, 1層→埋土→溝の順						
埋め壁2	B-3	不明	1.89	1.57	0.30	7.5YR2/1黒炭層 (父塚に伴う。)							
石組み1	C-2	不明	1.32	1.04	0.57	7.5YR4/2暗粘質土 (0.1~0.3cmの炭化物を散見, 0.1~2cmの焼土を大量, 0.1~1cmの炭化物を中量, 瓦片, 埋土を含む。)	埋土 竈・火鉢・炭焼						
石組み2	B-2	不明				7.5YR4/2暗粘質土 (0.1~0.3cmの炭化物を散見, 0.1~0.8cmの焼土を少量含む。)	埋土裏面に付いた石						
石組み3	E-2	不明				1 5YR4/8赤粘質土 (0.1~0.5cmの炭化物を少量含む。)	SK 4と同断面						
石組み4	C-2					2 7.5YR5/8明鉄粘質土 (3~5cmの焼土, フロックが少量混入。)							
石組み5	C-3					3 10YR4/4粘砂質土							
SE1	B-3	円形	3.46	-	-	4 7.5YR4/6粘質土 (10cm前後の埋土を大量に含む。)							
SE2	D-3	不明	1.15	0.38	-	5 10YR3/2暗粘質土 (10cm前後の埋土を大量に含む。)							
腰衣1	C-1	円形	0.21	0.14		6 10YR5/8黄粘質土							
腰衣2	C-1					暗茶粘質土	SK 3の中で出土						

3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、近世の陶磁器・土器・瓦・ガラス・金属製品・銭貨・骨類など約5,100点（コンテナ102箱分）に及ぶ。本書では、遺構から出土したものを中心に、図化できるもの、時期の基準となるもの、希少なものなどについて報告紹介した。以下に概要を記す。

(1) 土器・陶磁器（第20図～第38図）

①各期の概要

隣地である大村町の調査の（長崎県教委1995）時期区分にしたがい、各期の遺物を概観したい。

I-1期 該当するSD6からは、中国産の圏線のみの青花が出土している。また、産地不明の刷毛目を施した蓋、これと対になると考えられる蓋受けのある鉄釉をかけた鉢が出土している。国産の陶磁器はみられない。

II期 各遺構からの出土遺物は少ないが、主体となるのは中国産の青花で、国産では肥前系の甕や瓦質の火鉢がある。肥前磁器も何点かみられるが、全体的な遺物の年代は17世紀前半頃と考えられる。

III期 主体となるのは肥前陶磁で、中国陶磁は少ない。肥前では初期伊万里の大皿や鉄釉のすり鉢などがあり、1650年代以降の海外輸出向けのもは少なく、前回とは異なる様相をみせる。

IV-1期 肥前陶磁がほとんどを占め、わずかに中国陶磁が含まれる。肥前では小形の丸碗がみられるが、くらわんか手などの粗製碗はみられない。中国産では宜興窯の急須や褐釉の壺がみられる。

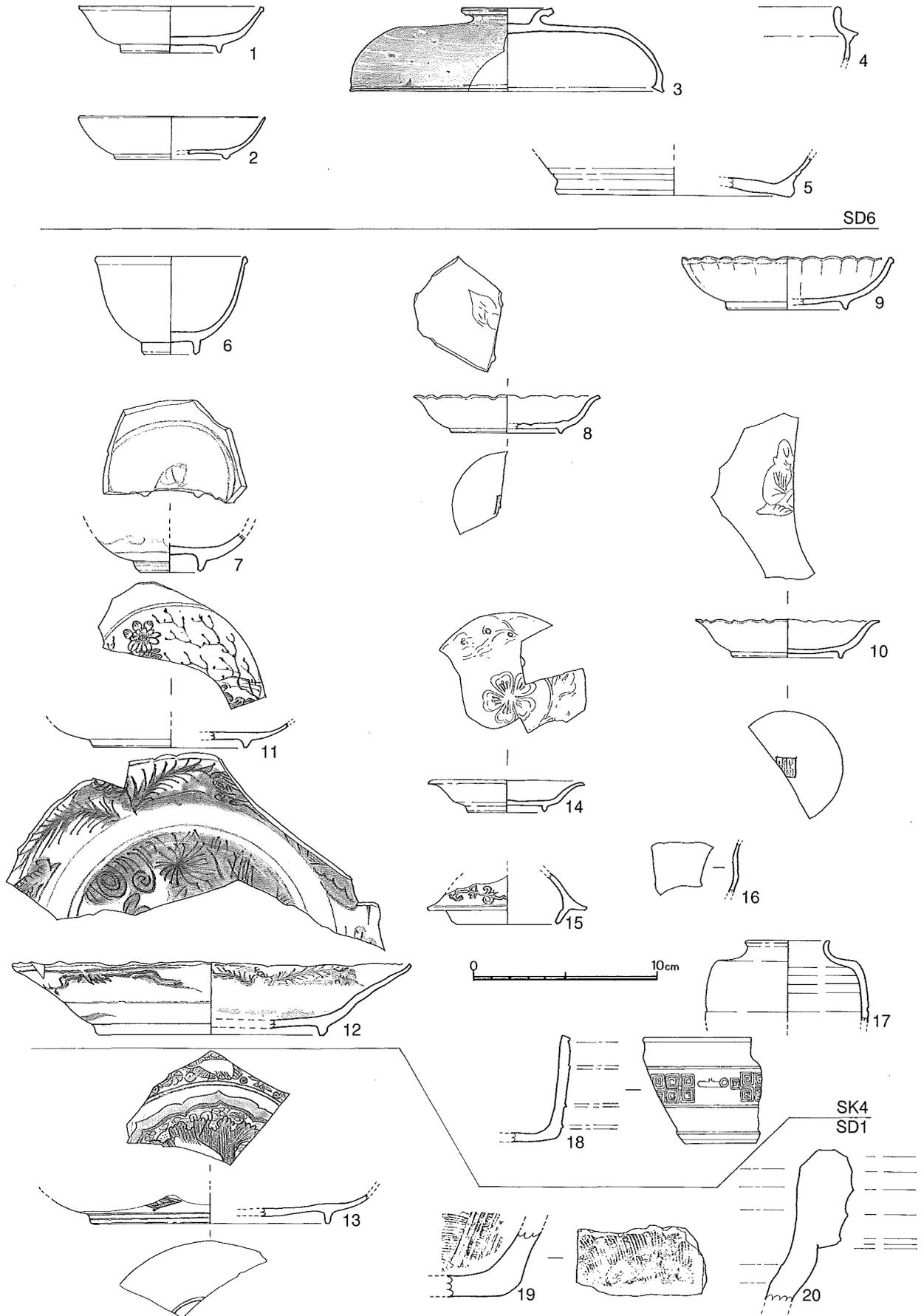
IV-2期 肥前陶磁が主体で、くらわんか手、広東碗などを含んでいる。肥前では長与系の製品も目立つ。また萩系の茶碗もみられる。中国産では、IV-1と比較して青花が増える傾向がある。

V期 肥前陶磁が主体であるが、国内各地からの製品も散見され、IV期までと比べると雑多な印象を受ける。また、下位層からの混入も多い。一方で、SK5において様式的に統一感のある染付の碗・皿が出土している。やや厚いつくりで、金魚や鳳凰などを描き口縁部に雷文を描いているが、地元長崎の亀山焼の影響を強く受けた製品と考えられる。

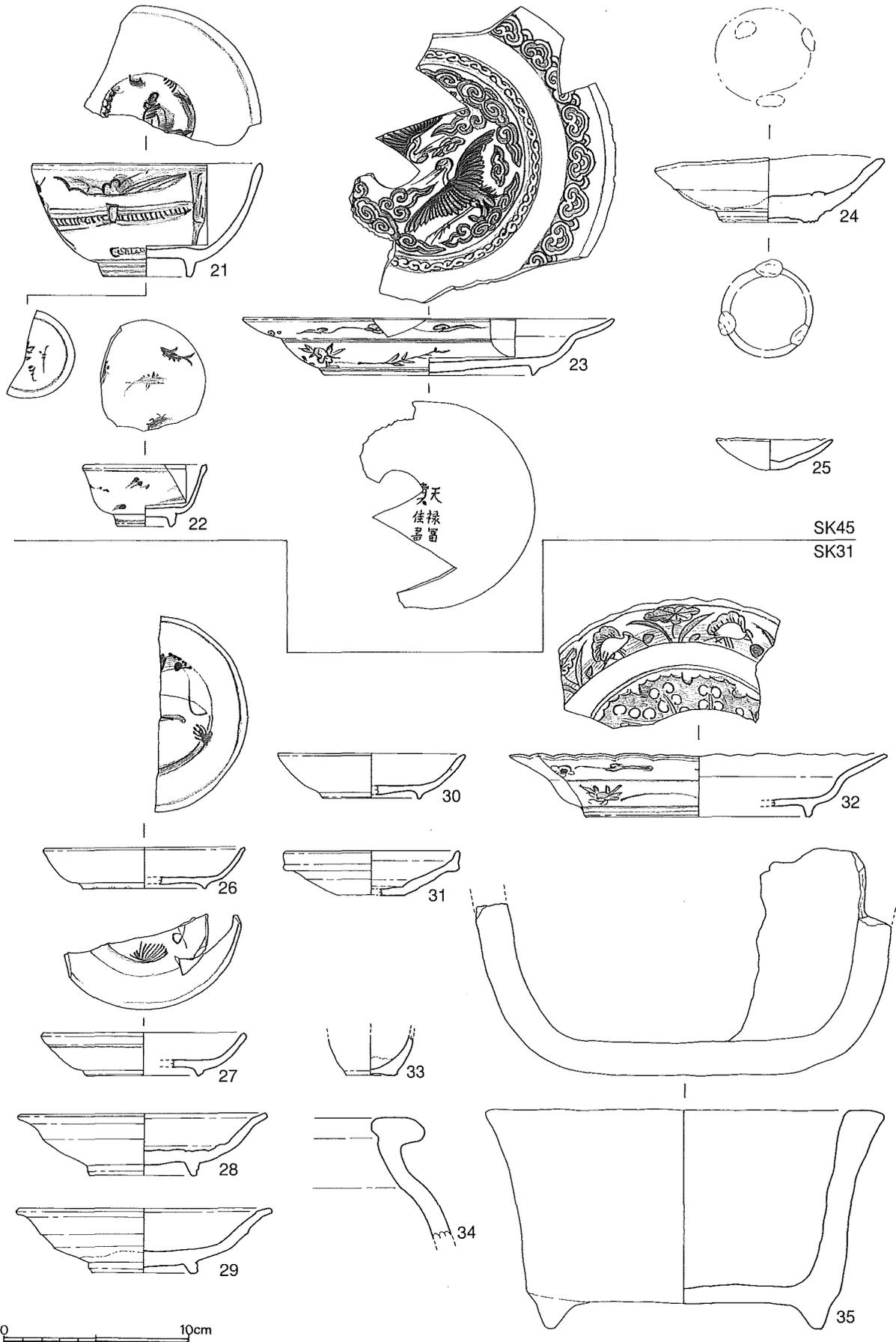
②特記すべき土器・陶磁器

希少な遺物としては、SD6で出土した刷毛目の蓋（6）、SK4出土の褐釉茶入（17）、SK39出土の白磁置物（70）などがあげられる。刷毛目の蓋は器壁が薄く、輪状で幅広のつまみがつくもので、同遺構の4・5の鉢などとセットになると考えられる。産地は不明であるが、中国南部であろうか。褐釉の茶入は、肩がきつく胸部上位に沈線が巡るもので、6町に隣接する内下町（築町・長崎市1997）の調査でも出土している。産地は不明であるが輸入品と推測され、17世紀前半という時期から考えると、日本向けの茶入として焼かれたのではなく、何かの容器であった可能性もある。今後の各地での出土に注目したい。白磁の置物については、貼り付けで葡萄文などを表現しているようであり、陶器質の胎土の上に白化粧し、光沢のある釉をかけている。産地は不明で、類例を知らない。

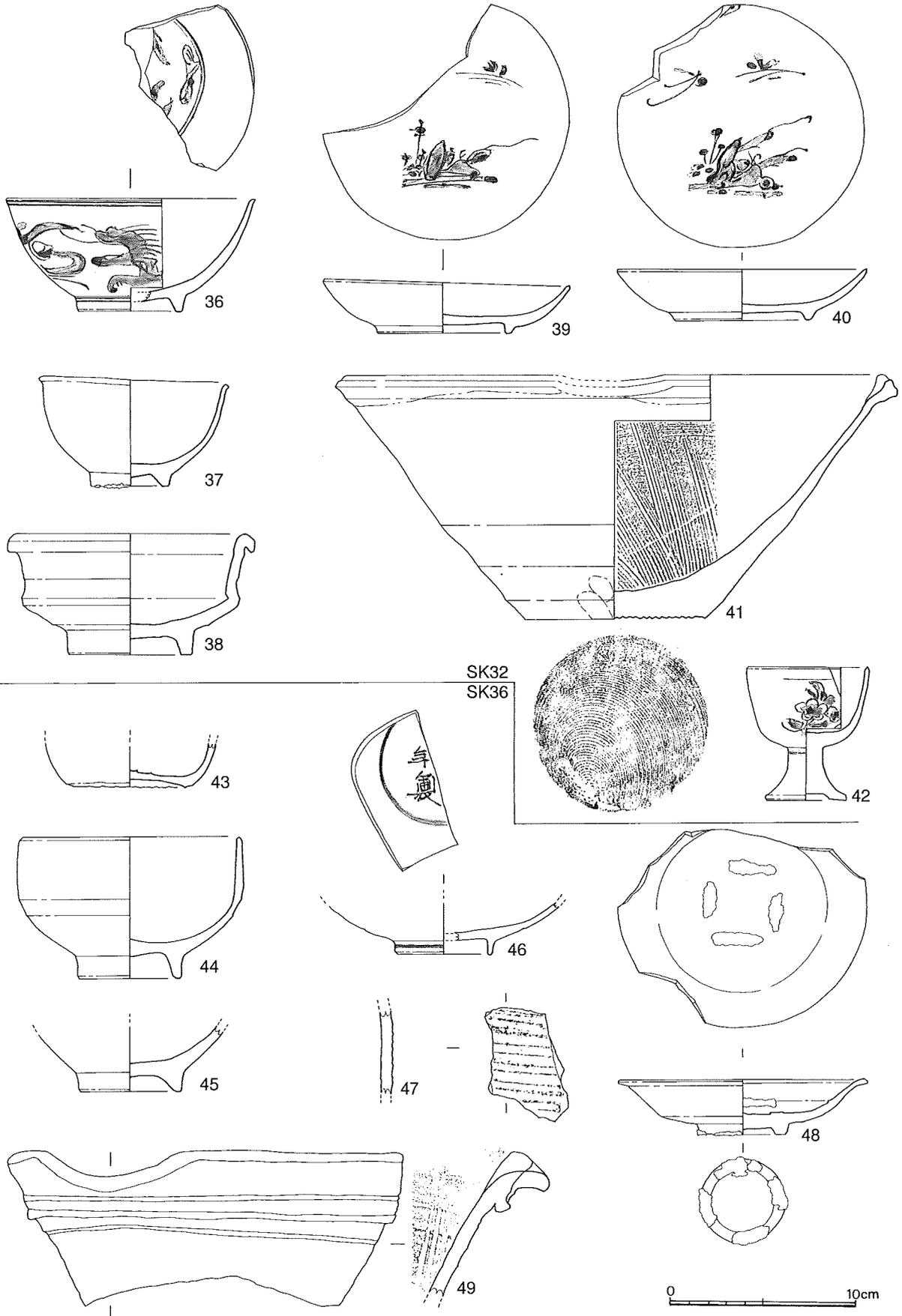
全時期を通してみると、土器・陶磁器に関する限り、隣接する大村町と比べて、質や量ともに及ばないという印象を受ける。これが大村町と平戸町という場所の違いによるものなのか、あるいは居住者の性格の違いによるものなのか、現時点では何ともいえない。今後他の調査事例や文献との比較を通じて検討していくべき課題であると言えるだろう。



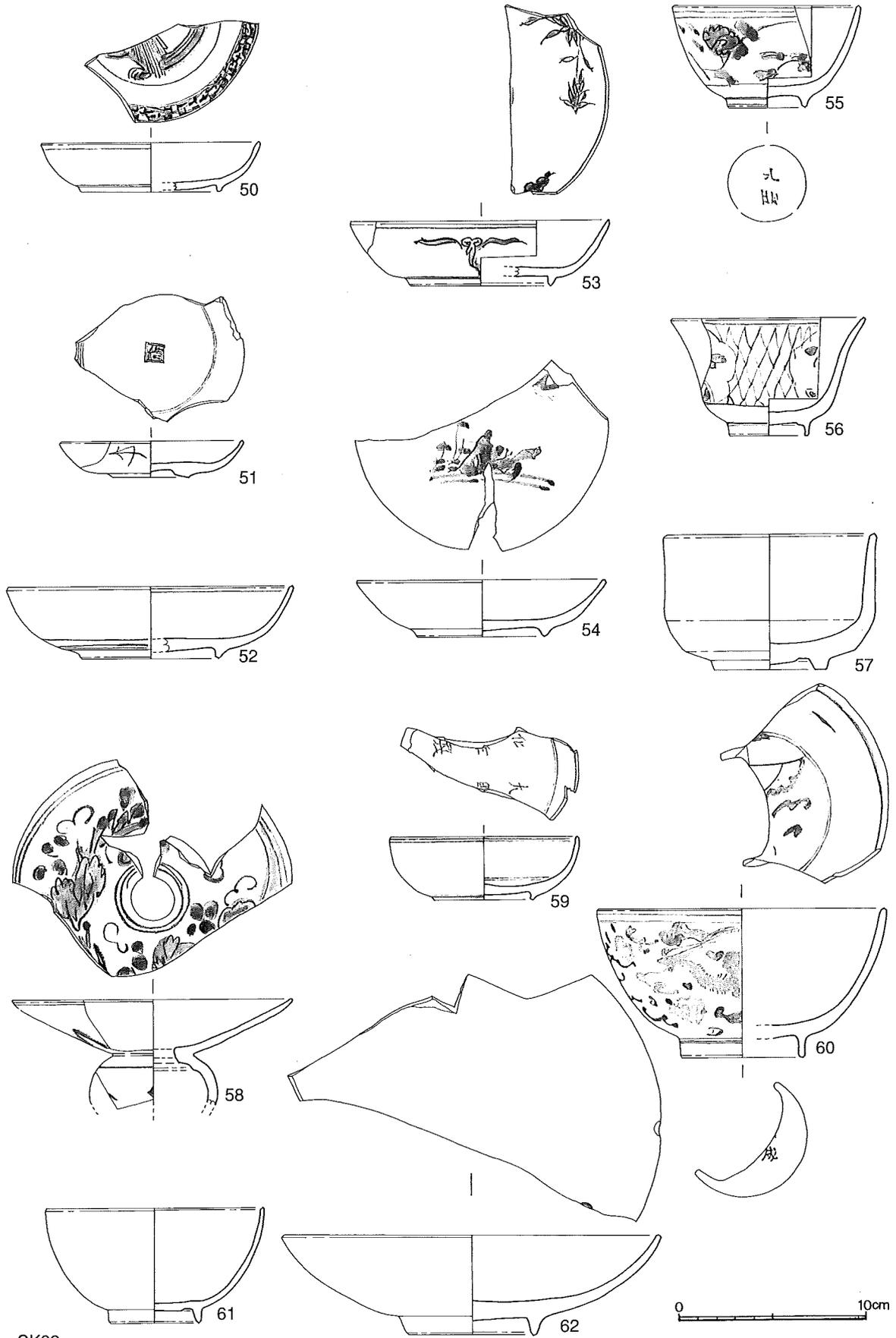
第19图 出土遺物実測図①

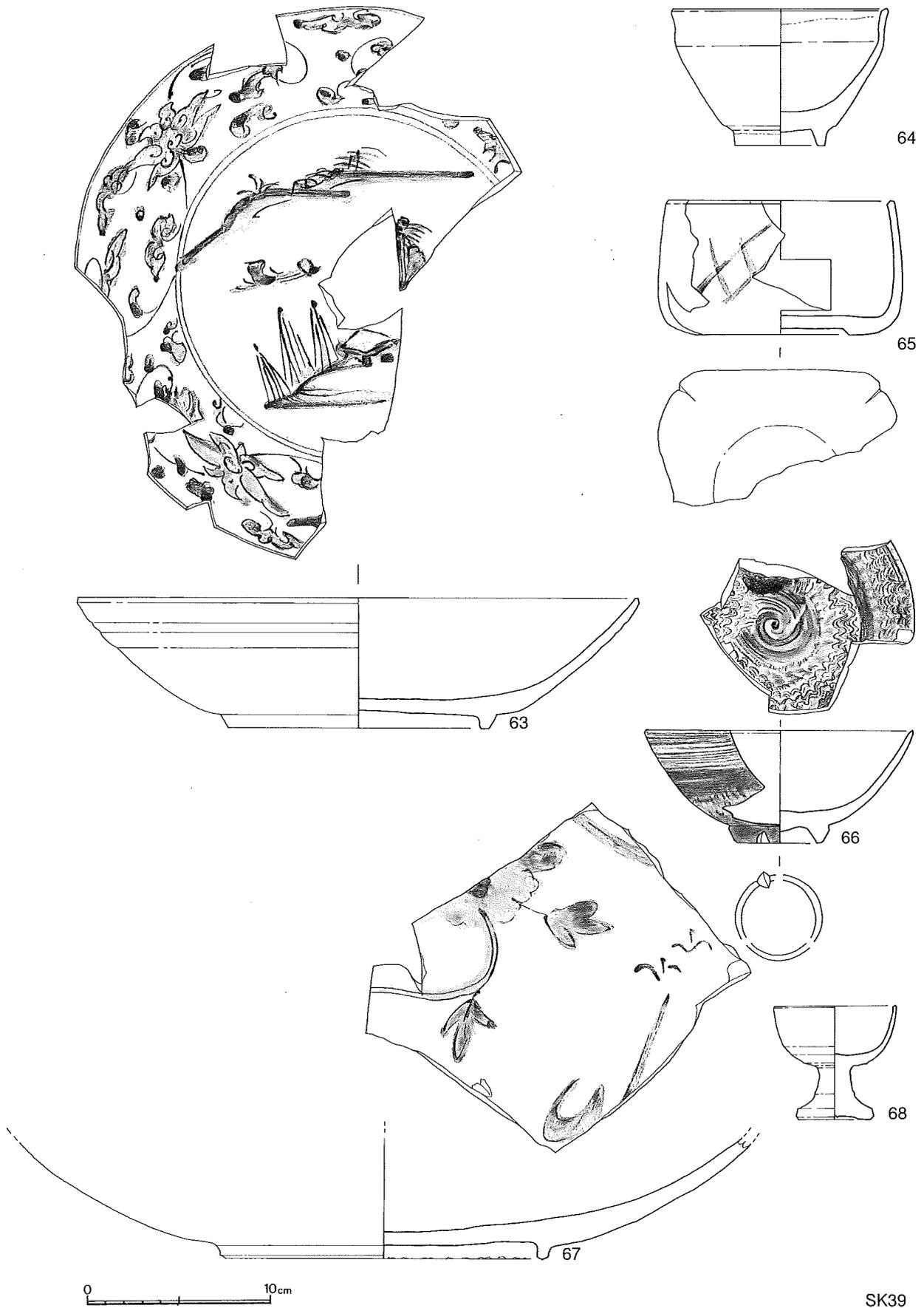


第20图 出土遺物実測図②



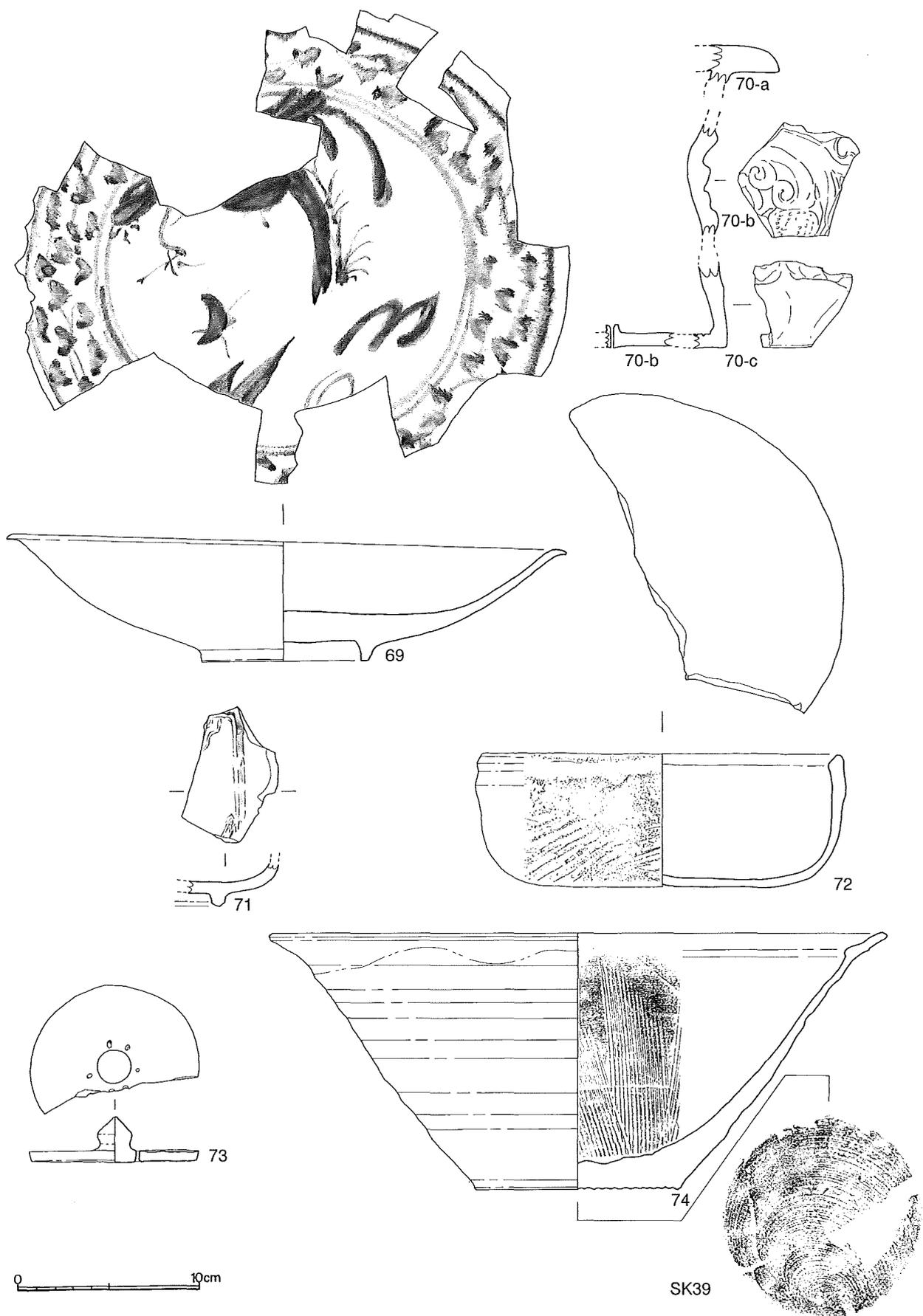
第21图 出土遺物実測図③



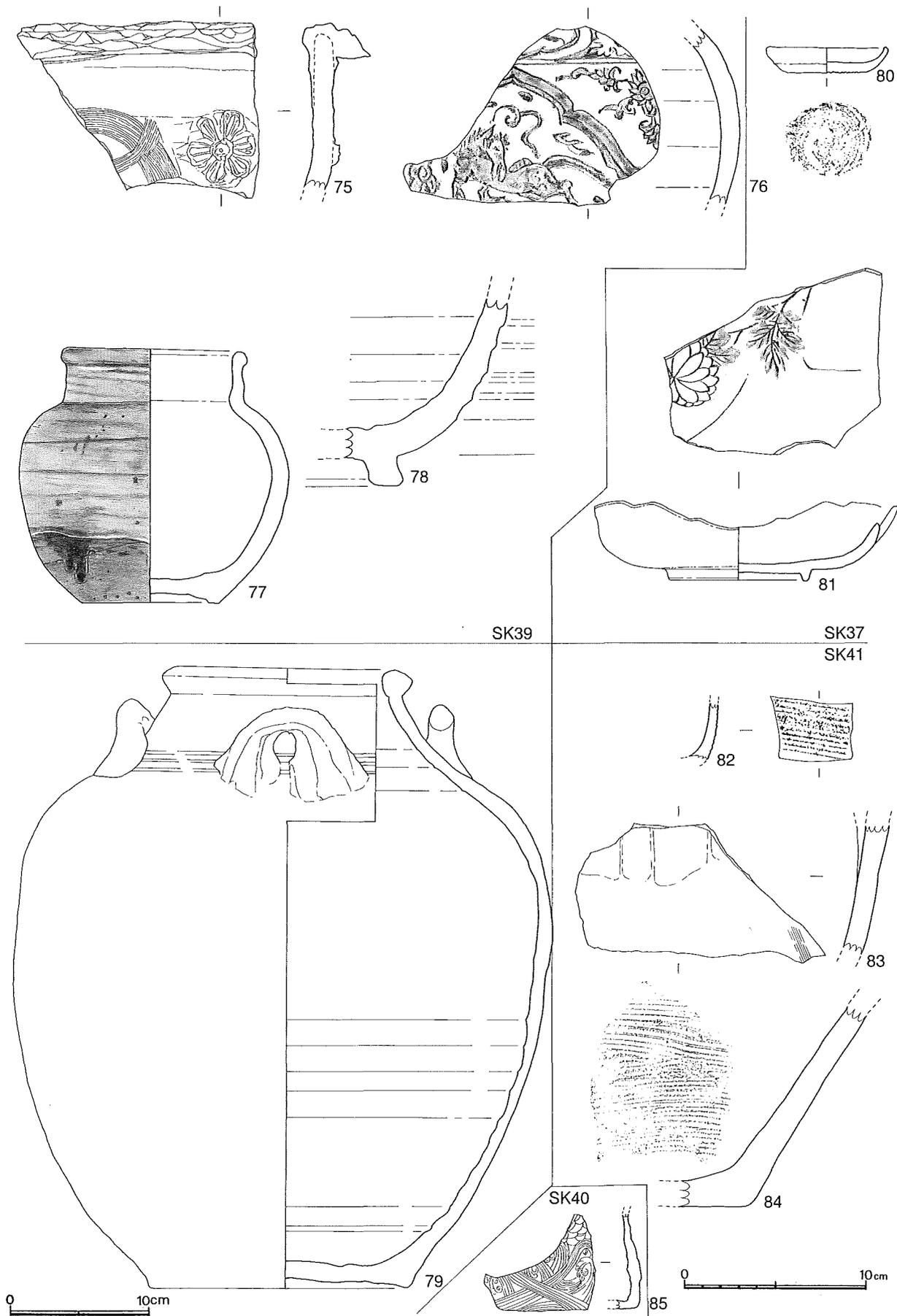


SK39

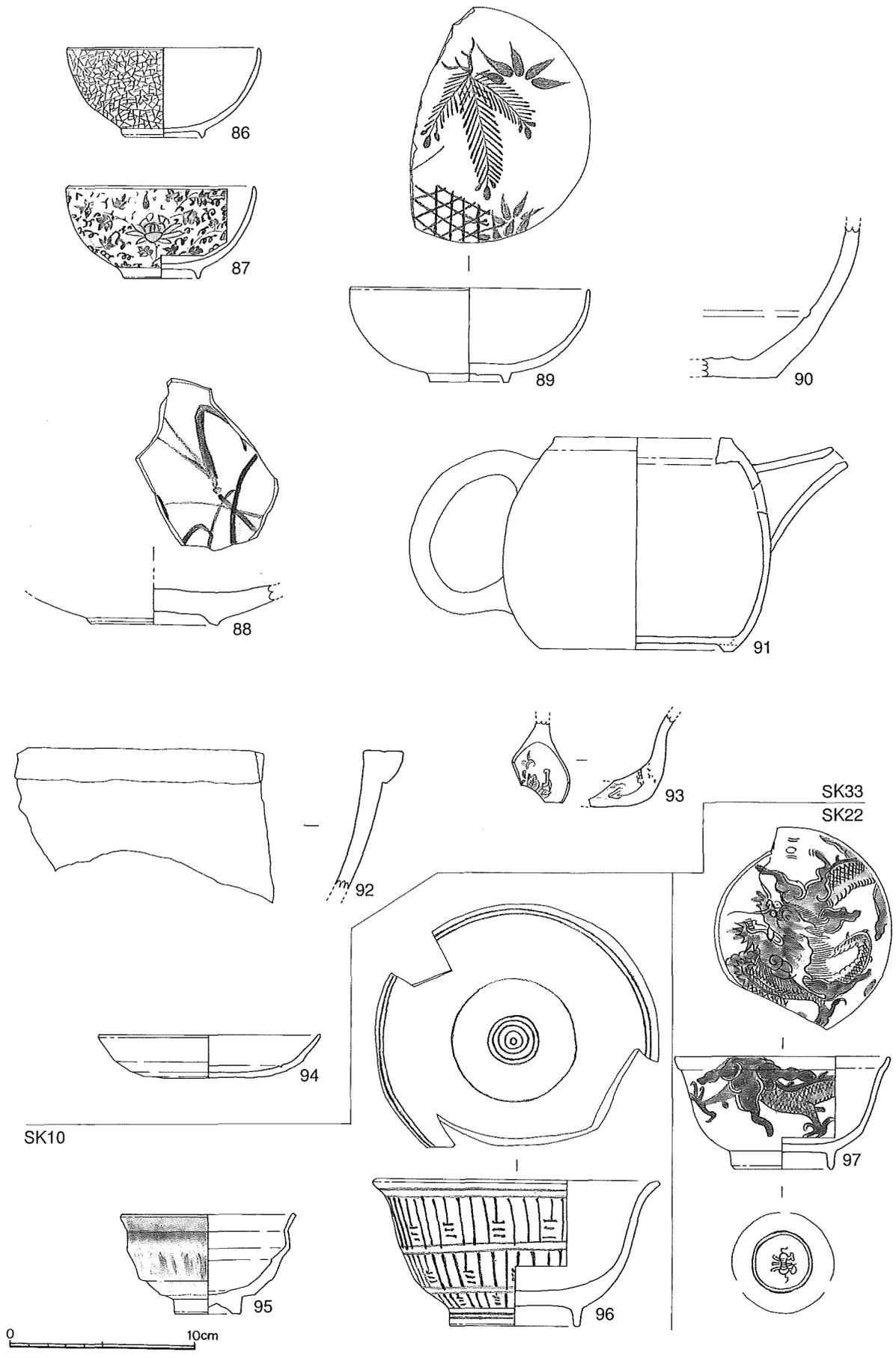
第23図 出土遺物実測図⑤



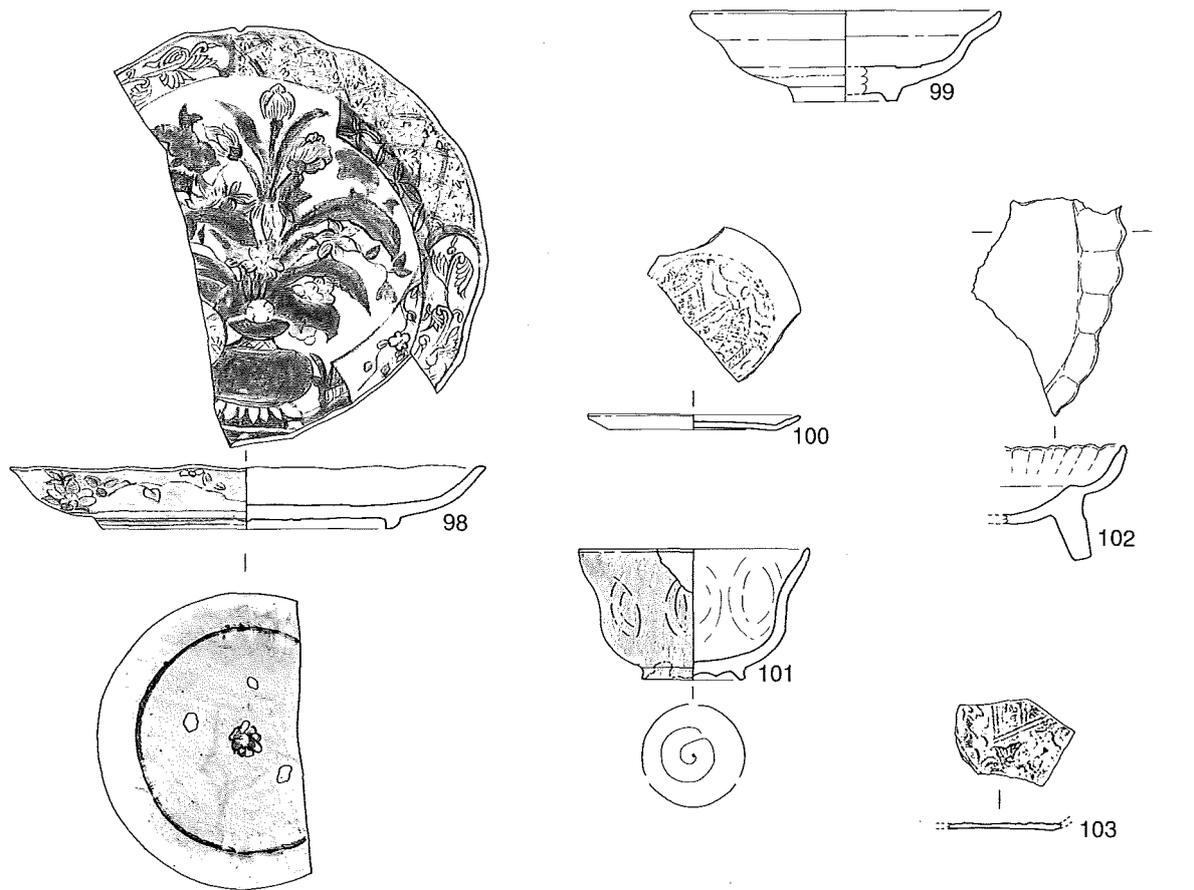
第24図 出土遺物実測図⑥



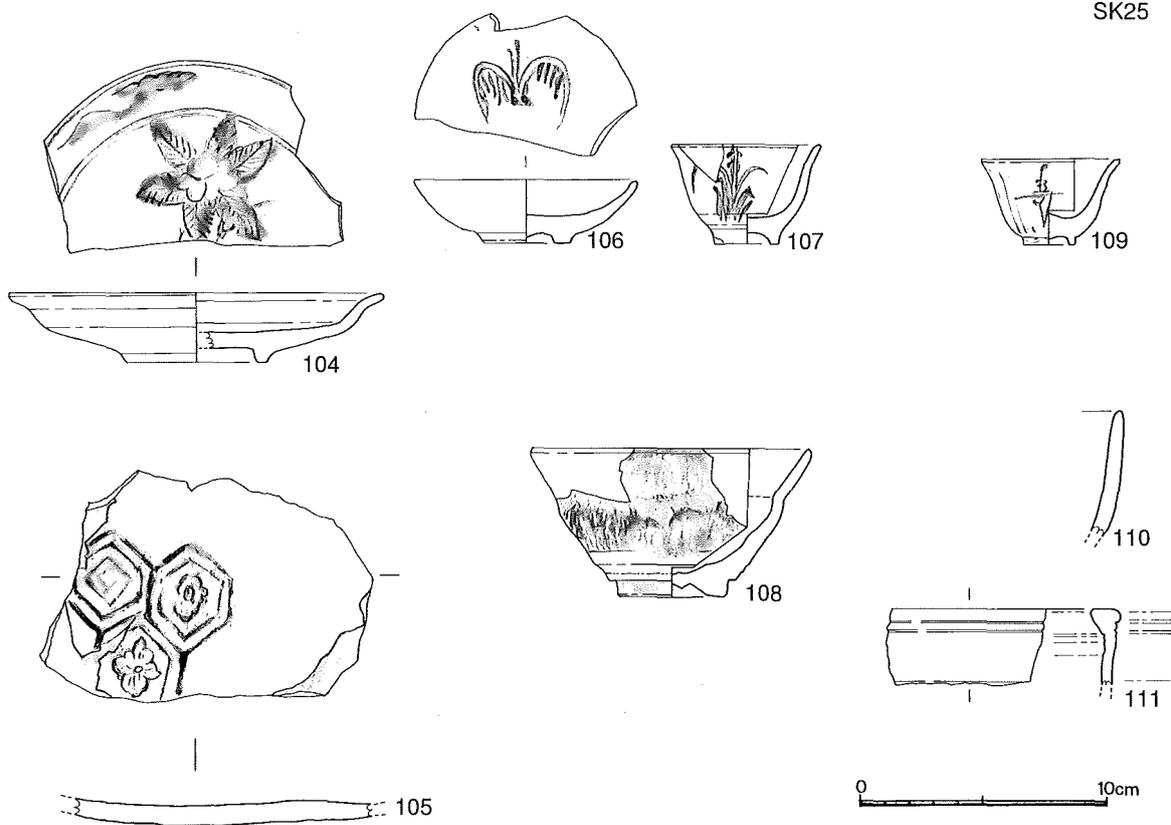
第25図 出土遺物実測図⑦



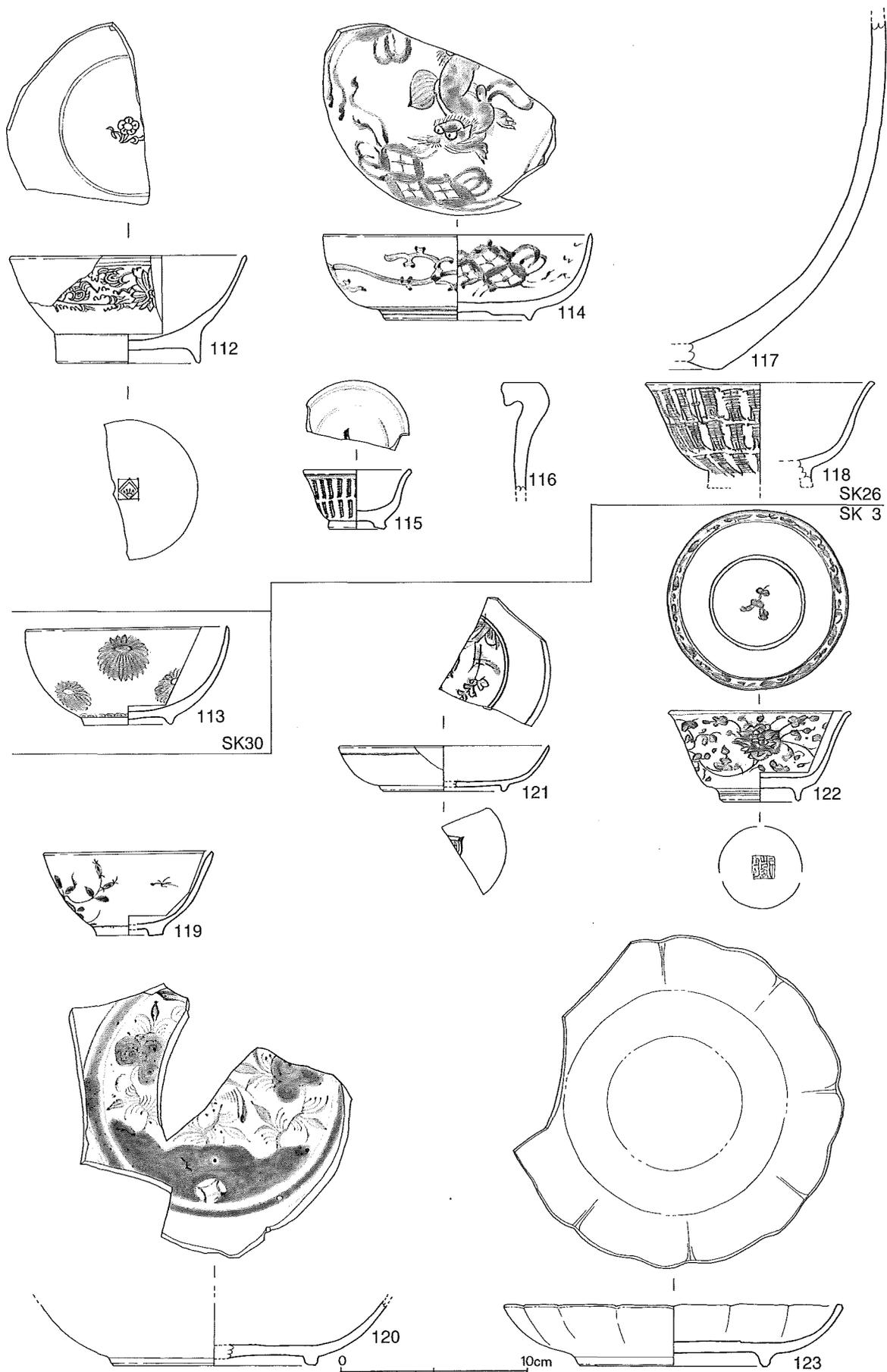
第26图 出土遺物実測図⑧



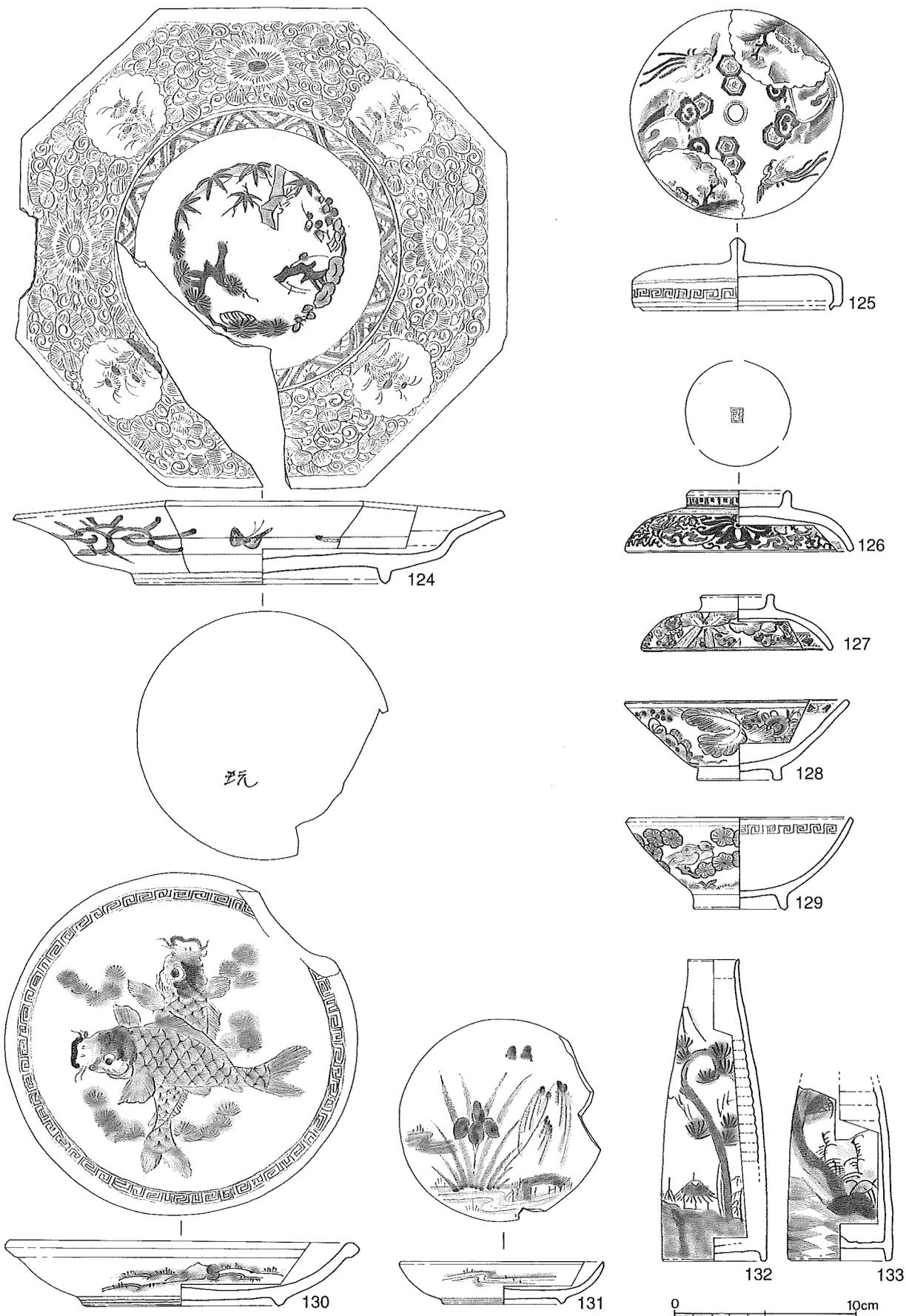
SK24
SK25



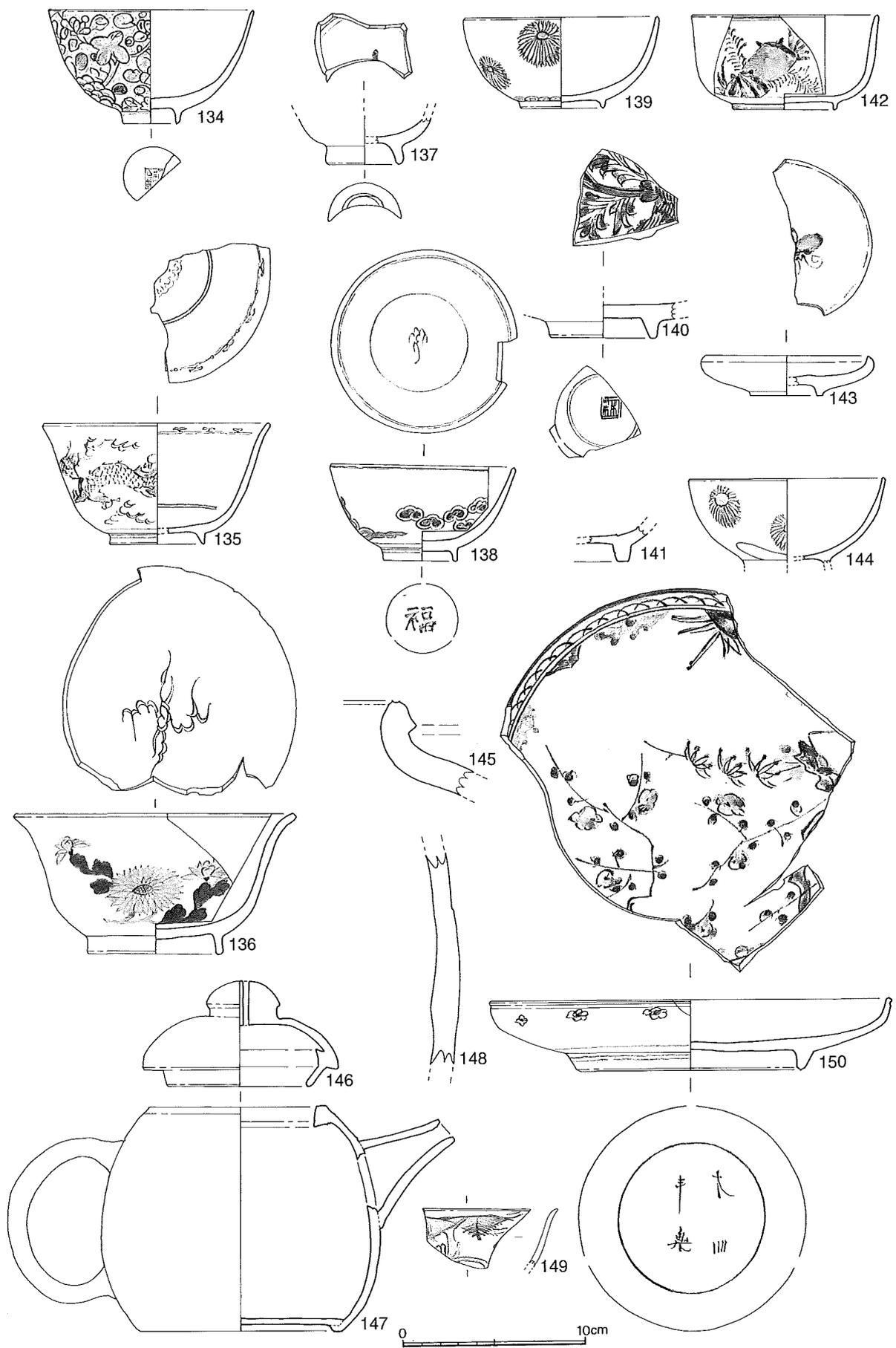
第27图 出土遺物実測図⑨



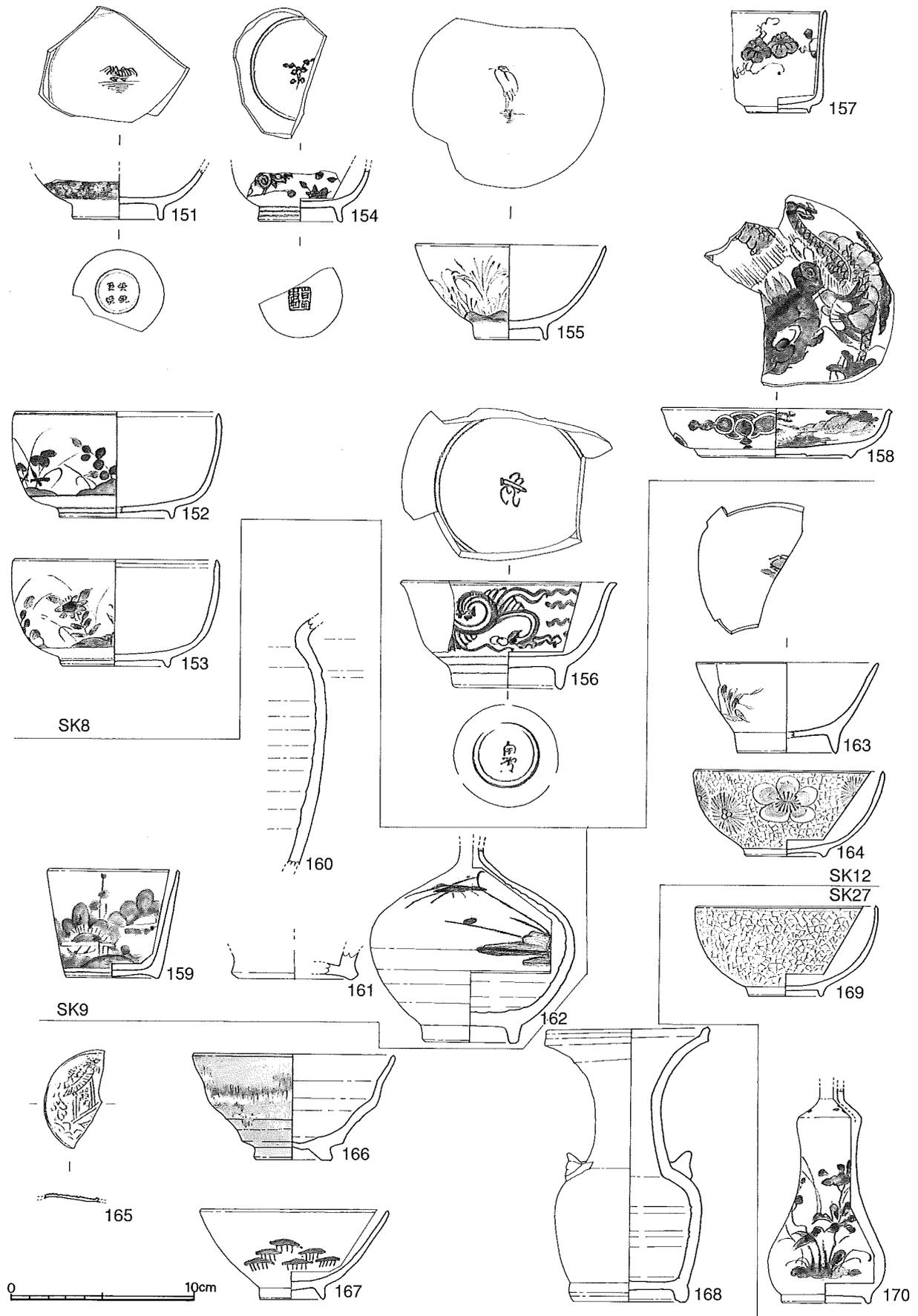
第28图 出土遺物実測図⑩



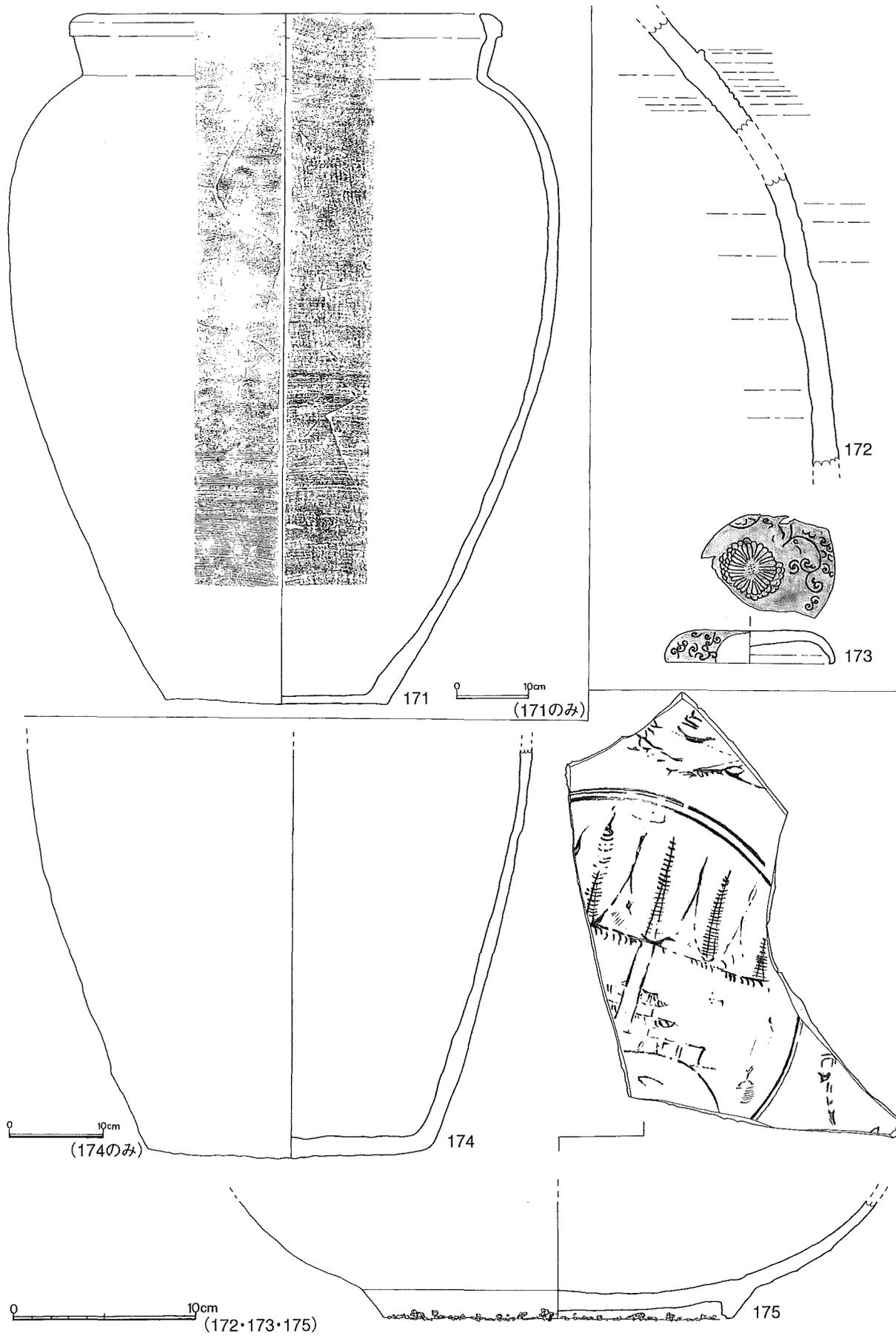
第29图 出土遗物实测图①



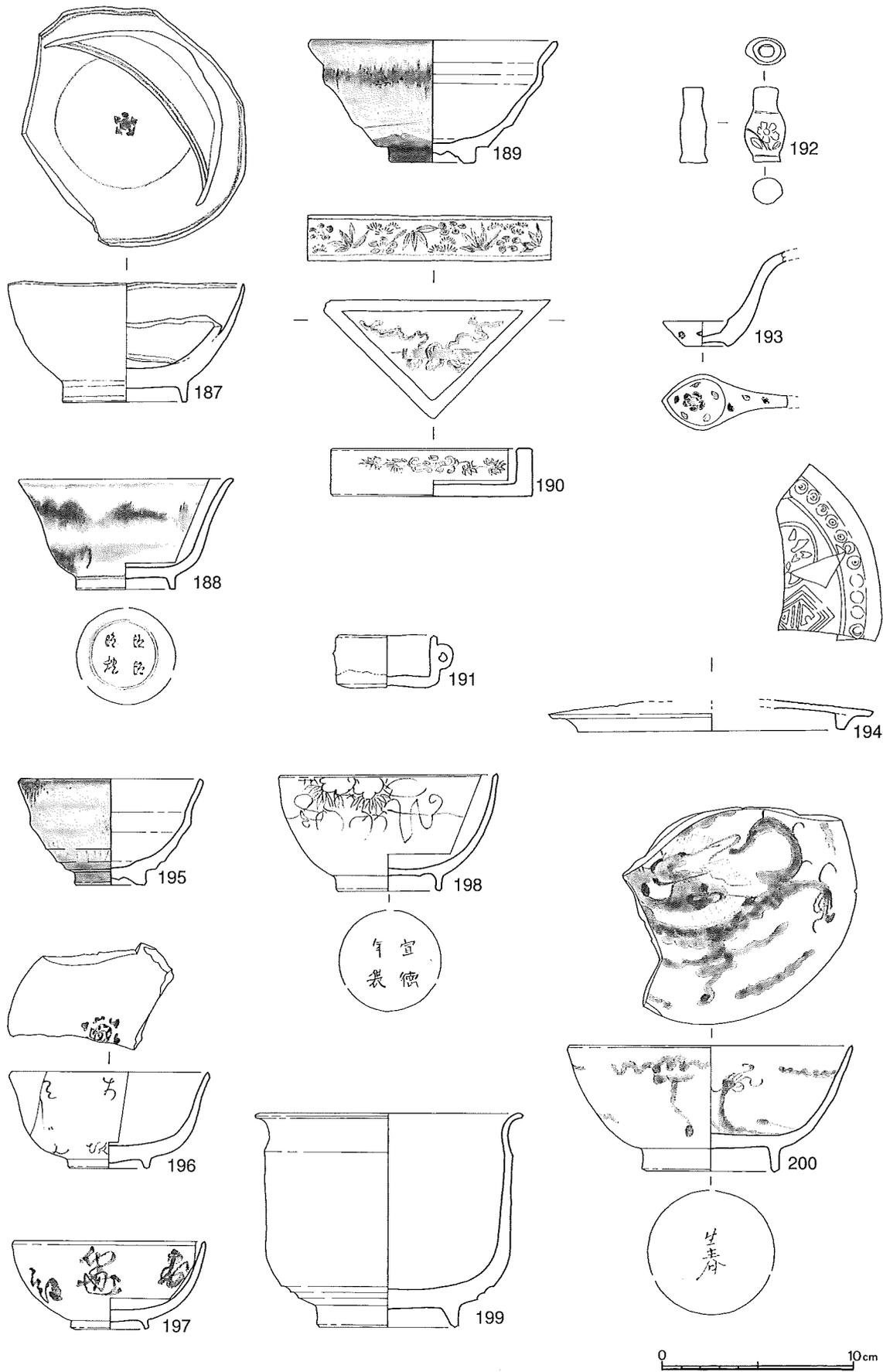
第30图 出土遺物実測図⑫



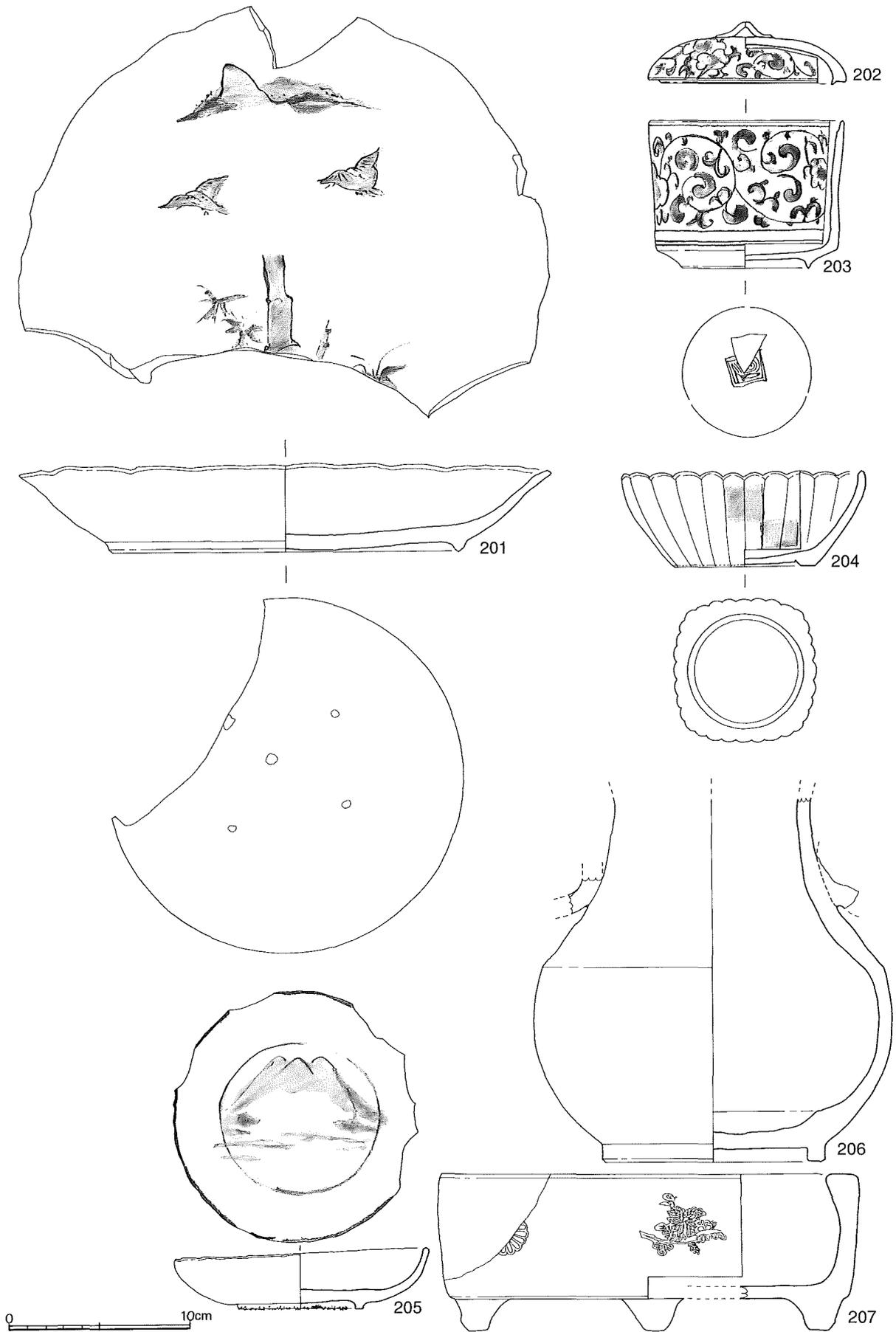
第31图 出土遺物実測図⑬



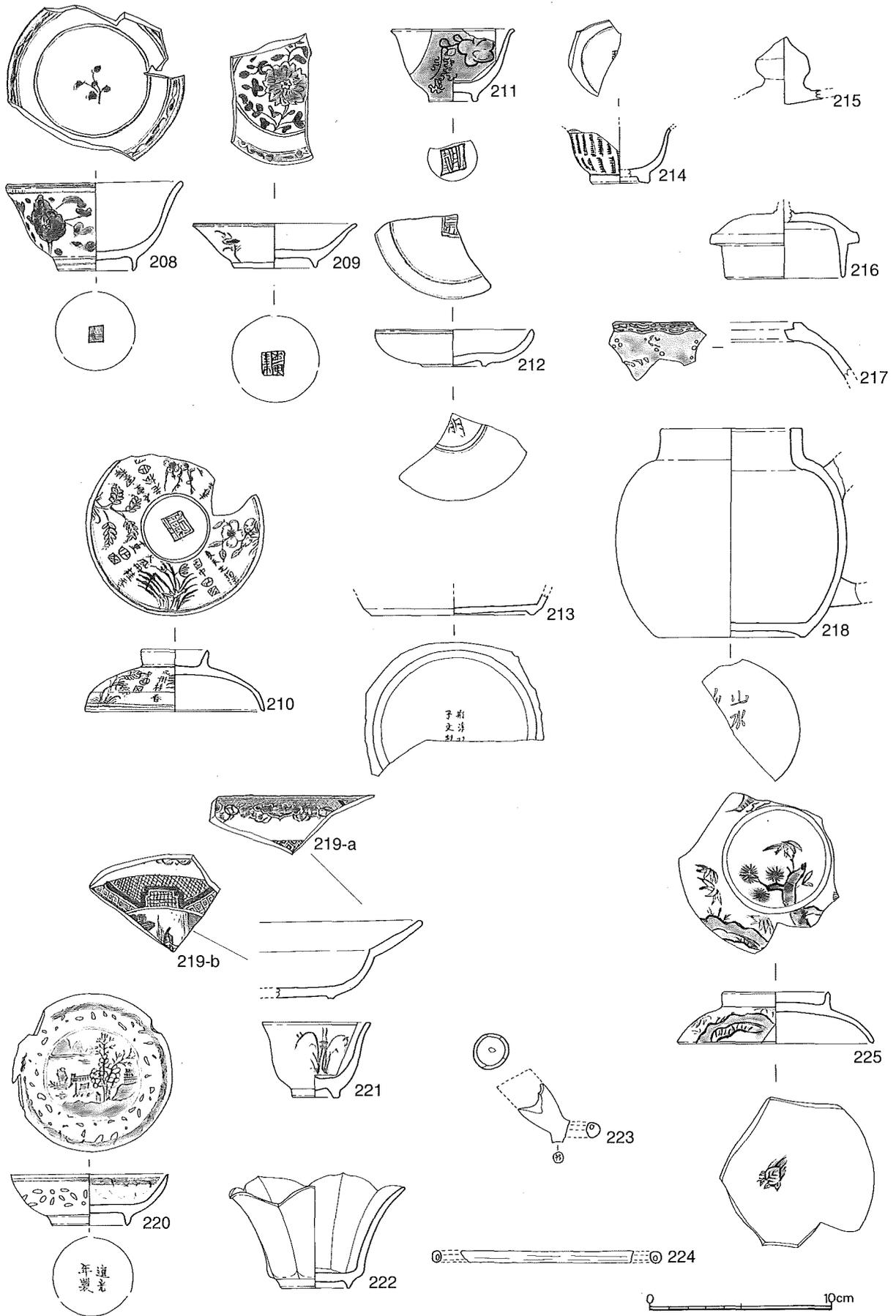
第32図 出土遺物実測図⑭



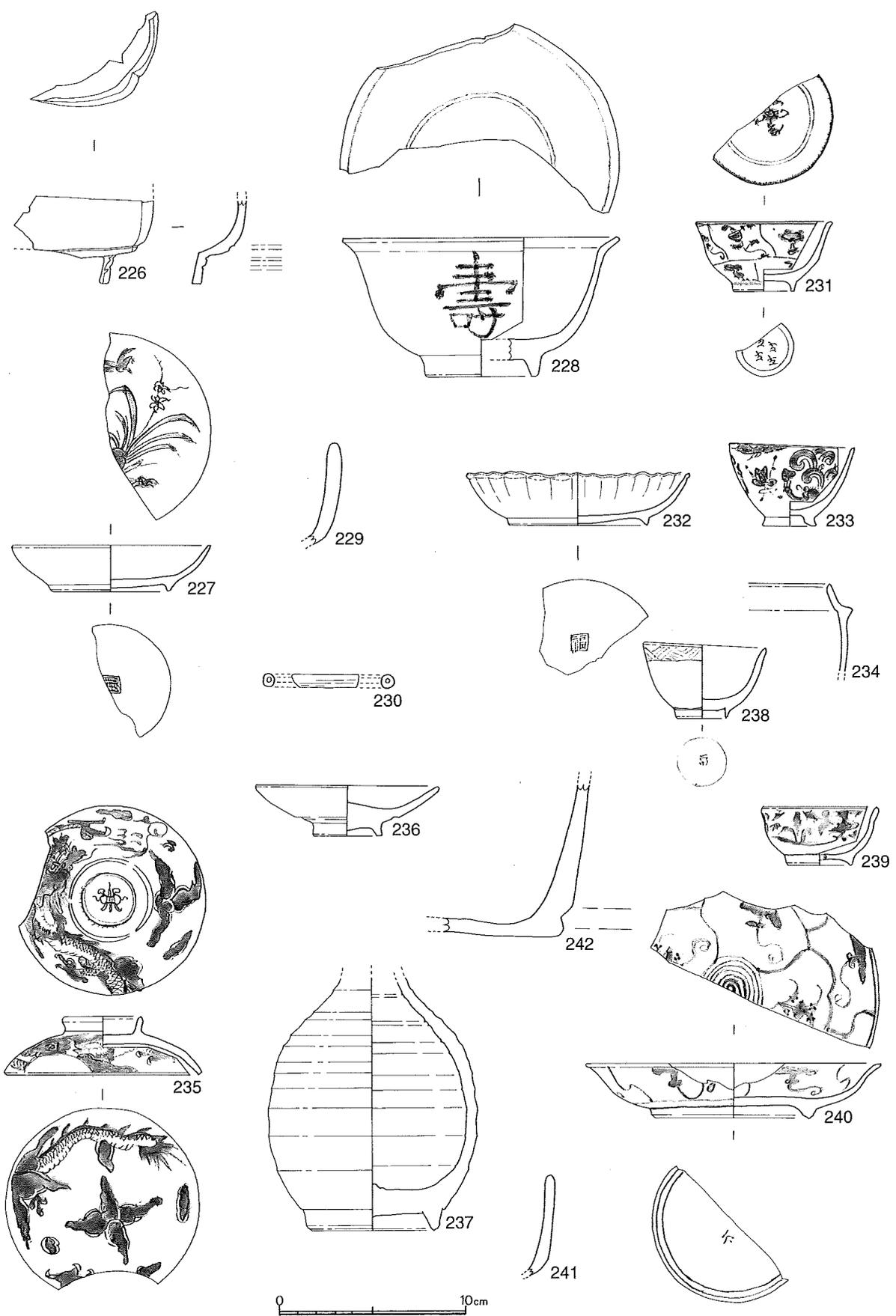
第34图 出土遗物实测图⑩



第35图 出土遺物実測図⑰



第36图 出土遗物实测图⑩



第37图 出土遺物実測图①

(2) 石製品・土製品 (第38図)

1は硯。色調は暗赤褐色。SK31出土。2は緑泥片岩製石錘。上端には径5mmの穴を有し、縦方向に切られた溝でつながる。中央部には凹状の自然面が残り、その外縁には丁寧な面取が施される。重量は595gである。表採資料。3は環状土錘。SK31出土。

4～8は鞆の羽口。石材はすべて砂岩で、外面には融解した黒色の鉄滓やガラス質の物質が付着する。4に付着したガラス質の物質中には、炭化物の付着が顕著にみられる。復元内径は約3cm、外径は約11cmである。表採資料。5は外面灰白色を呈し、内面がピンク色に変色して。内径は約4cm、外径は約10cmである。表採資料。6は外面、内面ともに灰白色を呈す。SE1裏込め出土。7は融解した鉄滓が下部に垂れ下がり固まっている。外面は、灰白色を呈し、内面ピンク色の変色する。外径は約11cm、内径は約4cmである。形状的には5とよく類似するが、やや大ぶりである。SK1出土。8は外面、内面ともに灰白色を呈す。SK25出土。また、図化は行えなかったが、調査区内からは比較的まとまった量の鉄滓が出土している。過去に行われた調査では、11基の铸造関係遺構が検出されている。出土遺物の特徴から、特にE・F区にはガラス関係職人の工房が存在したことが推測されている(宮崎1995)。今回の調査ではそのような性格を持つ遺構は検出されなかったものの、鉄滓や羽口の出土は先の調査結果を補てんするものとなっている。

焼塩壺 (第39図)

調査では身7点、蓋2点の計9点が出土した。その中で、図化できる8点を掲載した。身はすべてコップ形である。分類に関しては、小川氏による編年(小川望2001「焼塩壺」『図説 江戸考古学事典』柏書房株式会社)に従った。

1～6は輪積み成形のI類。出土層位は1・2・4がSK39、3はSK32、5はSK45、6はⅢ層出土である。1・3・5は器高10cm未満の小型。2は12cmを測る大型である。約半分を欠損しているため刻印の有無は不明。7は板作り成形のⅡ類。Ⅲ層出土。8は蓋。トレンチ内出土である。

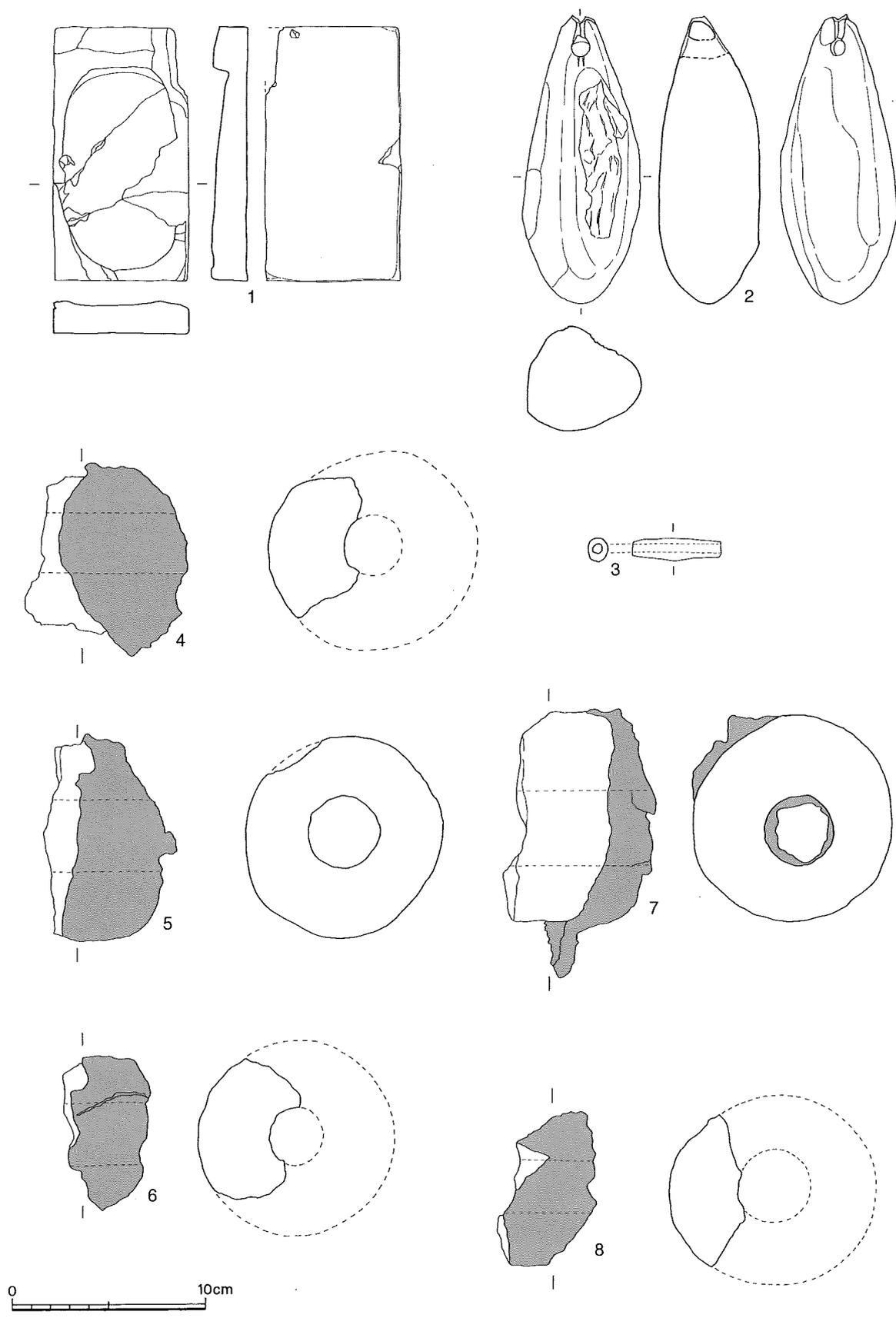
鉄製品 (第39図)

調査では、約244点の鉄製品が出土した。そのなかでも、腐食が少なく図化に耐えうる30点を掲載した。1～7は煙管。1～4は雁首。出土層位は、1がⅢ層、2がSK5、3がSK39、4は表採。5～7は吸口。5はⅢ層、6はSK39、7はⅤ層出土。6・7は肩のみ残存しており、口付部は欠損している。8は用途不明。板状の金属で中心部には幅5mmの溝状の凹みがある。Ⅶ層出土。9は蝶番か。SK38出土。L字状の突起がみられるが、おそらく下部の欠損箇所にも同型のものが存在したようである。10～22は釘。10は切釘。表採。11・12は鋸。11がⅣ層、12がSK45出土。13・14は頭巻釘。13がSK39、14はⅣ層出土。15～22は皆折釘である。15はⅣ層、16はSK41、17・18はSK33出土。19～21はSD6出土。22はサブトレンチ出土。

23はロザリオ。SK4出土。重量は4.33g。金属板を丸め、蠟着した跡がみられる。24は刀類。刃先のみ残存する。反りはみられない。短刀か。SK34出土。25は提灯などの釣金か。SK39出土。26は用途不明。Ⅲ層出土。27・28は簪。ともにSK25出土。

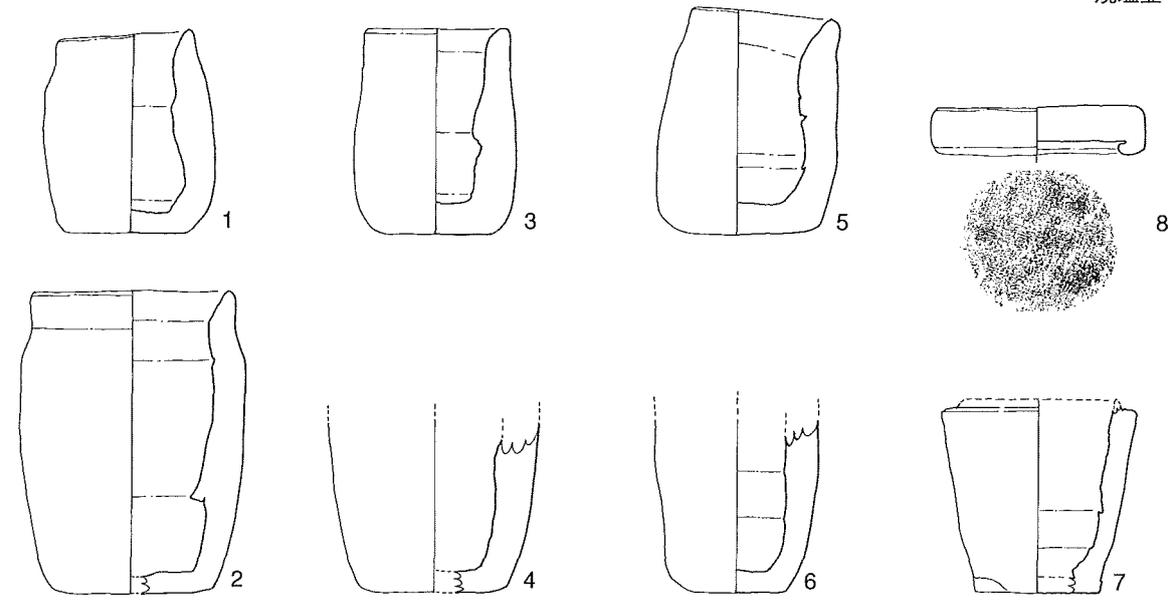
【引用・参考文献】

宮崎貴夫編 1995「万才町遺跡」長崎県文化財調査報告書 第123集
江戸遺跡研究会 2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房株式会社

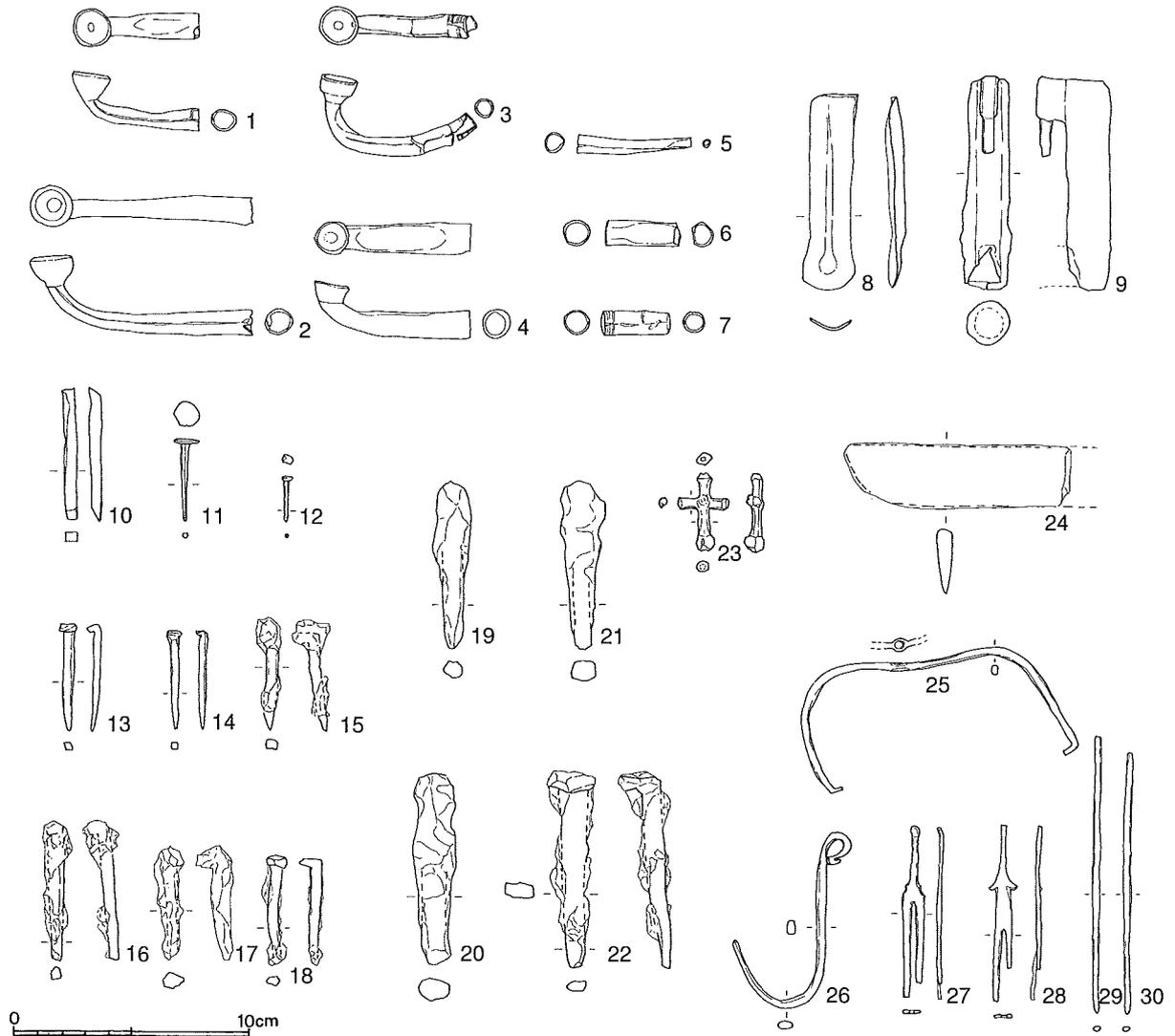


第38図 出土遺物実測図⑳ (S=1/3)

焼塩壺



鉄製品



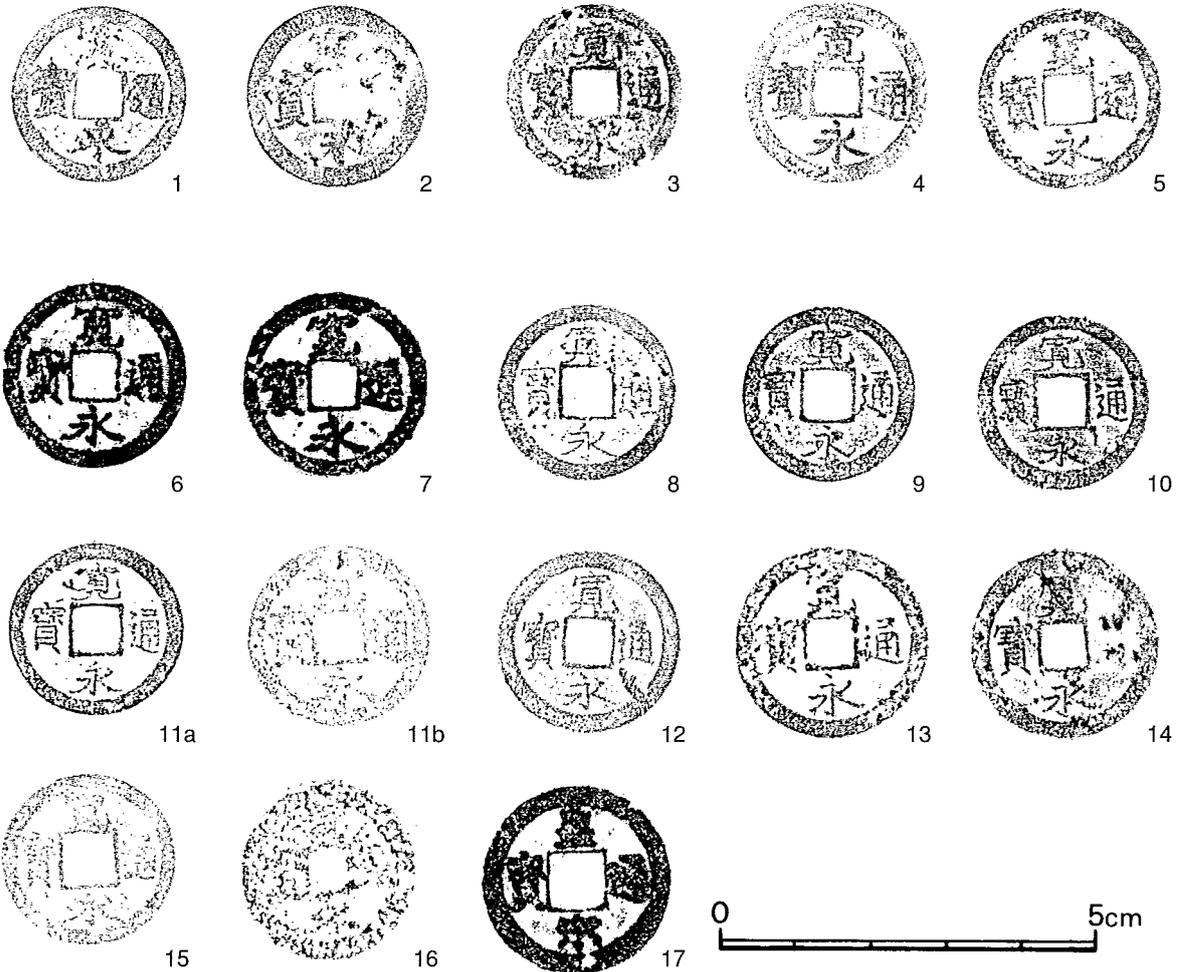
第39図 出土遺物実測図② (S=1/3)

(3) 銭貨 (第40図・第6表)

調査では、37点の銭貨が出土した。そのなかで、拓影での文字判読が可能な17点を掲載した。分類に関しては、永井氏の編年(永井久実男1996『日本出土銭総覧』兵庫県埋蔵銭調査会)に従った。出土層位など詳細な観察は第6表にまとめた。

第6表 出土銭貨観察表

No	種別	分類	出土層位・遺構	分類	铸造年代・備考
1	寛永通寶	古寛永	SK 8	1期	1636年(寛永13)～1659年(万治2)
2	〃	〃	〃	〃	
3	〃	〃	Ⅲ層	〃	
4	〃	〃	V層	〃	
5	〃	〃	〃	〃	
6	〃	〃	SK45	〃	
7	〃	〃	SK 4	〃	
8	〃	新寛永	SE 1 裏込め	3期	1697年(元禄10)～1747年(延享4), 1767年(明和4)～1781年(安永10)
9	〃	〃	Ⅲ層	〃	
10	〃	〃	〃	〃	
11 a	〃	〃	〃	—	11 bと背面同士が付着する
11 b	〃	古寛永	〃	1期	11 aと背面同士が付着する
12	〃	〃	SK26	3期	
13	〃	〃	SK33	—	背面にもう1枚付着している
14	〃	〃	Ⅲ層	2期	1668年(寛文8)～1683年(天和3)
15	〃	〃	〃	3期	
16	〃	—	SK25	—	腐食が激しいため詳細は不明
17	皇宋通寶	北宋銭	SK47	—	真書 1038年(寶元元)初铸造



第40図 出土遺物実測図② (S=1/1)

第7表 遺物観察表①

番号	遺物名称	区・遺構・層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	生産地	備考
1	青花皿	SD 6 上面	9.8	5.9	2.5	中国(景德鎮)	
2	青花皿	SD 6	10.0	5.8	2.3	中国(景德鎮)	
3	刷毛目陶器蓋	SD 6	16.6	—	4.5	中国南部?	外面のみ施釉
4	陶器鉢	EトレVI	—	—	—	中国南部?	
5	鉄釉	P21	—	12.4	—		(外)灰 (内)黒
6	染付碗	SK 4	7.9	2.7	5.2	肥前	
7	赤絵碗	SK 4	—	3.2	—	肥前	
8	染付輪花皿	SK 4	10.0	5.8	2.0	肥前	
9	白磁輪花皿	SK 4	11.3	6.5	2.8	肥前	
10	青花輪花皿	SK 4	9.8	5.8	2.0	中国(景德鎮)	
11	青花皿	SK 4	—	—	—		
12		SK 4・SK 1	21.4	12.0	3.8		
13	白磁小皿	SK 4	8.4	4.3	1.7	肥前	
14	青花蓋	SK 4	5.8	—	—	中国(景德鎮)	
15		SK 4	—	—	—		
16	褐釉茶入	SK 4	4.6	—	—	中国南部?	
17	白磁火入	SK 4・SK 1	7.8	3.2	5.7	中国	
18	青花皿	SD 1	—	12.8	—	中国(景德鎮)	
19	瓦質すり鉢	SD 1	—	—	—	日本	
20	焼締大蓋	SD 1	—	—	—	備前	
21	青花碗	SK45	6.1	2.4	6.0	中国(景德鎮)	
22	色絵碗	SK45	6.6	3.2	3.3	中国	
23	青花皿	SK45・SK47・SK38・D 2 H・EトレVI	19.8	11.0	3.1	中国(景德鎮)	高台内に「天禄富貴佳品」
24	陶器皿	SK45	12.1	5.2	3.6	肥前	胎土目跡のこる
25	土器小皿	SK45	6.2	—	1.7	日本	ルツボか
26	染付皿	SK31	10.6	3.3	2.2	中国(景德鎮)	
27	青花皿	SK31	10.8	5.8	2.3	中国(景德鎮)	
28	粗製青磁皿	SK31	13.1	5.6	3.3	中国?	
29	粗製青磁皿	SK31	13.4	5.7	3.4	中国?	
30	青花皿	SK31	4.9	2.5	2.4	中国(景德鎮)	
31	黒褐陶器蓋	SK31	9.2	3.4	2.3	中国南部	
32	青花皿	SK31	19.9	12.0	3.3	中国(景德鎮)	
33	緑釉小壺	SK31	—	2.6	—	?	内面に鉄を塗る
34	陶器壺	SK31	—	—	—	肥前	
35	瓦質火鉢	SK31	28.0	22.0	15.4	日本	
36	染付碗	SK32	13.0	5.6	6.0	肥前	見込雲龍荒磯文碗
37	灰釉碗	SK32	9.9	4.1	5.8	肥前	
38	鉄釉火入	SK32	12.9	6.5	6.4	肥前	
39	染付皿	SK32	—	7.0	2.5	肥前	
40	染付皿	SK32	13.1	7.2	2.8	肥前	
41	鉄釉すり鉢	SK36・SK39・SK32・SK 8	28.4	9.4	12.9	肥前	
42	染付脚付杯	SK32	6.5	4.3	7.0	肥前	
43	白磁蓋	SK36	—	5.8	—	中国(徳化窯)	
44	京焼風陶器	SK36	11.4	5.2	7.4	肥前	
45	白磁碗	SK36	—	5.4	—	内野山	
46	染付皿	SK36	—	5.0	—	肥前	
47	焼締壺	SK36	—	—	—	東南アジア	
48	灰釉陶器皿	SK36	13.0	4.7	2.9	肥前	砂目積み跡のこる
49	鉄釉すり鉢	SK36	29.0	—	—	肥前	
50	青花皿	SK39	11.4	7.2	2.6	中国(景德鎮)	
51	染付皿	SK39	9.6	4.0	1.9	肥前	
52	染付深皿	SK39	14.2	7.0	3.6	肥前	
53	染付皿	SK39	13.4	3.7	3.4	肥前	
54	染付皿	SK39	13.0	6.9	3.0	肥前	
55	染付碗	SK39	9.8	4.1	5.4	肥前	
56	染付碗	SK39	10.2	4.2	6.2	肥前	
57	灰釉陶器碗	SK39	11.0	5.7	7.1	肥前	
58	染付唾壺	EトレV・SK39	14.4	—	—	肥前	
59	染付皿	SK39	9.8	5.0	3.3	肥前	
60	染付碗	SK39	15.0	6.4	7.8	肥前	
61	碗	SK39	11.4	4.8	6.0	肥前	
62	染付皿	SK39	19.6	6.8	5.2	肥前	
63	染付大皿	SK39・SK33・SE 1 ウラ・B 3 皿・SK 9・SK25.29	32.0	14.0	7.1	肥前	
64	鉄釉碗	SK39	11.7	4.8	7.3	肥前	(外)黒 (内)灰
65	志野角鉢	SK39	12.2	9.4	7.2	瀬戸・美濃	
66	刷毛目碗	SK39	14.4	4.8	6.1	肥前	
67	染付大皿	SK32・SK39・A 2 皿	—	16.7	—	肥前	
68	白磁脚付杯	SK39	6.6	4.1	6.1	肥前	仏飯具
69	染付大皿	SK39	29.8	—	6.4	肥前	
70-a	白磁置物	SK39	—	—	—	中国?	
70-b	白磁置物	SK39	—	—	—	中国?	
70-c	白磁置物	SK39	—	—	—	中国?	
70-d	白磁置物	SK39	—	—	—	中国?	
71	色絵皿	SK39	—	—	—	中国	
72	焼締鉢	SK39・SK46	19.4	11.8	7.2	東南アジア	
73	焼締蓋	SK39	8.8	—	2.4	不明	
74	鉄釉すり鉢	SK39	32.6	10.8	13.7		口縁のみ施釉
75	鉄釉鉢	SK39	—	—	—	日本	
76	青花壺	SK39	—	—	—	中国(景德鎮)	
77	緑釉壺	SK39	10.1	7.4	14.0	肥前	(外)緑 (内)鉄
78	焼締壺	SK39	—	24.0	—	備前?	

第8表 遺物観察表②

番号	遺物名称	区・遺構・層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	生産地	備考
79	焼締四耳壺	SK39・SK46・SK27・SK46・SK37・SK38・SE1 裏込め	16.0	19.0	45.2	タイ	
80	土師皿	SK37	6.6	4.1	1.4	日本	
81	陶器輪花皿	SK37	15.2	7.4	3.1	肥前?	
82	焼締壺	SK41	—	—	—	東南アジア	
83	焼締四耳壺	SK41	—	—	—	タイ	
84	焼締四耳壺	SK41	—	—	—	タイ	
85	白磁壺	SK40	—	—	—	中国	
86	染付丸碗	SK33	10.2	4.2	4.8	肥前	
87	染付丸碗	SK33	10.0	4.0	4.9	肥前	
88	鉄釉陶器皿	SK27	—	6.8	—	肥前	絵唐津
89	色絵陶器皿	SK33	12.8	4.2	5.0	肥前?	
90	褐釉壺	SK33	—	13.0	—	中国か	
91	朱泥急須	SK33	9.3	10.0	11.2	中国(宜興窯)	
92	あめ釉鉢	SK33	30.8	—	—	中国	
93	色絵さじ	SK33	—	—	—	肥前	高さ5.0
94	土師皿	SK33・B2Ⅲ	11.6	4.6	2.3	日本	
95	陶器碗	SK10	9.2	3.6	5.3	萩	
96	染付碗	SK10・A3Ⅲ	15.2	6.8	7.8	肥前	
97	染付蓋付碗	SK22	11.4	5.4	6.0	肥前	蓋なし
98	色絵皿	SK24	19.0	11.6	3.5	肥前	ハリササエ痕あり
99	灰釉皿	SK24	12.2	4.2	3.6	内野山	
100	紫泥小皿					中国(宜興窯)	
101	灰釉碗	SK25	9.0	4.0	5.2	不明(日本)	
102	脚付陶器皿	SK25・SK25.29	—	—	4.5	日本(京か)	
103	紫泥小皿					中国(宜興窯)	
104	染付皿	SK25	14.8	5.6	2.7	肥前	
105	志野鉢?	SK25	—	—	—	瀬戸美濃	
106	染付皿	SK25・SK25.29	8.8	3.4	2.5	肥前	
107	染付小杯	SK25・SK25.29	5.8	2.6	4.0	肥前	
108	陶器碗	SK11・SK25	11.0	4.0	5.9	萩	
109	染付小杯	SK25.29	5.4	2.0	3.4	肥前	
110	志野陶器碗	SK25	—	—	—	瀬戸美濃	
111	焼締長胴壺	SK25.29	10.2	—	—	ベトナム	
112	染付碗	SK26	11.1	6.7	5.6	肥前	広東碗
113	染付丸碗	SK7 SK30	10.6	4.6	5.1	肥前	
114	染付深皿	SK26	14.0	7.6	4.5	肥前	
115	青花小杯	SK26	6.2	3.4	3.1	中国(景德鎮)	
116	陶器カマ	SK26	—	—	—		内面に鉄を塗る
117	鉄釉壺	SK26	17.4	—	—	中国?	
118	青花碗	SK26	12.0	—	—	中国(景德鎮)	
119	染付碗	SK3	8.8	3.4	4.4	肥前	
120	青花皿	SK3	—	10.8	—	中国(景德鎮)	
121	青花皿	SK3	11.0	6.4	2.4	中国(景德鎮)	
122	青花碗	SK3	9.6	4.3	4.8	中国(景德鎮)	
123	白磁輪花皿	SK3	17.6	10.0	3.2	肥前	
124	染付角皿	SK5	—	—	—	肥前	
125	染付蓋	SK5	10.0	—	3.9	肥前	
126	染付蓋	SK5	12.2	—	3.3	肥前	
127	染付蓋	SK5	10.2	—	3.0	肥前	
128	染付碗	SK5	12.0	4.6	4.3	肥前	
129	染付碗	SK5	12.2	5.0	5.0	肥前	
130	染付皿	SK5	18.8	10.8	3.4	肥前	
131	染付皿	SK5	11.0	6.6	2.3	肥前	
132	染付徳利	SK5	2.8	5.6	16.3	肥前	
133	染付徳利	I・SK5	—	5.6	—	肥前	
134	粉彩色絵碗	H・SK8・SK7・A3Ⅲ	10.9	2.8	6.1	中国(景德鎮)	
135	染付碗	SK7	12.0	5.0	6.5	肥前	
136	染付碗	SK25・B2Ⅲ	15.0	7.0	7.5		
137	青花碗	SK7	—	3.8	—	中国(景德鎮)	
138	染付碗	SK7	9.9	3.8	5.1	肥前	
139	染付丸碗	SK7	10.4	4.3	4.9	肥前	
140	青花皿	SK7	—	5.8	—	中国(景德鎮)	
141	鉄釉碗	SK7	—	—	—	ベトナム	
142	染付鉢	SK7	10.0	5.6	5.1	肥前	
143	染付小皿	SK7	8.6	3.8	2.1	肥前	
144	染付碗	SK7	10.4	—	—	肥前	
145	褐釉壺	SK7	—	—	—	中国	
146	朱泥蓋	SK7	—	7.7	5.6	中国(宜興窯)	
147	朱泥急須	SK7	9.4	10.6	11.9	中国(宜興窯)	
148	褐釉壺	SK7	—	—	—	中国	
149	粉彩色絵碗	SK7	8.4	—	3.1	中国(景德鎮)	
150	染付碗	SK7	21.4	11.6	3.8	肥前	
151	青花碗	SK8	—	4.8	2.7	中国(景德鎮)	
152	染付碗	SK8	10.8	6.0	5.7	肥前	
153	染付碗	SK8	11.0	5.6	5.8	肥前	
154	青花碗	SK8	—	4.6	—	中国(景德鎮)	
155	染付碗	SK8・A3Ⅲ	10.2	3.8	5.1	肥前	
156	青花碗	SK8・SK12	11.6	5.8	5.7	中国	
157	染付筒形碗	SK8	5.1	3.6	5.5	肥前	
158	染付皿	SK8	12.3	8.0	2.6	肥前	
159	青磁染付筒形碗	SK9	7.0	5.0	5.9	肥前	
160	白磁長胴壺					肥前	

第9表 遺物観察表③

番号	遺物名称	区・遺構・層	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	生産地	備考
161	アルバラロ壺	SK 9	—	6.6	—	ヨーロッパ	
162	染付油壺	SK 9	—	5.0	10.5	肥前	
163	染付碗	SK12	9.6	5.4	4.9	肥前	広東碗
164	染付丸碗	SK27	10.2	4.5	4.7	肥前	
165	紫泥小皿	SK12	—	—	—	中国(宜興窯)	
166	陶器碗	SK12	10.6	4.0	5.7	萩	
167	染付碗	SK12	10.1	3.6	4.8	肥前	
168	青磁有頸壺	SK12	8.8	6.4	14.6	肥前	
169	染付丸碗	SK27	9.8	4.0	4.9	肥前	
170	染付壺	SK27	—	4.7	11.6	肥前	
171	褐釉大ガメ	ウメガメ	61.2	31.6	98.2	肥前	
172	焼締壺	SE 1 ウラ・ⅢC- 2	—	—	—	タイ	
173	色絵蓋	SE 1 ウラ・H	9.2	—	1.8	肥前	瑠璃釉金彩
174	焼締壺	—	—	—	—	タイ	
175	色絵皿	ウメガメ 2 大皿	—	18.6	—	中国(漳州窯)	
176	青花皿	P28	13.5	7.3	2.9	中国(景德鎮)	
177	染付碗	P 6	12.1	4.6	5.8	肥前	
178	青花皿	pit26	10.2	4.8	2.4	中国	
179	染付碗	イシジキ 2 直上	10.9	4.2	6.0	肥前	
180	染付碗	イシジキ 2 直上	9.1	5.2	4.9	肥前	小広東碗
181	志野碗	イシジキ 2 直上	—	—	—	瀬戸美濃	
182	色絵小皿	イシジキ 2 直上	8.2	6.2	1.9	中国(徳化窯)	
183	灰釉土ビン	胞衣 2	—	—	8.6	肥前	最大幅:17.2
184	青花碗	胞衣 1	14.3	6.2	5.9	中国	
185	染付壺	胞衣 1	—	—	—	肥前	
186	染付碗	胞衣 1	—	—	—	肥前	
187	染付碗	I	—	6.4	6.0	肥前	
188	染付碗	I	10.8	5.0	5.7	肥前	
189	陶磁器	I	12.4	4.2	6.3	萩	
190	染付角鉢	I	—	—	2.4	肥前	
191	灰釉小杯	I	5.2	4.1	2.7	不明	
192	青白磁小ビン	I	—	—	3.8	中国	
193	色絵蓮華	I	—	—	—	中国	高さ:4.9 長さ:6.4
194	褐釉蓋	I	16.6	13.6	1.5	中国	
195	陶器碗	A 3 Ⅲ	5.4	3.4	5.5	萩	
196	色絵碗	A 3 Ⅲ	10.2	4.0	5.0	肥前	
197	染付碗	A 3 Ⅲ	9.9	3.6	4.6	肥前	
198	染付碗	A 2 Ⅲ	11.0	5.2	6.0	肥前	
199	白磁鉢	B 2 Ⅲ	13.6	6.8	11.0	肥前	
200	青花碗	ⅢC- 2	14.6	6.6	6.5	中国	
201	染付皿	B 2 Ⅲ	28.4	18.4	4.3	肥前	ハリササエ痕 5 つあり
202	染付蓋	A 3 Ⅲ	9.0	—	3.3	肥前	
203	染付鉢	A 3 Ⅲ	10.6	6.8	7.9	肥前	
204	陶器輪花鉢	H・ⅢC- 2	13.0	7.6	5.1	京か	
205	染付皿	A 2 Ⅲ	13.6	6.7	3.3	肥前	
206	青磁双耳壺	B 2 Ⅲ	—	11.8	—	肥前	
207	瓦質火鉢	—	—	—	—	日本	
208	青花碗	C 2 Ⅲ	9.6	4.0	4.8	中国(景德鎮)	
209	青花皿	Ⅲ	8.9	5.7	2.4	中国(景德鎮)	
210	青花蓋	Eトレ・B 2 Ⅲ・C 2 Ⅲ・V	8.8	—	3.4	中国(景德鎮)	
211	色絵小杯	A 3 Ⅲ	6.6	2.6	3.9	中国(景德鎮)	粉彩
212	染付小皿	B 2 Ⅲ	8.6	3.6	2.0	肥前	
213	朱泥急須	—	—	—	—	中国(宜興窯)	底部
214	青花小杯	ⅢC- 2	—	3.0	—	中国(景德鎮)	
215	土器蓋	C 3 Ⅳ	—	—	—	東南アジア?	高さ:3.6
216	紫泥急須蓋	A 2 Ⅲ	6.4	—	—	中国(宜興窯)	
217	褐釉壺	C 2 Ⅲ	—	—	—	中国か	
218	朱泥急須	P 2・C 1 Ⅲ	7.6	8.0	12.0	中国(宜興窯)	
219-a	銅板転写皿	B 3 Ⅲ	—	—	—	ヨーロッパ	
219-b	銅板転写皿	B 3 Ⅲ	—	—	—	ヨーロッパ	
220	青花小皿	C 3 Ⅲ	8.5	4.0	2.8	中国	高台内に「道光年製」
221	染付小杯	C 3 Ⅳ・B 3 Ⅳ	5.6	16.0	4.2	肥前	
222	白磁輪花鉢	C 3 Ⅳ	9.4	3.8	5.5	肥前	
223	クレーパイプ	B- 3 Ⅲ	—	—	—	オランダ	ボール
224	クレーパイプ	B- 3 Ⅲ	—	—	—	オランダ	パイプ
225	染付蓋	SK 8	10.4	—	2.8	肥前	
226	華南三彩壺	V	—	—	—	中国	
227	青花皿	Ⅷ	10.4	6.2	2.5	中国	
228	染付鉢	Eトレ	14.6	6.0	7.4	長与	
229	志野碗	EトレⅥ	—	—	—	瀬戸美濃	
230	クレーパイプ	Eトレ	—	—	—	オランダ	長さ:3.5
231	青花小杯	Eトレ	7.2	3.1	3.7	中国(景德鎮)	
232	青花輪花皿	EトレⅣ	11.8	7.2	2.8	中国(景德鎮)	
233	染付小杯	Eトレ	6.6	2.8	4.4	瀬戸?	
234	鉄釉鉢	EトレⅤ	—	—	—	中国?	
235	染付蓋	H	10.4	—	3.1	肥前	
236	白磁蓋	H	9.6	3.6	2.7	長与	
237	鉄釉壺	H	—	7.0	—	肥前	
238	青花小杯	H	6.6	2.6	4.1	中国	
239	青花小杯	H	6.2	3.4	3.1	中国	
240	青花皿	H	15.6	8.0	2.9	中国(徳化窯?)	
241	志野鉢	H	—	—	—	瀬戸美濃	
242	白磁壺	H	—	—	—	長与	アルバラロ形か?

附篇1 ガラス製品

柚木重貴子

今回調査で出土した遺物は約80点であるが、その多くが近代の板ガラスであった。近世の製品としては、ヨーロッパ製のボトル片や中国製の簪が出土しており、国産については長崎産と思われる簪、杯、小瓶などが出土している。遺物の形状が明確な19点の図化を行なった（第41図）。

・Ⅳ-2期：18世紀後半

1は小瓶の口縁部である。本来は透明であるが、風化が激しい。2・4は簪である。2は乳青色の本体に花のモチーフのガラスを装飾している。4は乳青色の本体に紺色の装飾を施しているが、装飾部のみ風化している。いずれも中国清代のガラスである。3はヨーロッパ製ワインボトルである。頸部が細長いタイプのもので、筒状の先端部分にガラス棒を巻付け口縁を形成している。

・Ⅴ期：18世紀末-19世紀

5は型吹きガラス碗である。若干表面が風化している。6は型吹きガラス杯である。全体的に風化している。7は広口瓶で薬瓶と思われる。やや風化している。以上3点はヨーロッパ製と考えられる。8は4と同様の製品であるが、上部の装飾が異なっている。9は国産の簪で、胴部に節のある形状のものである。緑色を帯びるが風化が激しい。

・Ⅴ期以降：天保9年の火災層

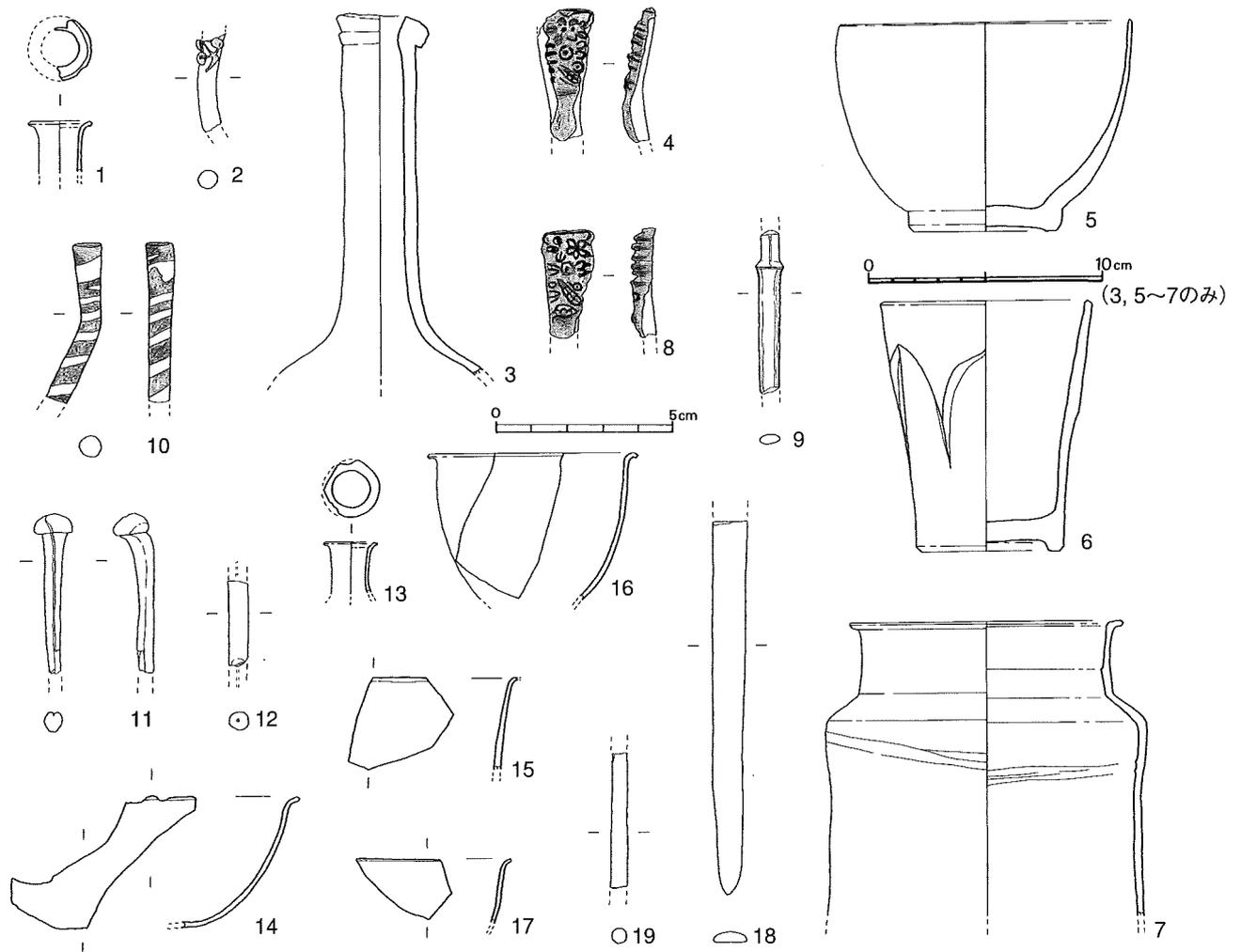
10から12は簪である。10は乳白色と緑色の棒ガラスを捻って製作している。11は頭部が霊芝状を呈している。乳青色であるが風化が激しい。形状より中国明代のガラスと考えられる。12は半透明で、中心が中空になっている。13は小瓶の口縁部で1と類似する。14から17は型吹きガラス杯でいずれもボウル状を呈している。本来透明であったものが風化している。国産と考えられる。

・表土

18は簪の胴部である。乳白色を呈し半透明であるが、風化が激しい。国産と思われる。19は簪の胴部と思われるが、不明。乳青色を呈し、中国清代の製品である。

【参考文献】

- 岡 泰正 2000「中国・明のガラス装身具 石見銀山江戸初期の地層から出土」11月30日 山陰中央新報
長崎県教育委員会 2005『長崎奉行所（立山役所）・岩原目付屋敷跡・炉粕町遺跡』
長崎市教育委員会 2003『勝山町遺跡』



第41図 ガラス製品 (1/2・1/3)

第10表 ガラス製品観察表

番号	種別	出土遺構・層位	法量 (cm) … (高さ)			備考
			最大長	最大幅	最大厚	
1	小瓶	SK22	1.45	1.80	0.1	口縁部
2	簪	SK25	2.75		0.75	乳青色
3	ボトル	SK26	15.1	8.50	1.20	ワインボトル口縁-頸部
4	簪	SK26	3.70	1.40	0.6	乳青色
5	型吹きガラス碗	SK 5	8.90(高)	12.2(口径)		
6	型吹きガラス杯	SK 5	10.5(高)	8.8(口径)		
7	広口瓶	SK 5	12.5	13.4	0.40	口径：11.4cm, 薬瓶か
8	簪	SK 9	3.10	1.40	0.65	乳青色
9	簪	SK 9	4.55	0.75	0.60	緑色 (半透明)
10	簪	C-3 III	4.50		0.80	乳白色+緑色 (半透明)
11	簪	C-3 III	4.50		1.10	乳青色
12	簪	B-3 III	2.40		0.55	半透明
13	小瓶	C-3 III	1.40	1.50	0.1	口縁部
14	型吹きガラス杯	A-3 III	3.65	5.15	0.1	
15	型吹きガラス杯	B-3 III	2.55	3.0	2.0	
16	型吹きガラス杯	C-2 III	4.0	3.85	0.15	
17	型吹きガラス杯	C-1 III	1.7	2.7	0.1	
18	簪	表土	10.5	1.0	0.25	白色 (半透明)
19	簪	表土	3.70		0.5	乳青色

附篇2 万才町出土の瓦

安村 健・鳥越 道臣

はじめに

出土した瓦は軒丸瓦・軒平瓦・鳥衾・菊丸・丸瓦・平瓦など多種・多様に上る。中には出土した遺構の時期に伴わないものもあると思われるが、これらの瓦を時期別に分けた。用語は川口洋平『長崎奉行所（立山役所跡）炉粕町遺跡』2004参照。

1. 出土瓦概説

(1) II期（第42図）

SK41 1 左巻きの三巴文。二次焼成で橙色を呈する。瓦当周縁部はタテナデ後、ヨコナデ調整。巴文と珠文との間に範痕が残る。2 左巻きの三巴文。二次焼成でやや橙色を呈する。3 左巻きの三巴文。焼成は良好で暗灰色を呈する。瓦当部にハナレ砂の付着がある。4 軒平瓦。焼成は、やや軟質で黄灰色を呈する。平瓦凹面にキザミが入る。5 軒平瓦。焼成は、堅緻で灰色を呈する。平瓦凹面にキザミが入る。6 二次焼成で橙色を呈する平瓦。凹面・凸面共にハナレ砂の付着がある。SK45 7 焼成良好で暗灰色を呈する軒平瓦。顎部の表面にはヨコナデ調整がされ、瓦当上縁と顎裏面には面取りがされている。瓦当部と平瓦凸面にハナレ砂の付着がみられる。

(2) III期（第42図・第43図・第44図・第45図）

SK32 8 17個の珠文を配する右巻きの三巴文。焼成堅緻で灰色を呈する。瓦当に複数の範痕が残る。SK39 9 右巻きの三巴文。焼成堅緻で灰色を呈する。瓦当周縁部はタテナデ後、ヨコナデ調整。瓦当部にハナレ砂の付着がみられる。10 左巻きの三巴文。焼成堅緻で灰色を呈する。瓦当外縁部にナデ調整、瓦当裏面に外周ナデ調整。瓦当部にハナレ砂の付着がみられる。11 11個の珠文を配する左巻きの三巴文である。焼成は、良好で黄灰色を呈する。瓦当周縁部は、タテナデ後ヨコナデ調整、瓦当裏面は外周ナデと接合ナデ調整。丸瓦には釘孔があり、凸面は縦方向のナデ調整、丸瓦凹面は布目痕が残る。瓦当部にハナレ砂の付着がみられる。12 8個の珠文を配する左巻きの三巴文。瓦当周縁部はタテナデ後ヨコナデ調整、瓦当裏面は外周ナデと接合ナデ調整。丸瓦は釘孔があり、凸面は縦方向のナデ調整、丸瓦凹面は布目痕が残る。13 11個の珠文を配する右巻きの三巴文。焼成堅緻で暗灰色を呈する。瓦当周縁部はタテナデ後ヨコナデ調整、瓦当裏面は外周ナデと接合ナデ調整。瓦当部に複数の範痕とハナレ砂の付着がみられる。14 左巻きの三巴文。焼成良好で灰黄色を呈する。瓦当外縁部にナデ調整、瓦当裏面に外周ナデ調整。瓦当部にハナレ砂の付着がみられる。15 中心飾りが三葉の均整唐草文軒平瓦。瓦当裏面は接合ナデ調整、瓦当上縁は面取りがされている。16 中心飾りが三葉の均整唐草文軒平瓦。二次焼成で橙色を呈する。瓦当上縁と顎裏面は面取り、瓦当裏面は接合ナデ調整がある。17 中心飾りが三葉の均整唐草文軒平瓦。暗灰色を呈する。顎部の表面にはヨコナデ調整、瓦当上縁は面取り。瓦当部と平瓦凸面にハナレ砂の付着がみられる。18 軒平瓦。焼成良好で灰色を呈する。顎部の表面にはヨコナデ調整。瓦当部と平瓦凸面にハナレ砂の付着がみられる。19

中心飾りが桐紋の均整唐草文の軒平瓦。焼成良好で灰色を呈する。顎部の表面にはヨコナデ調整、瓦当上縁は面取り。20 唐草文の軒平瓦。焼成良好で灰色を呈する。顎部の表面にはヨコナデ調整。21 唐草文の軒平瓦。焼成良好で浅黄色を呈する。顎部の表面にはヨコナデ調整。22 唐草文の軒平瓦。瓦当裏面はナデ調整。瓦当の形状や文様面の大きさなどから滴水の可能性が指摘される。23 丸瓦。焼成良好で灰色を呈する。丸瓦の凸面は縦方向のナデ調整、丸瓦凹面は布目痕が残る。24 鳥衾。残存率が悪く詳細は不明。

25 丸瓦。焼成良好で灰色を呈する。丸瓦の凸面は縦方向のナデ調整、丸瓦凹面は布目痕が残る。SK37 26 焼成良好で橙色を呈する。丸瓦の先端部と凸面にキザミが入り、瓦当裏面は接合ナデ調整。丸瓦凸面は縦方向のナデ調整、丸瓦凹面は布目痕が残る。丸瓦部には、釘孔がある。

SK41 27 均整唐草文軒平瓦。二次焼成で橙色を呈する。瓦当裏面はナデ調整。文様面の大きさなどから滴水の可能性が指摘される。28 15個の珠文を配する左巻きの三巴文である。焼成良好で灰色を呈する。瓦当周縁部はタテナデ後ヨコナデ調整、瓦当裏面は外周ナデと接合ナデ調整。瓦当外縁部と珠文との間に範痕が残る。29 右巻きの三巴文。焼成良好で暗灰色を呈する。瓦当周縁部はタテナデ後ヨコナデ調整、瓦当裏面は外周ナデと接合ナデ調整。

SK36 30 唐草文の軒平瓦。焼成堅緻で灰色を呈する。平瓦凸面の広端部にキザミが入り、瓦当裏面は接合ナデ調整。瓦当上縁と顎裏面は面取り。文様区と平瓦凸面にハナレ砂の付着がみられる。

31 唐草文の軒平瓦。焼成は良好で灰色を呈する。瓦当上端部にカキメが入り、顎裏面に面取り。32 唐草文の軒平瓦。焼成良好で灰色を呈する。顎部の表面は、ヨコナデ調整。瓦当部と平瓦凸面にハナレ砂の付着がみられる。

(3) IV-1期 (第45図)

SK33 33 右巻きの三巴文。焼成堅緻で灰色を呈する。瓦当裏面は、接合ナデ調整がされている。

SK10 34 軒平瓦。焼成良好で明黄褐色を呈する。顎部の表面には、ヨコナデ調整がされている。

SK26 35 家紋の軒丸瓦。焼成堅緻で灰色を呈する。瓦当周縁部はタテナデ後ヨコナデ調整、瓦当裏面は外周ナデと接合ナデ調整。残存する丸瓦凹面は、面取り。36 8個の珠文を配する右巻きの三巴文である。焼成堅緻で灰色を呈する。瓦当周縁部はタテナデ後ヨコナデ調整、瓦当裏面は外周ナデと接合ナデ調整。瓦当裏面に鉄が付着している。

(4) IV-2期 (第46図)

SK25 37 14個の珠文を配する左巻きの三巴文である。二次焼成で橙色を呈する。瓦当裏面は外周ナデと接合ナデ調整。38 2次焼成で橙色を呈する。当周縁部はタテナデ後ヨコナデ調整、瓦当裏面は接合ナデ調整。瓦当部にハナレ砂の付着がみられる。39 菊丸瓦。焼成堅緻で灰色を呈する。

(5) V期 (第46図)

SK 7 40 唐草文の軒棧瓦。焼成堅緻で灰色を呈する。平瓦の先端部にキザミが入り、接合ナデ調整。瓦当は角切りが施され、上縁は面取りがされている。平瓦凸面はハナレ砂の付着がみられる。

SK11 41 15個の珠文を配する右巻きの三巴文である。焼成良好で暗灰色を呈する。瓦当上端部にカキメが入り、瓦当裏面は外周ナデと接合ナデ調整。瓦当外縁部と珠文との間や珠文と巴文との間に範痕が残る。瓦当部にハナレ砂の付着がみられる。

SK 8 42 中心飾りが三葉の均整唐草文軒平瓦。焼成堅緻で灰色を呈する。顎部の表面にはヨコナ

デ調整，瓦当上縁と顎裏面には面取り。瓦当部と平瓦凸面にハナレ砂の付着がみられる。43 8個の珠文を配する右巻きの三巴文である。焼成良好で灰色を呈する。瓦当の大きさから軒棧瓦と思われる。

SK9 44 花卉の軒平瓦。焼成は，良好で暗灰色を呈する。瓦当上縁は面取り。文様区にハナレ砂の付着がみられる。

SK27 45 中心飾りが宝珠文の軒平瓦。焼成は良好で黄橙色を呈する。平瓦の先端部にキザミが入り，接合ナデ調整。瓦当上縁は，面取りがされている。

2. ま と め

I期の遺構からは，瓦の出土は認められなかった。町建て時代に瓦は使用されていなかった可能性が高い。

II期になると瓦の出現が認められるが，丸瓦・平瓦の数量に比べると軒瓦の数量が少ないように思われる。軒平瓦は破片のものが多いため詳細は不明。軒丸瓦は1・2・3共に巴尾がくつつき圏線状になるという若干古手の様相がある。1の巴頭の断面は三角で他の瓦には見られない特徴を持っている。

III期になると，爆発的に瓦の量が増える。軒丸瓦は，文様は巴尾がくつつき圏線状になるのもと，くつつかないものがあり過渡期の様相をうかがわせる。大きさは型式化され，直径が14cm～15cmとほぼ統一される。軒丸瓦の丸瓦部の凸面には，接合時の調整台の痕跡が多く見られる。軒平瓦の15・16は長崎奉行所 NH161A と同範。長崎奉行所では熊本県天草郡苓北町にある富岡城から運ばれたものとされるが，奉行所は延宝元年（1723）に置かれたもので，寛文3年（1663）の寛文の大火とは時期が異なる。現在も富岡城周辺には瓦屋が多く存在し，富岡城から奉行所に瓦が運ばれる前に富岡城周辺の瓦屋が長崎に瓦を搬入，もしくは工人が長崎のどこかで瓦を製造していた可能性が高い。9も奉行所 NM371A と同範。22・27は滴水。滴水は中国系の瓦で現在でも寺町の興福寺など，中国系のお寺のお堂には復元されて葺かれている。今回の調査地は民家であり，滴水が出土したことは注目すべきことである。

IV-1期35は接合技法や文様などから金屋町遺跡出土の瓦と同文。36は奉行所 NM311A と同範。

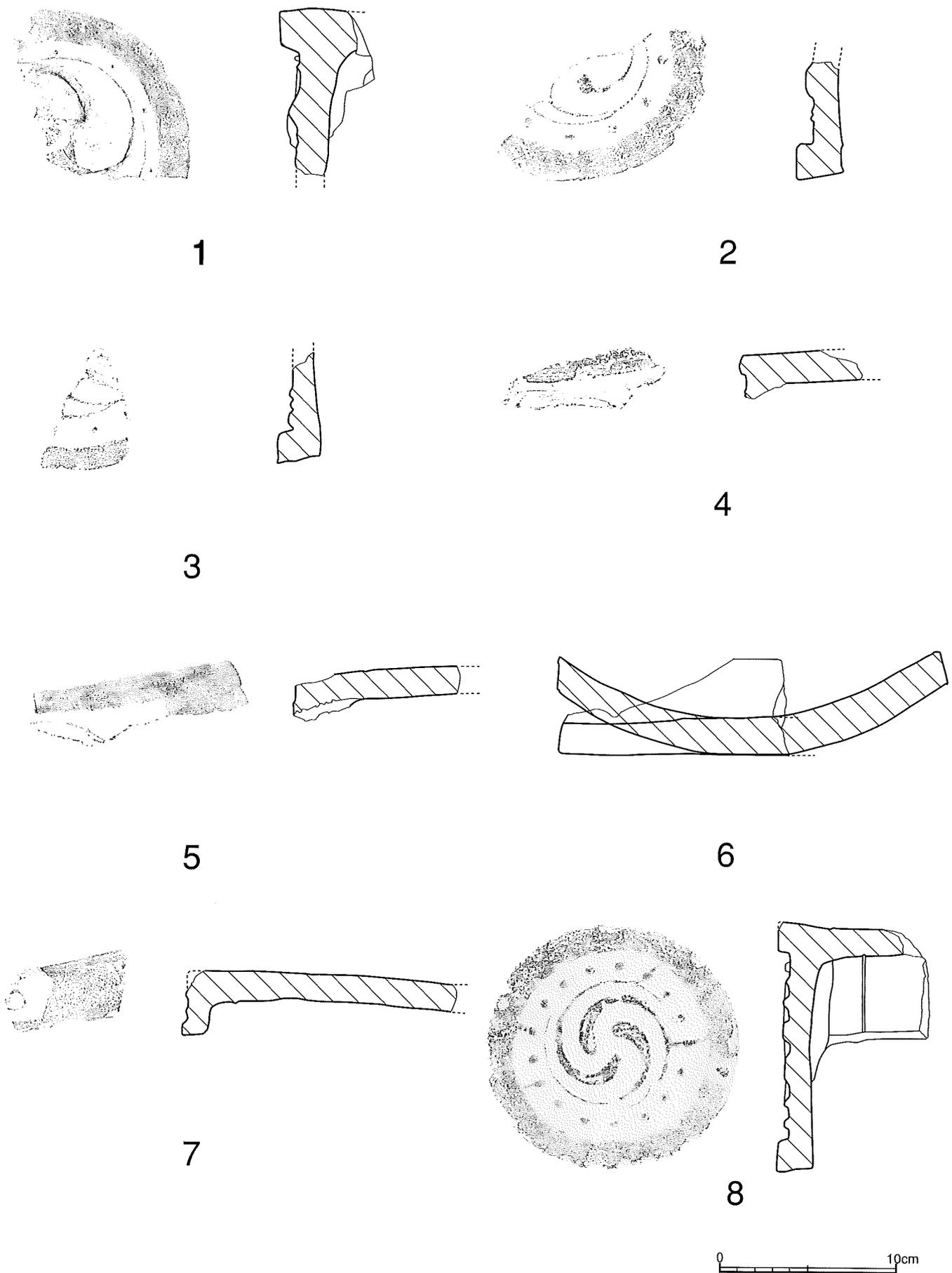
V期42は15・16と同範。45は中心飾りが宝珠文。文様や瓦当上縁の面取りの幅などから，長崎町建て前に製作されてその後持ち込まれた可能性がある。

今回の調査では，棧瓦がほとんど出土しなかった。寛文の大火後に火災に遭うのは18c後半である。おそらくこの間瓦の差し替えはあったにせよ建物自体の立て替えは無かったものと思われる。

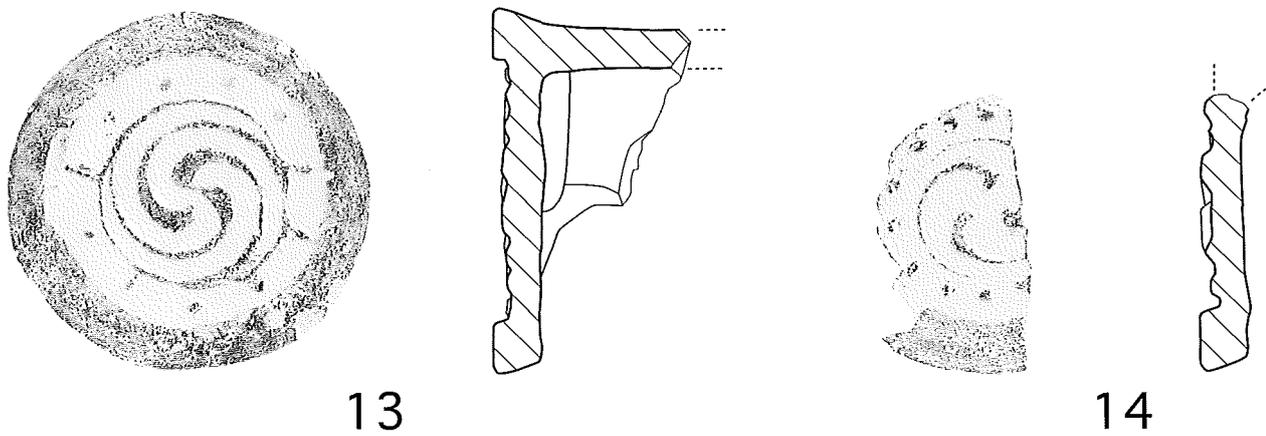
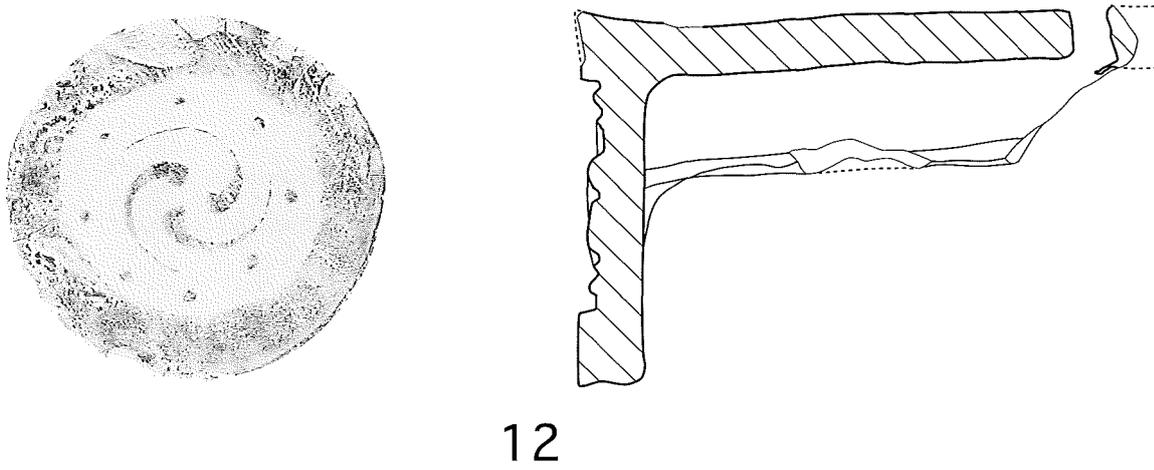
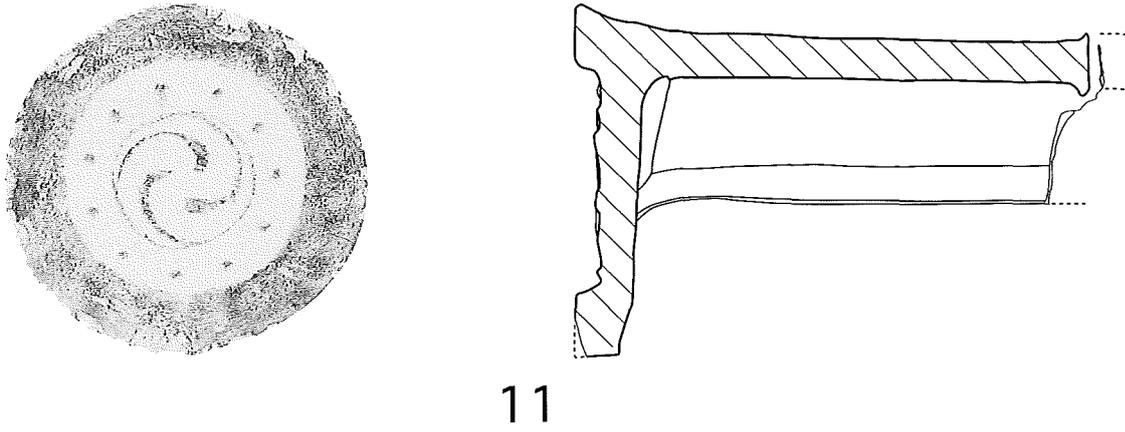
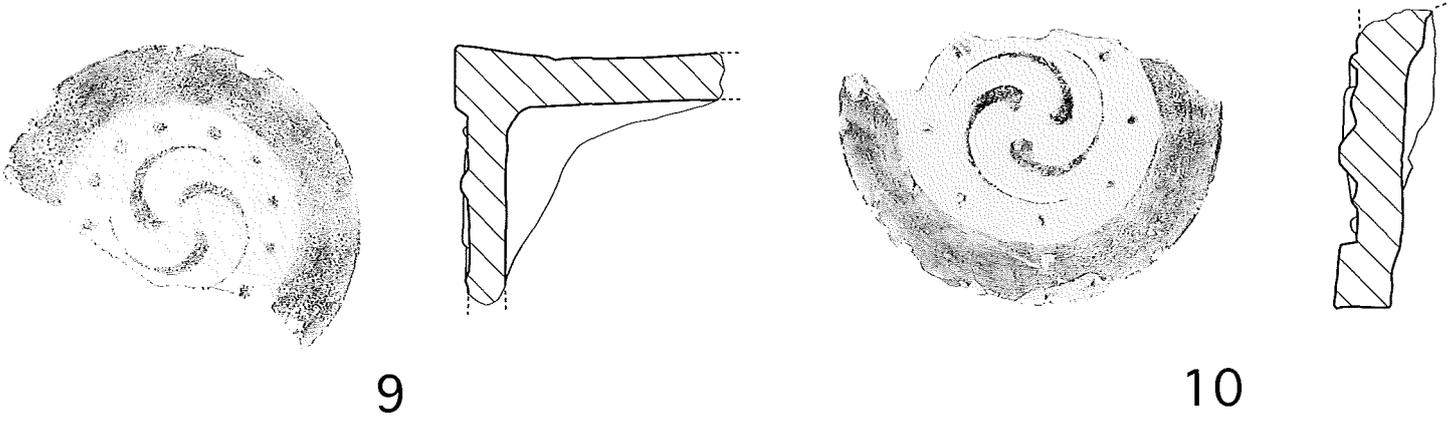
なお，事実記載は鳥越が，まとめは安村が担当した。

【参考文献】

- 宮崎貴夫・寺田正剛編 1995『万才町遺跡』長崎県文化財調査報告書 第123集
- 長崎市埋蔵文化財調査協議会 1996『万才町遺跡』
- 熊本県天草郡苓北町教育委員会 1996～2002『苓北町文化財調査報告 富岡城 I～V』第4～8集
- 長崎市埋蔵文化財調査協議会 2002『金屋町遺跡』
- 川口洋平編 2004『長崎奉行所（立山役所）跡・炉粕町遺跡』長崎県文化財調査報告書 第177集



第42図 軒丸瓦・軒平瓦・平瓦

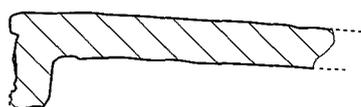


0 10cm

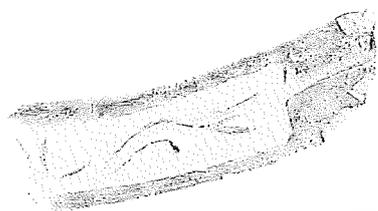
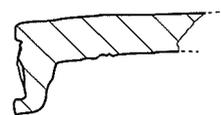
第43图 軒丸瓦



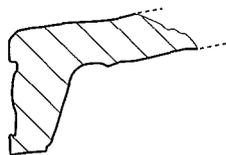
15



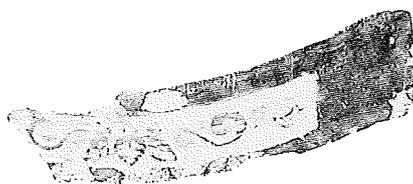
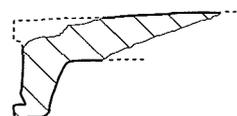
16



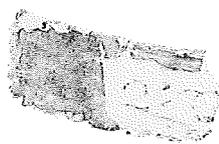
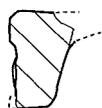
17



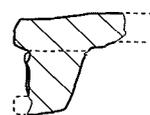
18



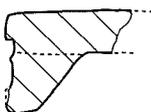
19



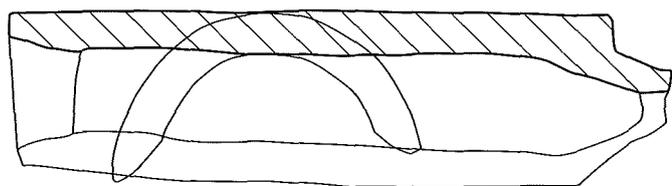
20



21



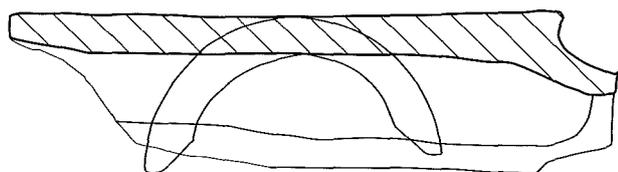
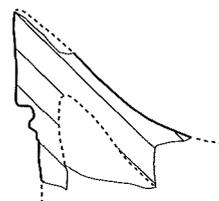
22



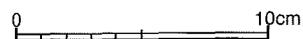
23



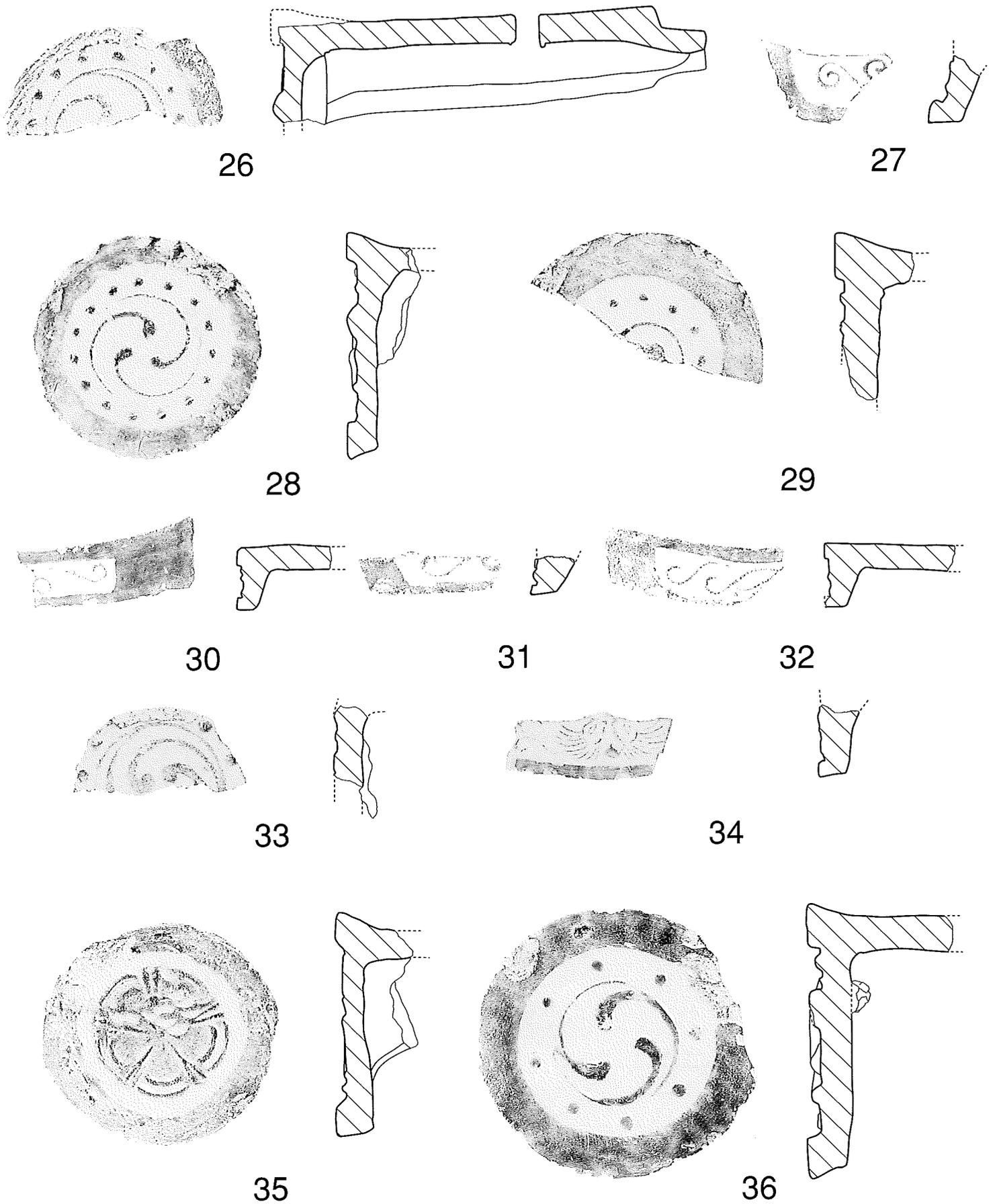
24



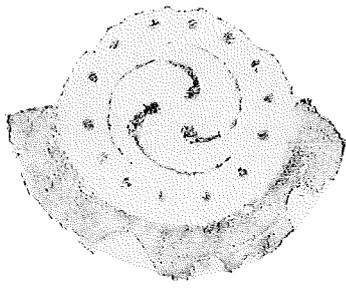
25



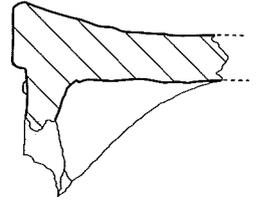
第44图 軒平瓦・丸瓦・道具瓦



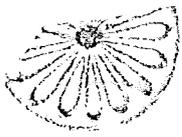
第45图 軒丸瓦・軒平瓦



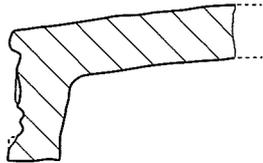
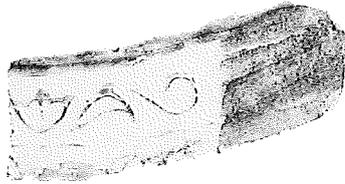
37



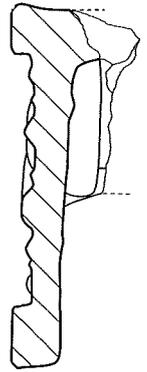
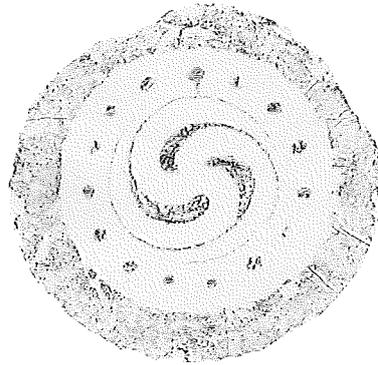
38



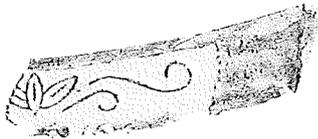
39



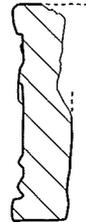
40



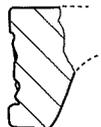
41



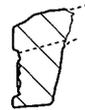
42



43



44



45



第46图 軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦

附篇3 長崎市万才町遺跡出土の動物遺存体

土岐 耕司・皆川 貴史

はじめに

万才町遺跡の基本土層及び遺構から出土した動物遺存体について、同定・整理を行った。同定の方法は、主に現生骨格標本との肉眼対象比較により行い、魚骨は土岐が、それ以外は皆川が担当した。なお、哺乳類の同定にあたっては、横須賀考古学会の剣持輝久氏のご協力をいただいた。写真撮影は皆川が行い本篇の編集は土岐が行った。

第11表 遺構出土の動物遺存体

出土地点	時期	哺乳類・鳥類	魚類	貝類他
SK4	I or II期	イノシシ ul 左1	マダイ pm 左1	
SK5	V期			トコブシ1, トコブシ?1, サザエ2, サザエ?1
SK7	V期		マダイ fro 1・fro 右1・dent 左1・ve 1, 不明 ve 1	
SK8	V期	カモ?hu 左1, アホウドリ?ul 左1	マダイ dent 左1・op 右1, サメ類 ve 3, 不明 max 左1・右1(解)・ve 1	
SK11	V期		マダイ dent 右1(解), ハモ?dent 左1, ホウボウ科	
SK12	V期	ネズミ pel 1	マグロ?ve 1	
SK24	IV-2期	鳥類 ul 1		
SK25	IV-2期		不明 dent 1	二枚貝1
SK27b	V期		マダイ fro 左1・pm 右1・ve 1, ハタ科 dent 右1(解)・pop 左1(解), 不明 ve 1(解), 破片 2(解)	
SK31	II期		ハタ科 ve 1	
SK32	III期	鳥類 cla 2	ハタ科 max 1, フグ科?ve 1	
SK33	IV-1期	ウマ ast 左1, 不明 mand	マダイ fro 左1(解)・右3(解1)・supo 2・pm 左1・dent 左3, ハモ?pm 2・dent 左2, ハタ科 pop 左1・右1, スズキ属 max 左1, 不明 max 右1・ve 1	ウミナナ1, ハイガイ左1・右1
SK36	III期	キジ?fe 右1	小型魚 ve 1	
SK38	III期	ウシ rad 左1, シカ sca 左1		
SK39	III期	シカ?mt 左1	マダイ dent 右1	
SK40下	III期	ウシ rad 右1		
SK41	III期	不明 mand?1, 獣不明1(解)		
SK45	I or II期	ウシ or ウマ tib 1, ウミウ?mc 左1		
Pit 6		キジ?hu 右1・ul 左1	ハタ科 dent 右1, 不明 ve 1	サルボウ左37・右40・左右1, ハイガイ左2・右1, アサリ?左11・右19, 二枚貝左1
SD 1		イノシ歯(P4) 1		
SE 1 ウラ		ドブネズミ mand 1	ハモ?dent 右1, 不明 ve 1	アワビ類1, テングニシ1
埋甕2			マダイ pm 右, ハモ?dent 右1, 不明 max 右1・ve 1	
石敷2				アワビ1, ニシキウズガイ科?1

第12表 基本土層とその他出土の動物遺存体

出土地点	時期	哺乳類・鳥類	魚類	貝類他
表土		ヒメウ?fe右1, アビ類 mt 右1, 鳥類 mt 1	マダイ fro 1・pm 左1・右1, ハモ?dent 左1, ハタ科 pm 左1・ve 1, ヒラメ?ve 1, ホウボウ科, 破片1(解)	アワビ?1, アカエシ?1, イタヤガイ科?1
I層			ハモ?dent 右1	二枚貝1
Ⅲ層		イノシシ tib 左1(解, 若獣?), キジ hu 左1・ul 左1・cor 右1, キジ?hu 左1・右1・ul 左1・ 橈骨3, ニワトリ hu 右1・ul 右1・ tib 左2・右1・mt 右1, セグロカモメ?足根骨?1, カラス?mc 右1, 鳥類 hu 1・mt 左1・cor 左1, 不明 rib 1	マダイ fro 2・左3(解2)・右1・ supo 2(解1)・pm 左3・右3・ max 左2・右1・dent 左2・右4・ ang 左1(解)・右1・pop 左1・ op 左2(解)・ve 4, ハモ?pm 5・ dent 左3・右1, ハタ科 pop 左1・ve 3, サメ類 ve 1, カツオ?ve 1, フグ科 dent 右1, 不明 max 右1・ang 左1・ve 2, 破片10(解)	クロアワビ?2, アワビ類3, サザエ蓋1, アケガイ科1, クボガイ?1, エゾバイ科?1, ハイガイ左1・右1, 巻貝類3, 二枚貝6・左2
IV層			マダイ fro?1, ハタ科 dent 左1, 不明 ve 1	
IV~VI層		鳥類 ul?rad?1	マダイ pm 左1・右1・max 右1・ dent 左1(解)・右2, アンコウ科?dent 左3・右2	
V層		鳥類 tib 左1	サメ類 ve 1	
層位不明			マダイ fro 右1, コチ科?dent 右1	サザエ蓋1
東トレンチ		獣 tib 左1(解), 鳥類 hu 1・mc 2	マダイ supo 1・pm 左1	

1. 表記の方法

表記にあたっては、同定に通常用いられる部位を中心にカウントし、各地点からの動物遺存体の出土状況を表11・12に示した。表スペースの都合上、各部位を細分する「遠位端」「骨幹」の表現は省略したが、資料数が少ないため、別々にカウントしたものに同一個体の同一部位が含まれている可能性は少ないものと思われる。解体痕と思われる人為的な傷や切り口が認められるものは、同定部位であるか否かに関わらず、「(解)」と表記し、骨片数も示した。

2. 概観と特記事項

解体痕が認められる骨片が散見され、特に魚骨にそれが顕著であった。具体的に解体・調理・食事のどの段階で残された痕跡かは想像の域を出ないが、これらの動物は食用とされたと考えるのが妥当であろう。これらの遺物の出土状況を検討することにより、「ゴミ穴」目的で構築された遺構を推定できるものと思われる。出土はⅡ期～Ⅳ-1期に帰属する遺構が殆どであるが、禁教令以前のポルトガル人居留時代であるⅠ期に帰属する可能性がある遺構からも僅かに出土している。出土資料数が少ないため、多くのことを語ることはできないが、Ⅰ～Ⅴ期を通じて出土動物の傾向には、大きな変化があるようには感じられない。また、遺構外である基本土層中や表土からも多くの動物遺存体資料が出土していることから、この区域において食用動物の解体・調理・廃棄が盛んに行われたことが窺える。

(1) 哺乳類

大型獣ではウシ・ウマ・シカがみられ、食獣があったことが予想される。出土部位は四肢骨が殆どであるが、下顎骨や歯もみられる。遺跡は平戸町の町屋と推定され、製鉄・鍛冶関連の遺物が出土しているとのことであり、どのような階層の人々が食獣・廃棄したものであるか、興味深いところである。資料が少なく、付近での屠殺があったのか、食材とするならばどのような状態で搬入されたのか等、検討材料を欠くところである。

小型獣ではネズミの下顎骨等が認められた。ネズミについては食用と考えるより、ゴミ穴に群がっ

てそのまま死んだものか、駆除されてゴミ穴へ一緒に廃棄されたものとするのが妥当であろう。

(2) 鳥類

同定に至らずとも鳥類骨であることが分かる骨片も含めると、多くの遺構・土層から出土している。同定部位は全て四肢骨となったが、哺乳類骨に比べて鳥類骨は脆弱であり、遺跡で残りにくいこと、人間の食べかすをイヌが餌とした可能性もあることから、鳥類はカウント数以上に積極的に利用されたと推定される。カモ等の中型クラスからアホウドリ大のものまでが認められた。

(3) 魚類

マダイの出土数が突出している。椎骨のように種までの同定が難しいものも含まれるが、種同定が可能な顎骨等にマダイ以外の種が出土していないこと等から、タイ科の各骨については全てマダイと判断し、表記した。現生標本との比較や前上顎骨の測定から、体長25~60cmのものがみられるが、概ね45~50cmのものが殆どである。解体痕が多く認められ、前頭骨が左右に割られているのがみられることから、「兜割」されたものと思われる。顎骨や鰓骨にも鋭い切り口で分割されているものがあるため、「兜煮」のような調理法で食されたのではないか。マダイに次いで多いのがハモ?である。これについては、他のウナギ目の現生標本に乏しく、十分な対象比較ができなかったため、ハモ以外の種である可能性もある。同定部位は前上顎骨及び歯骨にほぼ限られ、左右が癒合した前上顎骨は特徴的であった。魚類全般に言えるのは、頭部の骨が多く、それに比べて椎骨が非常に少ないということである。食材がどのように搬入されたのか、廃棄が調理段階のものか食後のものかを考える上で重要な要素であると言える。

(4) 貝類

Pit 6 からまとまった形でサルボウが出土した。左右の貝殻の数がほぼ一致すること、左右の殻がつながったままのものがみられることから、貝殻だけが搬入されたのではなく、中身が入った状態、即ち食材として搬入されたものと考えられる。サルボウは西日本の内湾に多く生息しており、直近の産地としては有明海が名高い。その他アワビ類・サザエ・ハイガイ等があり、異国人在留の有無に関わらず、近世長崎の遺跡ではポピュラーな貝種と言えよう。

(5) その他

少量ながらサンゴ類が出土している。所謂「枝サンゴ」の他、塊状のものも含まれているが、これらが何かに利用されたかどうかは不明である。

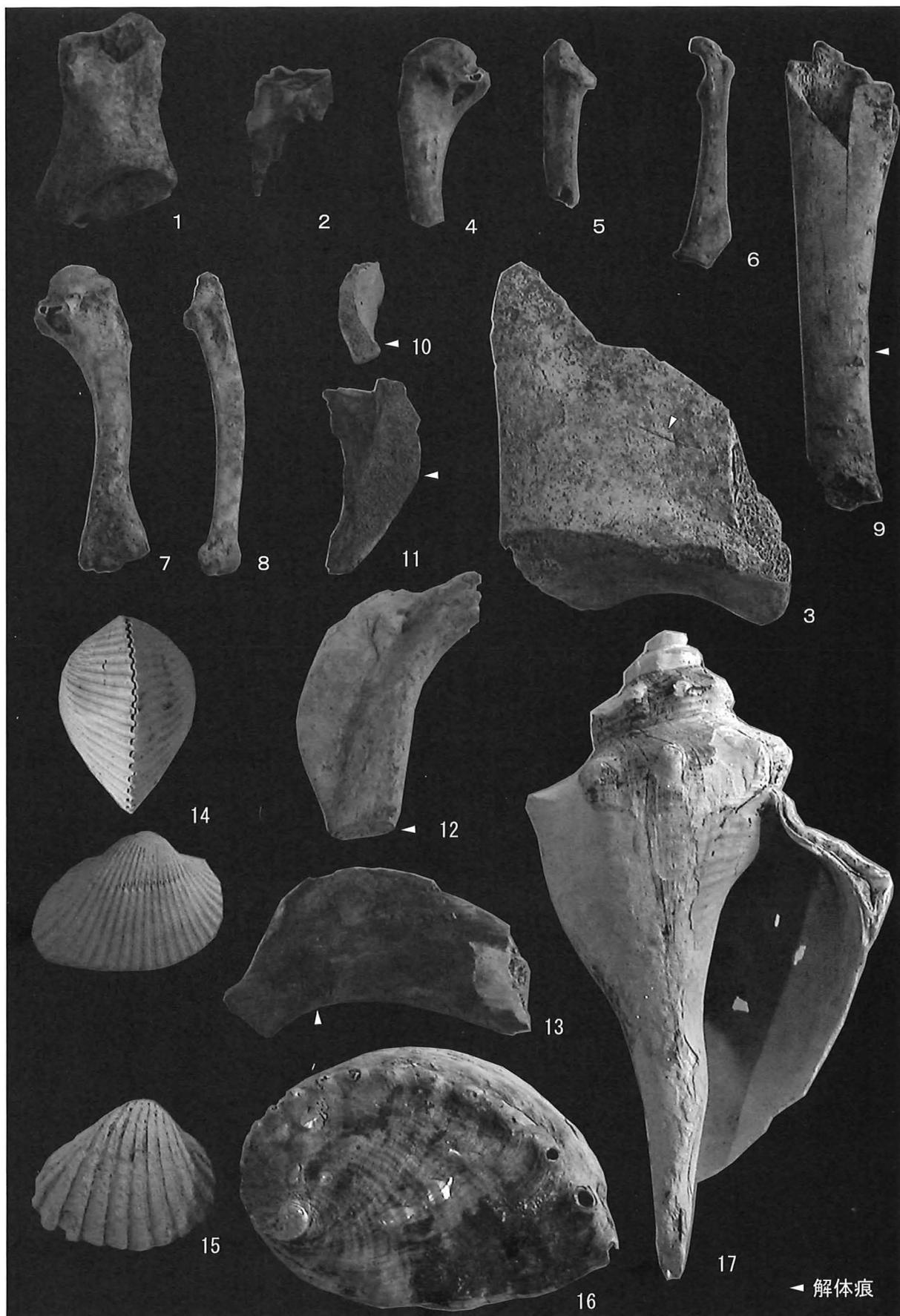
おわりに

万才町遺跡は、16世紀末の「長崎六ヶ町」成立以降、近世を通じて人々が生活を営んだ場である。出土した動物遺存体資料はその生活実態に迫る可能性を十分に含んでおり、更なる定量分析や個別観察を行うことにより、多くの情報が得られるものと考えられる。また、骨片に残された解体痕からは、解体・調理道具の使用法だけに留まらず、調理法をも推定できる余地があり、長崎地域に伝わる郷土文化をも併せ考えることも有意であろう。

整理・編集作業が充分でなく、分析報告としては不十分なものになってしまったが、今後これらの資料が更に解析され、地域文化財に資されることを期待したい。

【参考文献】

- 西本豊弘・松井 章「考古学と動物学」『考古学と自然科学-②』同成社、1999
- 鈴木公雄『貝塚の考古学』東京大学出版会、1989
- 樋泉岳二「遺跡産魚骨同定の手引き」『動物考古学』2、1994
- 上野輝彌・坂本一男『魚の分類の図鑑』東海大学出版会、1999
- 松井 章『環境考古学への招待』岩波新書、2005



1：シカ左肩甲骨(SK38)，2：イノシシ歯(SD1)，3：解体痕のある獣骨(SK41)，4：キジ左上腕骨，5：キジ左尺骨，6：キジ右鳥口骨，7：ニワトリ右上腕骨，8：ニワトリ右尺骨，9：獣骨左脛骨，10～13：解体痕のある魚骨，14：サルボウ，15：ハイガイ，16：アワビ類，17：テングニシ ※4～8，12・13：A3Ⅲ層，10：SK27，11：SK33，14・15：PIT6，16・17：SE1裏込

PL1. 万才町遺跡出土動物遺存体

第Ⅳ章 ま と め

1. 発掘調査成果の概要

今回の調査を実施した平戸町は、過去に発掘調査を実施した大村町（長崎県教委1995）に隣接しており、いずれも長崎で最初に町建てされた六町に含まれる。調査では、大村町との面的な連続性を考慮しながら、共通点と異なる点の抽出に努めた。基本的には、大村町の調査で整理された町建てから明治に至るⅠ～Ⅴ期の時期区分に対応する変遷がみられたが、遺構の在り方や遺物の出土状況には異なる状況もみられた。以下に各期の状況を概観してみたい。

Ⅰ-1期…最下層面である。1571年の町建て時の整地面は、地山の凸部を削って凹部に充填し、その上に白っぽい粘土で整地を行っていた。遺構としては、1601年の火災以前に廃絶したと考えられるSD6があり、火災廃絶の遺構と分離してⅠ-1期とした。1601年と考えられる焼土層は薄く堆積しているが、層位から明青花が出土している。

Ⅱ期…1601年と考えられる火災層の上には、地山粘土による整地がみられたが、この整地層を掘り込んだ遺構として、栗石を入れた溝SD1や地下室と考えられるSK4などがある。これらの遺構からは、焼土や火を受けた瓦や壁土などがまとまって廃棄されており、火災後の処理遺構と考えられる。陶磁器は、1620～30年代の肥前磁器などが主体であるが、1650～60年代の陶磁器が数点出土しており、通常の考古学の方法論では、これらの遺構は後述する寛文大火を下限とする遺構とすることが妥当である。ただし、『平戸オランダ商館長日記』などの文献で、寛永十年（1633）に付近で火災の記録がみえることや、寛文大火が下限であることがほぼ確実なSK32などの出土遺物と比較すると、遺物の主体年代が明らかに古く、1650～60年代の遺物の混入の可能性を否定できない。したがって今回、同様の出土状況を示すSK4・45・47については仮にⅡ期としたが、検討の余地がある資料としておきたい。なお、SK4・45からは瓦がまとまって出土しており、蔵であったと推測されるが、長崎の町屋における瓦の早い段階での使用例として重要である。さらに、SK4出土の金属製の十字架は、キリシタン時代の終わりを告げる資料として意義深い。

Ⅲ期…寛文三年（1663）大火での廃絶遺構、あるいは火災後の整理遺構である。隣地の大村町の調査では、整理土坑から海外輸出向けの肥前陶磁が大量に出土したが、今回はそのような状況はなく、磁器と陶器が半々の割合で含まれているなど、消費地的な印象を受ける。少なくともこの時期の居住者は、肥前陶磁の海外輸出には積極的に関わることはなかったのではないだろうか。SK39などでタイ産の焼締め四耳壺を埋甕にするなど、海外貿易との関わりはうかがわれるが、貿易商人と言えるほどの密度ではない。

Ⅳ期…寛文大火後の遺構で、18世紀代のゴミ穴などが主体である。含まれる遺物の年代から細分しているが、画期がみられる訳ではない。散発的に中国陶磁などがみられるほかは、目立った特色はない。商業との関わりも見い出せず、一般的な町屋であったのだろう。

Ⅴ期…厚い炭化物の層が堆積しており、火災との関連が推測されるが、羽口が出土していることから、この時期に敷地内で何らかの精錬を行っていたと考えられる。炭化物は、きめが細かくフカフカとしており、遺物は19世紀代のものを含む。明治期には、敷地をかさ上げして新たな生活面を造成している。この時期にはSK5の亀山焼風の供膳具一式があり、前代までに比して瀟洒な一面が認められる。

2. 発掘成果と関連資料の比較

今回の発掘成果について、文献や絵図面などの関連資料との比較から若干の考察を行ってみたい。六町の町建ての経緯については一次史料は現存せず、江戸時代に成立した地誌類によって知られるのみであるが、平戸町に関しては、比較的早い時期の文献史料として『平戸町人別生所糺』がのこっている(註1)。各世帯の構成、性別、年齢、出身地などと共に、いつキリシタンから転宗したかが記されている。寛永十九年(1642)年の人別帳をみると、朝鮮の役で朝鮮から連れてこられ、マカオに売られてキリシタンになり、その後長崎へ戻った川崎屋助右衛門尉や、やはり朝鮮の役で連行され、長崎でキリシタンになってマカオへ渡り、帰国後にポルトガル人の子を養っていたため、寛永十三年にマカオへ追放された池本小四郎などなど朝鮮出身の者が多い。また、横瀬孫右衛門尉のように両親が中国人で、倭寇にさらわれて長崎に来た例などもある。この時期の平戸町の住人は、出身地が多国籍に及び、劇的な来歴を持ったものが多かったことがわかる。こうした記録は、荒野泰典のいう「諸国民雑居の状態」(註2)を具体的に示す史料と言える。

同時期の発掘成果としては、地下室をもった瓦葺きの倉庫の存在が推測されるが、住居については具体的な情報を得ることができなかった。陶磁器については、中国産の比率が国産を上回っており、中国産が圧倒するⅠ期と同傾向を示す。また、牛骨の出土がこの時期までに限られることは、ポルトガル人など西洋人の居住を間接的に示すものと考えられる。

平戸町の詳細な絵図としては、正徳年間(1711~1715)に成ったとされる『平戸町絵図』(長崎歴史文化博物館蔵)があるが、調査地点に相当する居住者としては「大坂屋源八」と記されている(巻頭カラー参照)。東西奥行きの間数は「入十三間三尺」(約24.5m)となっており、これは現在の通りから東側の石垣までの距離とほぼ一致している。大坂屋は、平戸町南端の角から二軒目にあたるが、敷地奥の石垣の角が現存し、ここの南北の奥間口が「二間六尺式」(約5.4m)で、大坂屋北側の隣家の境と現在の県庁新別館駐車場南側の境がほぼ重なっていることがわかる。大坂屋については、寛永十一年から幕末までの『平戸町人別生所糺』に名がみられ、江戸期を通じて平戸町の居住者であったことがわかる。居住地そのものは変化した可能性もあるが、寛永年間には町乙名も勤めた記録があり、比較的有力な家系であったのだろう。寛永十九年の記録には、大坂屋弥右衛門尉とその女房、二人の男子のほかに、六人の下人が記されている。弥右衛門尉は京都出身で元和元年に長崎に来たことがわかり、下人の中には、95歳となっていた朝鮮人の下女もいた。二人の下人を除いてキリシタンであったが、弥右衛門尉は元和頃、女房や下人、下女は寛永六年(1629)から九年(1632)にかけての間に転宗したことがわかる。調査では、地下室SK4から十字架が出土しているが、寛永か寛文かという年代の問題はあるものの、状況的には火災時までには保管されていたものと考えられ、記録上の転宗との関連が生々しく感じられる。転宗時に棄てたのか、あるいは密かに保持されていたのであろうか。

調査にあたっては安村健氏の献身的なサポートに負うところが大きかった。また遺物については、各方面の研究者から無償で玉稿をいただいた。あわせて感謝申し上げたい。本県の埋蔵文化財行政の転換期における様々な困難が重なる中での調査・報告となり、遺跡の重要性に比して簡易な内容の報告書となってしまったが、この責は別の機会をもって果たしたい。

【註】

- (1)武野要子 校注1975「寛永十九年平戸町人別生所糺」『日本年生活史料集成6 港町篇Ⅰ』文彩社
- (2)荒野泰典 2003「江戸幕府と東アジア」『日本の時代史14 江戸幕府と東アジア』吉川弘文館

図版 1



調査風景（東から）



SK 4 遺物出土状況（西から）



SK 4 クルス出土状況



SK 4 完掘状況（南から）



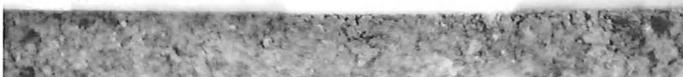
SK31完掘状況（西から）



SK41遺物出土状況（北から）



SK41遺物出土状況



SK41出土銭貨（寛永通宝）

図版 3



SD1 完掘状況 (南から)



SD1 完掘状況 (西から)



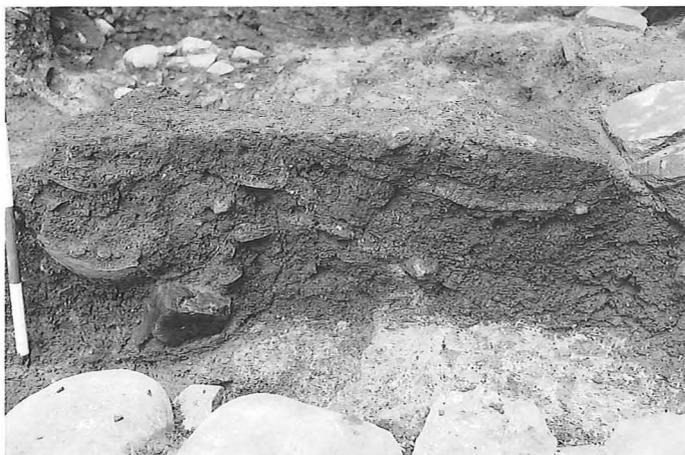
SD1 完掘状況 (西から)



SD6 検出状況



埋甕 1 検出状況 (北から)



埋甕 2 土層 (西から)



石組 1 検出状況 (南から)



石組 2 検出状況 (西から)

報告書抄録

ふりがな	まんざいまちいせき							
書名	万才町遺跡Ⅱ							
副書名	県庁新別館増築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第192集							
編著者名	川口洋平・中尾篤志・平田賢明							
編集機関	長崎県教育委員会							
所在地	〒850-8570 長崎市江戸町2-13 TEL095-894-3383							
発行年月日	西暦2007年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まんざいまち 万才町遺跡	ながさきし 長崎市 まんざいまち 万才町	201	94-22	32° 46' 49"	130° 1' 24"	060215) 060331	180	県庁新別館 増築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
万才町遺跡	集落跡	近世	地下室・ 廃棄土坑	陶磁器類・瓦類 ・ガラス製品				
要約	標高10mの河岸段丘上に立地。1571年の近世長崎の成立から江戸・明治・大正時代にかけての遺構群を検出。火災に伴う整理土坑や地下室とみられる土坑等を検出した。また、町建ての時期まで遡る可能性のある溝状遺構の検出は特筆すべき成果である。遺物は大量の陶磁器類や瓦類，ガラス製品などが出土した。							

長崎県文化財調査報告書 第192集

県庁新別館増築工事に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

万才町遺跡Ⅱ

平成19年（2007）3月31日発行

発行者 長崎県教育委員会

〒850-8570 長崎市江戸町2番13号

☎095-824-1111

印刷所 株式会社 昭和堂

長崎県諫早市長野町1007-2

☎0957-22-6000